特12-166
1200600232462

特12
955
特12
166
No 5974

釋迦八相傳文庫全部

万亭應賀先生　著
猩々曉齋先生補画

上乃卷

東京書肆　金松堂發兌

東京書肆　金松堂發行

八相逆傳文車全部

建久時齋北生補画
万亭應賀先生著

免板
權許

釋迦八相倭文庫全部序

夫佛家ゟ所謂三寶と稱する物は其身煩惱心を斷盡して妙智圓覺ゟ登る者を佛と稱して一寶とす天下の萬民に徧く通達する玄妙幽寂なる正教の精誠の理を法と稱して一寶とす能佛の禁戒を守りて威儀凡俗を放れ衆生を教化する者を僧と稱して一寶と す以上の三寶一致して庶人を善道に教へ導く人身第一の要寶なれば是に從ふ者は必ず常樂を證し之に背く者ゟ苦海ゟ沈めぞも是をも亦哀憐救護する

阿字は十方を照せば天に屬し彌字ハ一切を扶れば
人に屬し陀字は八萬の諸行を資れば地ヨ屬す此廣
大の功德を說て凡夫の罪障を拔除する大恩教師の
化儀とても無智短才の者は眞の法意を得難けゞは
既ヨ正行の功德よりも念佛の功德は勝れりとある
其佛語ヨ賴て予婦女子の爲に越法罪を顧ぎ猥りヨ
經說を模擬したる稗史なれば合掌嗤蜆等の務ヨ替
て希ふ無量壽の長き物語りに倦て中途半讀に眠
を催し夢に彌勒の出世を待ぎ此全部滿尾の彼岸ま
で眼を至らせらる君達は終ヨ氣力の其果福を正し
く二世に得給べしと玆ヨ結加趺坐して爾白

自他平等

○我人のへだてをなして汲わけし
水は器の違ふまでなり

明治十八年二月
民家和合日發市

萬亭應賀誌 吉祥

新刊附言

此同名の双紙倭文庫ハ過ヨし天保の末年ヨ其初編を發行せしより逐次五十八編に至るまて三十餘年の星霜を經て廣く世上ヨ頒布せしい謂ゆる佛天の冥加にもやと思ひしヨ寸善尺魔のいいれにや明治五年十二月八日の回祿ヨ元版悉く燒失してけり爾來諸府縣の看客より屢〳〵新古の冊子を購求せんと促し給ふものから近頃或る二三の書肆に於て此書二三編と飜刻せしも皆其局を結ぶに至らず何れも中絶せしを當今府下に有名なる書肆金松堂ハ是を深く惜ヨ愁ひて今回巨額の金圓を抛ちて速かに全部發兌の業を成就し半途の舊本を所持せらるヽ婦女子ヘ對し年來大尾懇望の思ひを滿たしめ喜悦せしむる事ハ商業のリねながら實に能く務兌たれぞも予ハ長病中此需に應ぜしもヘ止を得ず備書に賴りて著意の都合を述て託せし編もあれば其中にハ傳聞闇記の誤もあるべく尙活字を以て印刷せしかば其誤植もあるべきが夫等の誤ハ他日自ら之を正すとあらん看客偏に是を納れ給へと伏て餘言を加へるものなり

著者述

優陀夷夫婦淨飯大王の一子悉達太子を奉守まる

うぐいの女房

むら門優陀夷

提婆羅樹

命婦

太子

善覚大臣の娘姉妹鞠曇弥浄飯摩耶夫人浄飯大王ふ嫁も

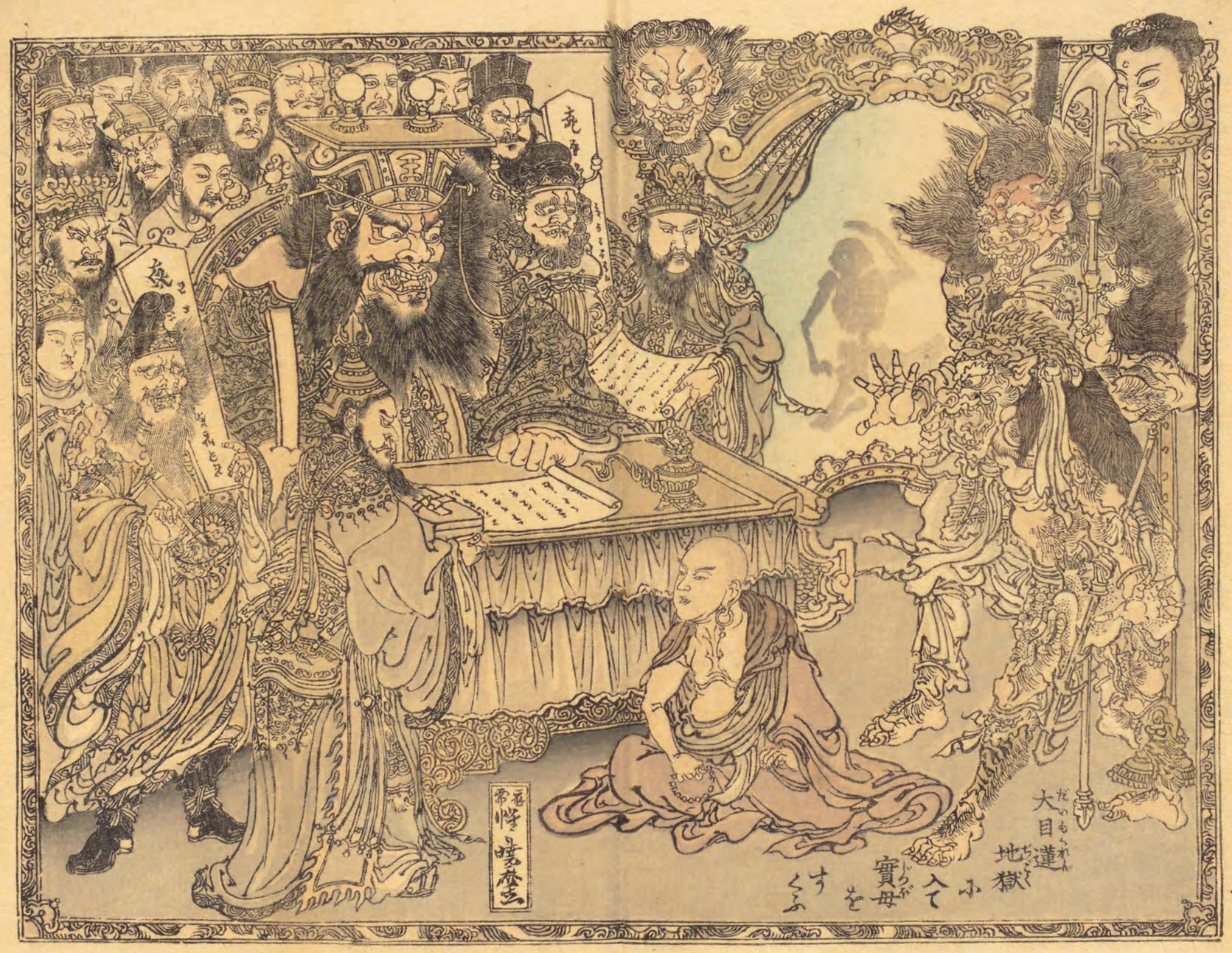
鞠曇弥

浄飯大王

摩耶夫人

普賢菩薩仮に遊君と現じて悉達太子の夢中に見あふ
やまさら女
悉達太子
提婆達多

悉達太子
耶輸陀羅女
舍人車の圖
悉達太子出家の望をおこし蜜に迦畏羅或找立退き給ふ


大目蓮
地獄
小
入て
實母
を
すくふ

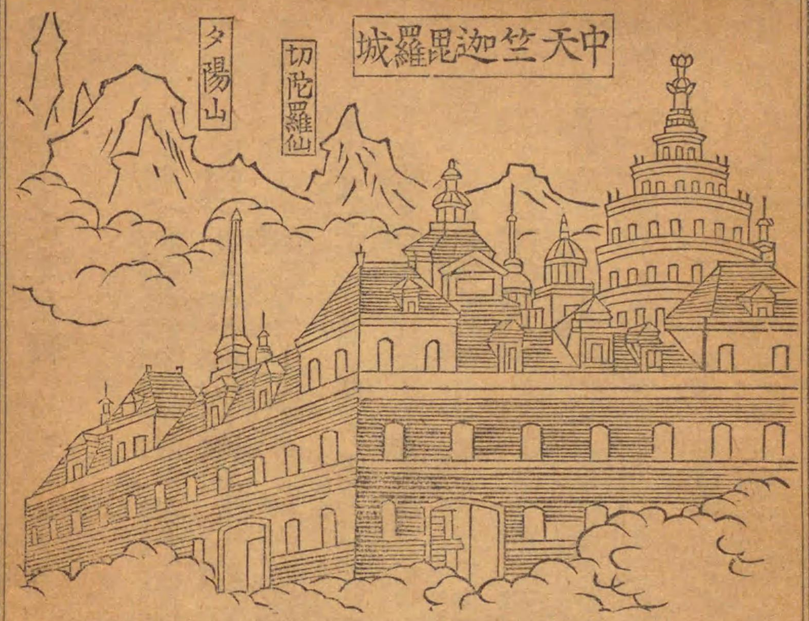
目蓮尊者
地獄にて
母の
苦現を
見そ
なげく
焦熱地獄
黒繩地獄
衆合地獄

十大弟子十六羅漢
鹿頭梵志髑髏を和して三世と示す
世尊
大迦葉
鹿頭梵志
舍利弗
目蓮

釋迦八相倭文庫初編

原著　萬亭應賀

夫五天竺の其一國中天竺摩迦陀國の都迦毘羅城の開闢大賢王より三十六世の帝師子頬王と申奉るに王子四人あり第一を淨飯太子第二を甘露飯太子第三を白飯太子第四を斛飯太子と申り〳〵何れも勝れし御子達なり然ゞ治る當御代を第一の王子淨飯太子ゟ譲らせられ給ふよつき御父頬王御服を更められて大極殿ゟ出御ゐり四人の王子を始め月卿雲客を召ける其御座敷に飾りつけられたる七流の御寶と申すく寶璽第二に四神龍道の靈弓鬼神の恐れし矢第三に白蓮劒第四ゟ闇明如意の玉第五に蓬萊宮より備へたる玉の冠り第六ゟ不淨を拂ふ玉の旗第七に五天竺のうち山道海道陸野道三十餘州の國の繪圖右の七寶ゟ代々に傳ゐる重寶なれゞとて淨飯太子に譲せられて　玉座に直し則ち御位を譲せられ給ひける偖三人の王子一ゐ東西南北の國を分て給はり百官の者へも夫〳〵ゟ官祿を增して倘國民の政道末世まで能守るべしと御詞正しく宣ひて頓て奥へぞ入らせらる月卿雲客皆萬歳と稱へ實に有難き綸言かなと歡び袖を連ねて退きける去程ゟ淨



飯大王は萬乘の位に上り給て政事正しく御仁心厚かりければ咸々世あ有難き帝ありと仰き尊み奉りけるに「斯て或時大王一室に籠り政道の文を讀し居たまふ處へ重役高明大臣進と出で「唯今御前へ申上るい餘の儀に非ず君政事を知し召し故さを棄て新しさを磨くは一つの孝と仰せありしゆへ方圓十里よ路作りして新内裏を造り奉れば是近臣を撰え御引移あれかし又一りの願ひにい男子の侍さい宮中に滿れ共官女后の侍さへ唯の一人さへ無く夜の御寢間寂さは偖措き御代を嗣せ給ふ王子を擧けん便りも無さ儘何卒隨臣の内にて顔容優美娘を官女后

に備へて政道正しき君の御胤を萬代までも殘し度存じ奉ると謹んで申上ければ帝御機嫌うるわしく實よ夫れい尤もの事あれば兎も角も宜さよ計へとの仰せを蒙り高明大臣伺平伏して然らばまづ奥殿を急ぎ造營して叡慮を休め奉らんと言上しつゝ速かに夫々の役人へも綸言の趣さを傳へ奥殿の御普請も忽ちに成就して吉辰の日を卜ばれしが已よ其日と成ければ先の日百官の輩に廿歳を越さぬ處女あらば帝へ奉るべきとの御觸あたし有ければ今日御幸の巷よ今を盛の美人達姿を飾り互ひに花の香色を爭ひて帝の御通りを待受並居る折柄淨飯大王華美に連錢足毛の駒に跨り手綱りゝ數掻繰給ふ其倶奉の面々も勇ましく御馬の左右ゐ隨ひ此方へ來り給へば高明大臣地上よ跪きて此に並居るは我君へ隨臣の面々が處女なり叡慮に適ひたるを奥殿へ召入れ給へと申上れば帝則ち御詞やさしく渠等に會釋爲給ひつゝ拔萃つて三百人官女に名抱へられ直樣迦毘羅城へと駒の足を運ばせられ給ひける此時高明大臣數多の婦人を見渡せしよ世に類る無き美人善覺大臣の娘兩人見へず如何の事と不審ながら帝よ供奉し渠等が詮議に夫々の者を招きて樣子をゞ糺させける茲に又善乘國の將軍善覺大臣に三五廿歳の處女二人あり姉を輪曇彌妹を摩耶と云て何れも劣ら

ぬ容貌にて此二人の者に優りし美人ハ世に少しとぞ聞へける然バ此の二人の處女互ひに淨飯王の志し優しき噂ゐ何卒一度なりと御姿と拜せんと思ふ折柄官女后を數多召抱へふるゝと云ふ沙汰を聞より何卒御目通りせんと娯みしよ親善覺ハ假令帝の仰せあり共かく淺間敷育ち柄にて君の侍きハ思ひも依らぬ事なれば二個とも我々連に宜き緣あらば嫁し付んと君の御引移の街へも出さねバ二人共くよ〳〵と心よ物想ひの積る處へ白西道三ケ國を領する淨飯大王四番目の弟斛飯太子ハいたく婦人を好み善覺の女殊に麗しきを傳へ聞き何卒手よ入れんと媒妁を以て言ひ込たれども二個のものに嫌われけるゆへ唯一人忍びて善乘國へ來り善覺に面談し種々と割口說望めども善覺不平の顏色よて申すやう假令我子なり共妹脊の緣ハ一筋に親の意にも任せ難し之を無理に云聞せあバ是非なく親の心よ隨ひて嫌忌ながらも妹脊の緣ハ結ぶ共固より心に染ぬ時ハ女の身の果敢なきと悔み竟よハ綴れて身を果すか水に沈むか二つに一つの無分別起るハ世間に儘ある做ひ何卒この譯柄を汲分て必そ機嫌を損ねぬ樣に想ひ切て給われと物柔和に答ゆれバ斛飯色とかへ彌以て身が望みに適ハぬ上ハ口かず聞ずヤヽ夫よと股立引あげ奥の一室を差て走り入り何心なく居たる二個の

處女を捕へんとするよ二女ハ駭き這ハ何事と周章て逃る妹との聲耶か襟髮引摑み引寄んと爲るを見るより姉の轎曇彌手疾く準備の懷劒を抜うば免て無禮しやるか免さぬとせりあふ表へ迦毘羅城の勅使なりと呼聲斛飯の耳に入りヤレ仕損じたり遺憾やと處女を放ちて周章つゝ逃出たり後にハ樣子白髮の善覺勅使の出向ひ叮嚀に一室へ請じ敬へバのさ〳〵通る初大臣邊り傍りを睨廻して勅諚の趣き餘の儀でなし今回淨飯大王へ百官の輩官女后を奉るよ依りて御引移の節都の街へ姉妹の娘を差出せと仰せ有しよ何を以て帝の仰せを背き不參ゐりしぞと眼よ角立て權柄に言聞すれば善覺ハ平伏の頭をあげ中々君の仰せを背く心あらねど御存じの如く小國の某しが處女共如何にも賤き育ちよて帝の御侍きにハ恐れ多けをば御召ゐ隨はず是非よと有バ夫ころ冥加よ適ひし身の面目如何共御計ひ下さる可しと述れバ初大臣打點頭如何にも志しやさしき大臣かな箇樣よ美麗き姬を持ながら誇らぬ心底感じ入たり則ち是ハ徵札ありとて渡せば善覺二人の娘に之を讀せけるよ兩人の內慮慮ゐ適ひし方を留ゑ一人ハ何れ共御返し有との仰せなり然らバ我臯下の心よ任せずと善覺姉の轎曇彌へハ馬將軍を付け妹摩耶へハ右將軍を付て參內させんと兩人を呼出し心を付て守

護すべしと云ひたし夫々の手當を爲しめ參內の准備をぞ急がせるるに姉妹い日頃の願ひ届て御后に召るゝと雖も何れか叡慮に適ふやらと心の內に物案事して互ひに髮を結び合て華美なる衣服を着飾りそれ〳〵の侍女まで附られしが流石親子の暇乞に涙限り無く見へければ同じ心の善覺大臣氣を取直し願ふても成ぬ身の出世親も大慶疾々參內致そべしと勸めける「去程に初大臣い彼の兩人の姫を召倶して迦毘羅城へ立戻り善覺大臣の志し箇樣〳〵と奏聞せしよ帝由々敷思召され極めて政事も正しかる可き間則ち小國の王よ龜鑑んと頓て善覺王に綸旨賜わり四節の禮儀參內を免されける之と申そも斯く美しき娘を持おがら少も己れを尊大す謙遜する志し厚き故なりと咸々感じける儲姉の轎曼彌は月の方と稱られて月景殿に移され妹摩耶い花の方と號られて青龍城に据られ互に劣らぬ月花の裝ひを以て君に侍きけるに貴上つ方より卑き賤の女に至る迄嫉妬の心い愼み難きものなれば淨飯大王彼の兩人の女を同じ后おなし給へども花の方摩耶夫人御意よ適ひけるよや此方へのみ近接臥し給ふを月の方轎曼彌一人寢の閨寂しき儘妬み心の一途に發りてアラ恨免しや一個の君へ姉妹見もることい例し少なき事あれば初めの仰せにい叡慮に適し方と留免一人い御返し

有との事夫に違て二人共留め給ひ妾を此樣に一人寢耳さすとい情なの御計らひかな最早摩耶とい緣を切り他人と成て詞も交さじと恨み嘆つ其一念假寢の夢に青き蛇とおりて鱗を逆立青龍城の夜るの床へと飛往景勢を附屬の女中達い之を見たるも有りて這は不測なる擧動かなと殊よ怪こ恐ける偖又花の方摩耶夫人は君の御心に能く適ひて夜毎〳〵に御通ひ繁く姉の方へは音信なきを姉上い定免て恨み嘆ちて在んと忍よい察すれ共我想ひも又止難く眞實深く見へけれゞ君も一方ならず思召て此方へのみ通いせ給ひけるに然るに春も中旬の頃或夜青龍城の玉の床お美を盡せし夜るの物を夢敷たへの枕に睡む摩耶の夢に虛空に妙なる音樂聞へ紫の雲靉きて其上に十六丈の寶塔聳へ金色の幡八流れ七寶の寶樹八本花房の香たへある上に諸〳〵の佛合掌して經文を唱へければ寶塔の扉ヶ ト開け大日輪其內お在て光明赫灼そ輝き「我成道を得て現在到來して諸佛智に緣を結ぶとの文を唱へ給へゞ白象青蓮華を戴きて來る其上の佛御聲あらたに「如何に婦人御身に結緣深ければ今淨飯大王と父と賴み夫人を我母と賴まて衆生濟度のため變生するぞ故暫時胎內を貸給へと朝かに仰せあるをきゝ摩耶い思はず起返りて「勿体なやおほけあや五障三障の穢れある此の身の胎內へ御

佛を孕さん事ゝ思ひも依らず免させ給へと身を反くれば佛重ねて宣ゝく「左あ宣ひろ已に摩耶の前生は東上國の南に當つて緊那羅城と云るあり此の都の主法婆王の最愛の姫に瑠璃女と云るゝ幼なき時母ゝ後れ夷鳩陀婦人と云ふ繼母よ育てられしが此繼母に光耶女と云ふ姫一人あり容貌美しと雖も瑠璃女にゝ及び難く然ば瑠璃女東洋國の帝に侍くを繼母の妬そにて種々に讒言し詐りを奏問すれば法婆王ろれを實と思ひ都の北よ切陀羅山と云ふ嶮岨の山へ室を造り罪なき瑠璃女を唯一人捨させ夷鳩陀夫人の娘光耶女を其代りとして東洋國の帝へ侍かせける然ば瑠璃女ゝ實母の紀念として淨光菩薩の說れたる解脫血盆經を信じたてまつり千部寫して一万部讀誦しつゝ七種の木の實を取て三燈をかゝけ日月燈明佛を供養せし其因そに依つて今已に摩耶夫人と生れ淨飯大王と枕を交し給ふなり以前の燈明佛ゝ即ち某しなり是非に胎内を貸給へとあると摩耶ゝ只管詫て合する手より忽然と蓮華開けば佛之に移り經文を唱へ乍ら三五の乳房を掻分て幻しの如く摩耶夫人の胎内へぞ入り給ふと見しより驚き夢覺て見れば不測や我あがら五躰六根淨らかよ玉を抱きし心地して自から其身より金色の光明赫灼き忽ち六通を現し虛空にて諸佛證誠して守護すと聞へ春風も身に吹す

ぐるゝ花の御裝ひ順次よ衰へ朝夕の供御も進ませず病の床を須臾も離れ給ゐねば帝附屬の上臈ゝ樣子を聞召之より閨へも通ひ給ゐず潛かよ優陀夷夫婦を召し此程より摩耶夫人は風の心地なるか唯打臥て惱を強く花の宴よも怠りて出ず夜るの通ひも絶へさるが幷も彼の夫人て少も早く平癒させ身が心をも易からしめよと仰せを蒙り優陀夷夫婦其次第を逐一に摩耶夫人に告申せば身に受て有難き思召飽まで厚き御情の程生々世々忘れ難く少しも早く全快して戀しき君に見へんと一途よ思ひ奉る甲斐もあく唯いかゞらぬ身の頑ひ今の仰せを聞きしよりいと〳〵心が急るゝと泪ぐみつゝ物語れば優陀夷の女房謹んで申すやう兼々醫師の申すよも兎角病ひゐ各自の氣より發る者と承はる然ば貴女樣も恐れ乍ら唯お氣晴しが肝要かと及ばずながら存じまする恰好今宵ゐ春雨の鬱氣を拂ふ其爲に酒の準備と整ゐせ御座敷を替て皆々を召し寄せお賑かに致したら多少ゐお慰さよもあり此程の御鬱氣も晴まさうと勸め申せば摩耶夫人ろれゐ能くころ心附たれ今宵ゐ何やら例もより一入氣もうつ〳〵しき儘早う能爲よ計らひ給へとの仰せに隨ひ優陀夷の女房お局お側お次を初めお茶の間お仲

師子頰王
白露飯太子
甘露飯太子

中天竺摩伽陀國三十六代の帝師子頰王世子淨飯太子ハ寶位我讓ヲ庶子ヘ分國して萬榮を壽く図
斛飯太子
淨飯太子

居お賤女お至る迄お免し有て召出され用意の九献臺の物所せきまで置並べ頓て夫人の御座をも移し琴や三線笛太皷の調子を揃へて夫人の御心を勇め香諸共に興じける侍多き女中の其中に供御の役を勤る女い元いやんと無き大臣の娘なるが親の免さぬ忍び男を持竟ゐ親の勘氣と受敢果なき身の暮しも致せし身あれバ下つ方の世帶の事抔い勿論女一通りの病ひ月の經り滯りの事抔まで能心得し者あれバ數多の女中に待遇され務いひくき役ありしが此夜初めて摩耶夫人の御前ゑ召出され酒抔給いり夫是なすうち夫人の御顏せを遠目ながらに拜して云やう「畏恐あがら御夫人樣の御惱みい如何にも目出度王子の胤を孕させ給ひし御氣色なりと恐る〳〵申けれバ皆々大きに打駭き侍は寔か目出度やと悅ぶ中ゑも摩耶夫人思ひ合する此程の靈夢に違はぬ詞の端ア ラ有難やと思いずも仰する御詞聞くよりも多くの女中贊し立侍い相違もあらじとて共々悅び帝へも優陀夷を以て奏聞すれば帝の御歡び限り無く月卿雲客下々まで之ぞ御子孫長久の基ひと譽つて皆々祝しけり然バ此の曆月景殿の橋臺彌へ聞へ親善覺王よりの附人馬將軍を召し如何に將軍聞つるか妹摩耶い一早く王子と懷胎せしとの事唯でさへ我方へい君の御通ひも無き處へ早くも左樣に成時は尙以て摩耶のゑ御情を掛給へバ人も渠のゑを敬ひて中宮女御と崇めつゝ威勢は日々に增べきゑ夫に引替へ情なきい有に甲斐無き此身の上敢果ない命存生居て數多の者に指さゝれ顏見らるゝも恥しき儘今宵の中に仇し世を放るゝ覺悟極めし故其方潛かに心得て頓死せしと世間に披露し妾が自害を隱してたもと搔口說つゝ伏沈むやるせ泪も女氣の敢果あき思案ゑ道理なる馬將軍い打駭き夫は餘りに御短慮なり敢果なくおあり成れず共御胸晴す仕方もあり先々心を鎭め給ひて暫時お待なされませと宥められて力を得然バ其方に任する間兎も角もして口惜き一念を晴して給と割無き詞に馬將軍聲を密めて云けるやう「夫ゑこそ宜き事なれ此都より艮に當つて宿陀山と云ふ嶺あり此處ゑ阿宿仙人の後を繼ぎ術を行ふ儀伯仙無間仙と云あり此二人の行者の法にい飛鳥も落る奇特あり是へ賴みて妙術を行いしめバ貴方樣のお胸の晴る仕方もあらん此儀如何ゑと勸むれば輪曇彌大きに悅び「少しも疾く計へかしと云に將軍心得て頓て一人の官人を使に立て招きければ程無く行者兩人來りて馬將軍に面談し委細の譯と密かに聞きて事も無げに答ふるやう「仰せの趣き何より安し併し乍ら調伏の法にい七段の順次ありまづ臍胎の伏調にい其當人の姿容を能見定ねば行ふ事能はずと述る輪曇彌

忍ひて偵ひ立聞きせしが簾を掻上立出て「夫こそ何より安き事なり自らみと認て呼よせ
ば摩耶い必ず來らん其時襖の陰よりして兩人共よ其姿を能く見られよと言含め此方の一室
に忍ばせ置直ちに硯り引寄てお爲くもやをら摺墨の黒き心の恐ろしや妬の一念消る瀬無く
心の裏を卷紙に情夏毛の筆染て書共讀やも懸しさい盡ぬ想ひと細々よ存じ進せいかしくと
書認めて文箱の紐を結びも唐華の實の無きふしをひき締て上包して物馴たる側女中に云付
青龍殿へぞ遣はしける去程に摩耶夫人は想ひ掛無く姉君より玉章をうけ押披き見れば一筆
玄めしまいらせいい此程い絶へて音信無き儘如何と姉も心配せしよ承いれば其許にい帝の
御胤を宿せしやと偏に國の爲世の聞へ姉の身に取ても如何計りか悦ばしく存じ進せ候去な
がら女の身の一大事は難產なれば是と案事て夜の目も寢られず戀しく床敷想ひ暮せば常の
儘よて苦しからず今日い此方へ渡り給へ倶に睦敷古郷の越方抔語りてたのしまん先い其ふ
しと筆留まいらせいかしくと讀終り頓て優陀夷夫婦を召て上見給へと他人にあらぬ姉妹の
親切片時も疾く趣き度此由我君へ申上給へとの仰を優陀夷い心得て速かお御前に出右の事
共奏聞しけれ帝御心宜氣に仰するやう「眞實の姉妹さも往あん幷は摩耶が心任せにせよ

と有ければ俄よ御支度を整へられて侍女を召連給ひ御使と共に月景殿へ渡らせ給ふ御身い
薄き氷か刃の上を渡るよりも危殆しと知らぬが佛と云ふ事は此時よりや言初けん偖月景
殿おい轝曇彌今い遲しと待ひび給ふ處へ姉君を始め男女の御屬へも下さる御土產物を持せ
られて摩耶夫人來り給ひ玉章の厚き情を繰返し〳〵悦び告給へば姉い又內の思ひを面よ
見はさず「ヤレ懷しや能あろ來り給ひさり率先酒を進らせんと信實しげにもて囃し如何ゐ
も愛度御身かな第一よは帝の御悦び親御の名聞此姉迄が何樣にか嬉しさ餘りて泪がと眼顏
に掩ふ袖の內い人知らず齒を咬しばる彼方の襖の陰よりは儀伯仙無間仙共よ摩耶の髮容へ
目を配りつゝ容躰を伺ひ居るころ恐ろしけれ已に廻れる盃も數積れば轝彌曇は摩耶に向
ひて信實に語りて盡ぬ二人が越方今時暫とい言たけれや春の夜の短き儘君のお伽も如何か
と案事るも其方の爲又も迎へん今宵いまづ早追立るを心に呆れアラ情あや久々の積る語
ひも暫時の間最お暇申す事あるかと姉とい替りし摩耶夫人泪含みし御裝ひ名殘惜氣に凋然
と青龍城へぞ歸り給ひける

釋迦八相倭文庫初編終

釋迦八相倭文庫貳編

さても悼いしや摩耶夫人い何心おく青龍城へ歸らせ給へば二人の行者い一室を立出今見届たる姿の如くに摩耶の容を造らんと粧の米を取寄つゝ月の水ヶ迎へ取七度洗ひて粉に碎き是にて夫人の面を造り粧の藁を以て體を拵へ五形の串にて此處彼處を接合せ五色の絹を纏いせ腰には花の帶を締させ三ッ羽の征矢を刺せて竹の髪をかけながし頭に幣を切付て地の下七尺の底に埋免り〳〵上にて調伏の壇を飾りて四方よ七五三と張供物よは粧の飯を黒く染百八十本の釘をさし四隅よ幣帛を立華鬘に榊の花瀉水に白蛇の水を湛へ蚊の油を以て燈明を照し虎狼の骨を以て焼香に焚荊木に三尺の片刀の劍を建方木に修多羅珠壇の備へ着衣の袖を逆まに縫付麻を取寄裏かゝぬ草履を並べ行者い左り繩にて懈慢を結び襟に掛て調伏の壇に立向ひたる景勢い身の毛も戰慄計りなり去程に儀伯仙人准備の幣帛押取て天神地神あらゆる惡鬼神を二人の念力に任せて祈り立祈り立責掛れば殿中俄然に震動して不測や百八十本の幣帛一つに亂れ掛れば無間仙人大音聲にて如何よや〳〵摩耶夫人無明長夜の狹からん卒よ〳〵と呼れ〳〵又も鳴動盛んにして地の下へ埋し摩耶の形體現を出備へたる衣を打

掛て裏かゝぬ草履を踐壇の上へ昇り〳〵片邊の簾の内に向ひてアラ情なや姉上自らが王子を腹胎せしも不義徒らの心より貴女を恥しむる邪まならねば偏よ免して給いれうしノヽ恐ろーやアラ苦しや何卒免して〳〵と熱鐵地獄の苦しさを受るも手弱き姫御前の身を打伏て泪限りに泣詫給ふ其傍らよい二個の行者尚も責掛〳〵祈り立つれば摩耶の形骸んよ〳〵悶へ右に倒れ左りに蹌踉七轉八倒の苦さは眼も當られぬ折柱あれ最前より一室の内に始終を伺ふ姉の轜曇彌い花の姿も山風に亂れし如く顔せ怒らし懷劔携へ簾かき揚て顯れ出詞を荒らげてアラ心地よや摩耶夫人能も淨飯大王の花と夜るの御伽の娯さより自らは一人寐の寂しき閨に物思ふ報ひい覿面夫苦敷い父善覺王を恨むべし今い親を親共思はぬ妾也況て其方を妹とい思ひも依らず緣い切たり觀念せよと裳を蹴立罵り乍ら行者よ對ひ夫此形骸を宜よ計ひ呉よと仰せの下ゟ彼の二人は壇より摩耶の形骸ゞ引下して幣帛をさし縋に押包みて取捨んと殿中を退ける轜曇彌は調伏の法成就せしと悦ぶ處へ馬將軍密かに進ゑ出如何に姫君斯の如く調伏の法も整へゞ摩耶も是から亡身となりなれゞ今迄の御無念も晴帝のお伽い貴女お一人嘸やお悦びと申にろ流石に轜

曇彌は嬉敷顔振り見し兼此上王子を懐妊致さば其方も格別取立ん太儀〳〵唯何事も潜かにせよと附々の女へも云含めよと有ければ馬將軍扱らぬ顔にて夫は少しもお氣遣ひ遊ばすな某し宜敷計ふべし偖二人の行者へは當座の褒美に箇樣〳〵と手づから寶藏より謝金千兩取出し蝶花形に押包み之を白木の臺へ載外に又綾綿千匹づゝ侍女々中が擔ひ來て廣間の内へ飾り置く待ち間程無く二人の行者形骸を遙隔ちし山里へ打捨勇み立て返りければ馬將軍厚く饗應當座の布施として則ち是なる品々を下さる重て又も沙汰せんと差出しければ行者いよ〳〵悦びコハ結構の品々有難く頂戴仕ると頭を下て其品を携へんとせしに物品重くして腰立ねば二人して御梯階の下へ運びける偖轎曇彌い何となく心嬉しきまゝ數多の女中へ常に變りて物柔和ふ詞を掛け手道具類を夫々へ遣れして惡事を深く包ませける皆々も悦びて此方樣を帝の御意に適いせんとせし日頃の願ひも届たり此上い少しも疾く王子の御胤を宿し給へと取囃すさへ物潜かふ吠く處へ一人の侍女周章走り來りてノッ恐ろしや唯今の行者二人い御梯階の下にて五躰屈て少しも歩行こと適いを手足を悶がきて左も苦し氣に見へまそと聞より轎曇彌开い何故と立出給ふに皆隨ひて此の体を見て打駭くに轎曇彌は、アレ〳〵馬

將軍二人の行者い祈うに精盡草臥けん手を捕へ介抱せよと仰と蒙り馬將軍取取ず下へ降二人の手を取助けんとそる折拆俄然に惡風颶の如くに吹起り鳴動せしか這い如何に忽ち大地めり〳〵と電光の如く四方へ裂て行者二人い眞遖さまふ金輪際へぞ陷入ける此の景勢を轎曇彌附屬の女中い見るよりも咸身を震いせて偖はそ是い摩耶と祈りし報ひかあと恐れ慄き一同に奥の方へぞ逃入ける然ば神ならぬ身とて佛をも産給ふ摩耶夫人あれぞも御身の上い知しめされず悼いしくも青龍城へ返らせ給ひし其日より祈られしとは露知らず姉君の心ばせを最頼母敷思召又一刀にい腰胳の王子を安〳〵と出産して如何して斯しての嬉しさを屈指數へ給ひしにいりか早楓色めく菊月の初めつ方となり帝を初め下々まで程なく御安産ある可しと皆々悦び待にける或時夫人うたゝ寐の夢見よりして疾病發り俄然ふ差込強くして御苦そと成ければ優佗夷夫婦附々の者も這は何故と氣を痛め夫醫師よれ藥よとの騒ぎとりく〳〵成ば末々迄も夫人の御病の御平癒を祈りて御介抱してければ漸く差込治りて少しは落付給ひしゆへ附屬も氣を休める其時摩耶夫人優佗夷夫婦を御膝近く召寄せられて最苦し氣なる御聲にて「ノフ優佗夷自らが差込は治れぞも骨の節々痛み強く身のうち散やうゐ

覺へて動く事も適はねば起上るべき樣もなし夫に又胎内の王子もはや七月とも成ぬるが最はしたなく働く事の折々ハ此身に覺へて心嬉敷思ひしに今となりてハ脫殼の樣ゝ胎内ゝ王子ありとも思ハれず心ならねは此由を詳細醫師に尋ねて給と仰せければ優陀夷ハ取敢へず功者の御醫者を招き寄て御容体を伺ハするに篤と診察して申すやう「一体腰姙の御身にハ物のあやかり氣のさはぎと申す事ハ儘ある傚ひ此度姫君の御煩ひも夫に異なる事なければ少しも御氣遣ひ有に及ハず御安產も程あるまじ唯御保養が肝心と審かに述ければ實に左も有んと附屬も種々の御慰ミを勸め病も薄らぎ給ひしが早や十月共成けるに未だ御產の氣も無ければ附屬へ摩耶夫人ハ心の内の物案事より過にし頃お目見まふせし供御の女を側近くへ呼と仰あれば其旨を掛りへ通じ御前へ召連出來たる摩耶夫人ハ膝元近くへ召寄れて御身の樣子何呉と包まず語り給ふも女同志の心安く供御の女中も御身を勞りて撫摩り乍らの物語ゝイヱ最姫君のお案事ハ御尤もでハ御座りますれど決てくよ〳〵思召な月越に腰胎りましたを則ち重ね月と申て下々ゝも夫ハ〳〵澤山御座ります故御氣遣ひなく御心を浮々と遊バせねと諫め申せバ例に無き御機嫌も麗ハしく浮世の風聞も折柄の須臾お心慰ミと

附屬侶俱うち囉しける偖百官百士の輩らよりも摩耶夫人の心を慰ゑんと皆夫々ゝ思ひ付なる品々を献上致ける斯て十三ヶ月に至れ共王子御誕生の樣子も無れバ摩耶夫人ハ頼の綱も切果落膽と氣を落し再度床に着給ひ晝夜の別ちも無く唯泣悲む計りにて假令病ハ怠る共身の腰胎ハ思ひも依らず重き病を種々ともて囉れし口惜さ君への聞へ姉君の手前アラ耻かしき此身ぞや唯ゝの儘ゝ死よかし生て甲斐なき我命と我と我身に死ぬ覺悟思ひ定ゑて夫と無く召仕の者へ夫々の紀念分を遣ハさんと心に當置衣服を更ゑ親御へ一筆委細の事を書置ばやと手短なる硯り引寄せ忍びやかゝ墨すり流す胸の内堰來る泪ハ雨霰筆の穗長き命毛も今ハ甲斐なく書盡し今宵限りと泪を拂ひノフ父上母樣も先立不孝ハ免たべ此年までの御厚恩は海山なれど愁いゝ果敢無き事もて囉されて國への聞へ親御の面目生恥さらすも面ぶせなく何卒自らの亡後で必ず歎ひて給ハるな黄泉の障りと成もやせん逼て此世のお名殘に片時なりとも御側に居て永の御恩の十分一養ひ返し度思へども思ひ掛なき身の出世に一日片時御用も聞ず最期の際にお顏も見ず果てゆく此身の心の内マア如何樣で有たろふと思てハ下さるな親ゝ先立大膽者不孝の者よと憎んでたべ夫が迫ての罪滅し返す〳〵も御父上

の朝暮御身を大切に唯姉上を此世の便りと思して果敢なき自らの事は斷然と思ひ切てなき後〳〵で迂濶な事を思ひ出してよく〳〵と悔でバし下さるな遺言したきとは須彌の山程あるなれど瀧なす泪先立て物言せなば後や前ならく〳〵ゆのあし候と書は書ども眼は眩え讀とも盡ぬ胸の内噫如何なる天魔が魅てか斯る果敢なき身の最期思へば〳〵過にし春彌生夜の夢見より此樣な病に取着れて此身計りか我君の御意さへも免や角と痛めし事の勿躰なや今が今生のお名殘と兼て嗜む懷劍をやれら取出す覺悟の際胸一杯に思ひ詰かつばと伏て泣沈え須臾絶へ入る心の内憐れと云ぬもおろかなり「去程に摩耶夫人は兼ての覺悟も今更に親を思ひ君を想ひ頻りに歎き沈えしが不測なるかな此打柄俄然に眠氣起來て思はずも睡む共なく打伏給ひしが夢現の如くに光明輝きて三五の乳房を搔分つゝ過し頃對面せし佛現れ給ひしが忽ち玉をのべたる如くにて三十二相備はりたる優姿の稚と變じ伏たる摩耶を愛〳〵敷搖起しけゝ御聲爽然に宣ぬやう「ノウ久しや母君御身苦みまします故此身を恨え給ぬは理りなれども如何なる天魔の魅入しぞと宣ひし社恨みなれ過し彌生の頃衆生の願を普く滿ん其爲に正覺する麿なれバ抔か母君の心を破るべき其疑ひを解ん爲に仔細を包まず物

語らん必ず他へ洩し給ふな夫れ一時の嗔恚に俱眠劫の善言を燒棄るなり又諸〳〵の生を受るに人となり人と生れて萬の道理を知り道理を知りて能く至るを則ち三の歡びと云ふぞかし又世界に十定の掟ありまづ身尊くして賤きを棄む同暗きを棄ず同惡なるを棄ず同惡人を害はず同貧きを棄ず同衰ふ者と棄ず同適はざるを棄ず同詐僞を棄ず同欲たるを棄ず因果因緣を知つて外を恨る事勿れ之十定の掟なり偖又未だに此麿が誕生せざる其仔細は姉君轎曇彌嫉妬深く御身の腹姙を聞くよりも過し彌生の頃僞りて月景殿へ迎へしは親子と調伏せん爲なり其邪法には人間の出世の廉を七重にも塞き父母より分る三百六十余條の血脉と大綱もてからげ母君も麿の骨々も碎る計りなれば爭命の有べきぞ去なから轎曇彌は已に御身と姉妹の緣を切たれバ今はしも七百生の恨みの念健かに晴渡りて三個が命恙なし唯憫然なるは奈落へ沈みし調伏の行者二人なり是も我到來作佛の時致らバ引導して助くべし是等の事必ずしも疎忽に思ひ給ひそ佛力自在の我身なれバ今にも生るゝは安けれども左あらは御身は立處に中宮女御と敬れて轎曇彌は尚ほ闇きより暗き邪念の一層起りて生々世々に迷ひを取ば麿が功德も甲斐なければ尚ほ尊躰を煩はさん今告奉りし事共は此儘に聞棄給へ

花の對面ハ是が初めて又も逢ふ日のあるべきに夢とな思ひ給ひそと云ひ〻再度乳房を分て
胎内へ入り給ふと思へバ忽ち光明赫灼て五躰清らかに成しかば摩耶ハ駭き夢覺て我と我
身を抱きしめアラ忽躰なや罪深や疑ひ晴し今の仰せ彼程尊き懷胎を天魔の魅入と嘆らしを
免し給へとかけばと伏泪ながらに詫給ふ折柄にはや夜ハ明ていとゞ心の麗しく硯り引寄せ
嘆きの中より歡びの筆を染有し順次を細密と記す中にも胎内の王子最はした無く働かせ
給ひ頓て月日も重りて二歳十月に滿ひ冬の寒けき天とぞ移りける斯て或時摩耶夫人の御前
へ優陀夷進ミ出て平伏し唯今申上まするは即ち君の御詞懇切に聞し召べし抑姫君の御懷
胎は最早三歳に近くなれども今以て其功驗無く固より典藥共ハ病氣なりと診察朕も夫と存
ずるに摩耶一人懷胎と申そが女に依りて腰腹と云者あれど夫にもあらず又人の恨みゐて物
あやかりもと案ずれども情深き摩耶なれバ附屬の女子共も妬むべき事ハ露ほども無し況て
や姉の轎曇彌も過日の夕の趣き殊に親き風情にて嫉む樣子ハ更々なし是等の事を落もなく
摩耶に云聞せて安堵させよとの御使也只〳〵典醫の計らひに任せ給へと述ければ摩耶夫人
聞食有難き我君の仰せ哉去ながら妾はハ病氣に診察侍典醫の藥を用ひん事ハ中々想ひも依

らず實ゐ自らが胎内ハ王子なる事疑ひ無夫に付其方計りに物語る仔細あり必らず他へな洩
しなせそと身の形狀を詳細に云聞せ給へば優陀夷ハ感して實に夫ゐては御誕生の無ハ理り
也此上ハ帝へ某し宜樣に申上候ハん御意安く思召と其儘御前を退きける斯て三歳の春を迎
へ如月の初光となりければ帝國中の相見を百人撰みて呼出せとの勅命あり依りて此處彼處
へ觸られて百人の相見を殿中へ召出し帝簾の陰よりして樣子如何と窺ひ給へば頓て高明大
臣百人の相見に對ひ姫君の御身の上御煩ひか但し又御懷妊なるか詳細かに申上よと命ずれ
バ相見共拜承ハり咸肺肝を碎きつゝ矇り覗り摩耶夫人の御顏せを拜し一同に御懷妊ハ思ひ
も依らず御煩ひに極つたり然も怨恨みの邪氣ありと正しく九十九人迄詞を揃へて申ける故
姫君始め附屬の女中も力を落さぬハ無く皆泪さしぐむ計りなり時に遙の末座ゐ扣へし一人
の相見の翁何とか爲けん言とば云て唯潛然と泣居たるを帝密ゐ御覽じて斯九十九人の者
が摩耶を病氣と見立しにあれなる老翁のミ仔細を言て唯泣居るこそ不審なれ事の樣子を承
はれと仰せゐ依りて高明大臣則ち件んの老翁を呼近附て仔細を問へバ翁は泪と打拂ひて
开も姫君の御容体は唯九十九人が見立申上たる上からハ老耄たる某し儀ハ何事も免し給ハ

れと詫るを大臣聞入ずイヤ〳〵是ハ勿体なくも帝の仰せ忽せならず観相卜筮何れあり共心の丈を裏み隠さで具に申上べしと延引ならぬ高明が詞に老翁頭を擧げて然らバ御免を蒙りて某しが今相する所且占ひの趣きを明白ゑ申上ん恐れながら摩耶夫人ハ寔の御病氣ならず如何にも愛度御腰胎にて然も玉を延だる如き太子御誕生に極つたりと具ゑ述るを聞き敢ず大臣威猛高ゑイヤ翁の詞疑ハし左程目出度御吉瑞而も玉をのべたる如き太子の御腰胎と見立ながら何迚滑然と泣ク不吉の擧動心得難しサア此儀ハ如何にゾやと責問られて翁ハ疑がず「其譯懇切に申すべし然ば某しが占ひハ天眼通の仙法にて九曜七曜廿八宿三十六禽の星を立其外秘密の法を以て男女の位を差なりと言せも果ず大臣は夫が又何故ゑ悲くて泣ハるゾ「然バゑ倭其仔細ハ此王子降誕の後假令水火の中へ入り給ゑ共御身に恙ある事なけれゑ十善天子の御位を望み給ハず明覺無位の位備ハりて衆生濟度の法王如來に在せば翌日の命も知れぬ此翁ハ斯ほど尊き如來の結縁に遭ふ事難き恨ゑしさに思ハず泪をこぼせしありと述けれバ君を初め高明大臣其外の附屬迄も是を聞きて解せぬ事とハ想ひながら皆一同に歎びつゝ一人が寔か先是迄也と殘らず殿中を退けられける去程に

摩耶夫人ハ此夏更衣の御祝ひの日よりは利舍那城へぞ移されて青陽の間へ褥を設けられ心も清涼帷子ゑくす玉かけし香の薫も一層なまめく風に摩耶夫人ハ未た宵の間に假寐爲給ふ其處へ愛〳〵しき稚髪髪として又も夫人の手撫て如何に母君先つ頃復の對面を約せし故再度現れ參りたり明日より七日の御愼ゑ大切なり一時の嗔恚に善言を燒棄ると云しこそ此時なれ夫父に五恩母に十恩とて海にも山ゑも替難き十月の恩を受て此世へ生れ又十定とて厚き恩を蒙り遠からず父淨飯王に對面し奉らん嬉しや母君と優しくも抱き付て搔口説戀焦れ給ふ形狀に倶ゑ焦るゝ摩耶夫人唯今御誕生ゑまし〳〵たかと抱き上げつゝ抱しめて優陀夷夫婦ゑ疾く見せて歡バせん者をと飛立計り ゑ心急しく立んとすれば假寐の夢ハ甲斐なく覺果て唯双手にハ自身を搔抱きてゾありけれバ這ハ又夢にて有りぬるよと思へど最早御誕生ゑ近からんと思へば心嬉しく優陀夷を始め附屬にも密かゑ物語り御悦び限り無き打拠中老の命婦と呼女中君よりの御使ゑ參りたり迚入り來れバ摩耶夫人ハ忙ハ歟邊りと片附いざ此方へと呼入るれば命婦はしとやかに座に着て偖我君の仰せゑは姫君の御煩ひより二年三年此の方ハ花の宴もこれ無き所此節ハ少し宛

巻中挿画 梅堂國政画

も御快癒きとの事ゆへ帝此方へ御幸ありて藍毘尼苑の花園にて宮中の人々を殘らず召出して花の宴の御催しゝ如何あるべきや夫も一つは貴方樣の御氣晴しの爲あれゞ唯々摩耶の心任せにせよとの仰せに侍かし如何思召るゝやと述れゝ摩耶夫人ゝ微笑に思ひ掛なき今日のお使最早三歳も我君の御顔せも拜し奉らず御懷敷折柄に此身よ餘る仰せ事冥加あり勿体なし殊に又局々の上﨟達も打揃ふてとゝ如何にも嬉敷御宴にころ摩耶が悦び此上あし君への御返事宜き樣に申上呉よ迚尚は種々の物語りしつゝ命婦を待遇返されける去程に淨飯王にゝ花の宴の御催し有につき其準備とて殿上殿下上を下へと返すが如く內外の官人達騒き局の取込政所の混雜大方ならざりける斯て其の日となりけれゞ帝ゝ利舍那城へ御幸ありて月卿雲客殘り無く藍毘尼苑の西青陽殿よ上下の隔て無く列りける偖又姉の轜臺彌も君よりの仰せに依りて花の宴に立出る姿ゝ優しく見ゆれ共心の內の恐ろしさは世に譬ふべき方も無く妹摩耶とゝ同胞の緣切たれゞ今更よ心よ掛る事も無くれめず聽せず廊下傳に附屬の女中を引連て御前近ぞ進とける然ゞ菁陽殿の南の廊へ諸卿を据北の廊へは數多の女中を据轜臺彌の褥を右の上へ數摩耶夫人の褥を左りの下と定られ皆衣紋かい繕ひ座を列ねたる美々

しさゝ譬ん方も無き風情なり然共摩耶夫人唯一人未だ出座無りしかば帝命婦を近く召れて何故摩耶ゝ立出ぬぞ今日の花の主あるに何迚遲きや疾く召せと仰せよ隨ひ馳行て斯と申せば摩耶夫人然ば今日の御幸殊に珍敷上﨟達の迎ひの爲めよ路まで心は赴きしが君の思召の程ころ如何と身ゝ此に扣へ侍りたり直樣參內致さんと數多の女中を引連出たる其容姿天人共仙女共譬へん樣なき御裝ひ加之面にゝ仁愛慈悲の相を現はし徐々と步行給ふ御頂きをアラ不測や瑠璃光如來妙見不可思議の光りを放ち日月光佛倡俱に前後左右を守護すれば歌舞の菩薩も光りを添へ御前間近く進りゝ式臺有て左りある褥へ移り給ひける帝之れを御覽じて如何に摩耶久敷音信あさ折柄今日の對面嬉しさぞやと實に情ある御詞に摩耶夫人ゝ返答兼つゝ平伏君を敬ふて座し給ひ身を遜りて在すれど其狀氣高く麗しさ邊りまばゆき景勢に數多の女中も惚々と須臾は見とれて居たりしが頓て御褥近くへ進を來りて「姬君惱せ給ひしと聞皆々御案事れ懷しふ侍りしに早平癒せ給ひて今日のれ入りゝ如何計りか歡びしや嬉しやと君のれ前も憚からず手取袖引もて囉せゞ轜臺彌ゝ不興顏にて詞も無く差俯きて居たりしが稍暫目に摩耶夫人の姿を熟々と詠め給ひて思ゝず泪をゝら〳〵と落しアラ

恐ろしの我心や彼程やさしき　妹を妬そ一事の恥かしさと心の内に詫給ふ其色外へ現れて
君を初め人々も轎曇彌の方摩耶夫人と思ふ泪の体を見るよりも是迄とは事替り偖々柔和な
る姉君かあと皆一同に感じける是や如來の佛力にて一時の懺悔に億劫の罪障消滅して一佛
淨土の結縁となる最も尊き事ありける其時帝御聲麗しく彼處なる藍毘尼苑の寶樹ゝ折せぬ
筈なれども一入風情ある嬉戯今日の會なれば皆々の心に適ひしを一枝づゝ免すべし疾々手
折て簪しにさし其花によそへて一曲を謡ひ杯を廻らし囃さ舞との君の仰せの其の御詞よ
今日ゝ摩耶ゝ花の主なり自らの簪あければ志しの有る者よりして一枝手折て簪にさゝせ
酒を勸とよ仰せなれバ皆々願ふ處ありと等く庭に下立て何れが摩耶君の御意付の花あらん
かと彼方此方を打詠め思ひ〳〵に見立つゝ是や〳〵と手折てゝ皆簪しに差込り盃よ取添
へて勸めけり佛に一枝の花を捧け菩堤の菓を受ると云ふ事此時よりぞ初りける然バ杯の
數も廻て帝の御氣色麗しく摩耶夫人の方に打向ひ給て「あれなる無憂樹の花房ゝ藍毘尼苑
の長あれバ一枝朕が簪にせんあれ折てよと仰せあるにぞ摩耶夫人ゝ嬉しく庭へれり給ひて
無憂樹の下へ立寄てやをら左りの御手を延し一枝折んとし給ふ程よ不測や俄然に差込來り

て胎内殊の外に動じけれバすゝ夢の告は今なるか折も折とて花の下玉臺の宴も是迄かと引
入る樣に見けれバ女中達ゝ駭き周章御手を取て勞りの撫りつ口を揃へてとり〳〵に御心を
勵しければ摩耶夫人ゝ漸々に人と力に樹の下へ座し給ひ暫時心を落付給ふ是や正しく御安
産の徴時至れりと見へにける

釋迦八相倭文庫貳編終

釋迦八相倭文庫三編

再說も摩耶夫人の座し給ふ御頂きへ虛空より金色の光りを放ち旗二流れ天降りて無憂樹の枝に留り香氣紛々として實相の淨土も斯や有らんと思ふ折柄夫人の御衣を搔分つゝ左りの脇よりアラ尊とや太子御誕生まし〳〵ければ帝を初め奉り優陀夷夫婦附屬も悅び勇みて氣も浮れ殊ゝ御庭の面と云俄かの御安產に取敢ず屛風お褥お枕を持運ぶさへ後や前周章惑へる其內に今まで二流と見へたる旗忽ち金色の龍と變じ功德の水を降しつゝ太子を初め摩耶夫人の穢を淸らかゝ洗浴して靆く雲へぞ上りける去程ゝ太子ハ前へ三足後へ四足左りの指ゝて天と指右の指にて地を指て「天上天下唯我獨尊の形を造り給ひてより母君の膝に安座在まして乳房を搔探し索ね給ふ然ハ生れ子の初聲を聞く時は總ての女產の苦ミを忘れて力附者なれど摩耶夫人ハ其氣色もなく唯雨ゝ萎む花の如く打萎れ給ふゝぞ優陀夷夫婦は周章て太子を抱き上兼て召抱へられたる乳人上﨟達へ渡しければ皆々大切に侍きて簾の內へぞ入れ奉る偖摩耶夫人とバお褥の儘心靜に御居間へ移すべしと優陀夷夫婦の指揮に任せ數多の女中勞りて奧へ手越ゝ擔移しつゝ御機嫌の程をぞ伺ひ鳧に尙ほ宜しかゝぬ御容体ゆへ誰渠の隔無く典藥共殘らす御脉を取けるゝ咸々頭を傾けて御大切〳〵と計り申せば帝を初め優陀夷夫婦命婦其外賤女の末々迄も太子御誕生の悅びの中の悲ミゝ袖をしぼりて惜め共夕べに靆く花の雲翌日ハ雨ゝろぼ濡て果敢なく散に事ならず實ゝや老若の別ち無く無常の風の誘へはころ假りの浮世とぞ云なしける然バ悼ハしや摩耶夫人ハ愛し盛の御身にて其俤は移ろハず御健かなる風情にて自念に御眼を閉て果給ふまそ憐れと云ふも愖なれ偖宮中の人々ハ咢と泣伏咸一同お袖を濕せし景勢おハ天も雨もつ計りなり此旨附屬の女中達より順次〳〵ゝ上へ傳へしに帝の御歎き一方ならず龍顏を惱まし悲み給ひ今日の花の宴ころ悅びなれ正しく摩耶か名殘の爲に催ふせしに異ならず此上も無き死出の餞別なりと打歎き吊ハせ給ふぞ有難し偖又君の御側に附添ひありし轎曇彌の方ハ摩耶夫人敢なくなり給ぬと聞より襠搔揚無常の一室へ走りやき其亡骸に縋り付面ハ名殘の泪なれ共心の內には過し頃調伏せしより惱ミ初て斯くハ果敢なき身となり給ふかアラ恐しの我心や罪なき妹を恨ミし事爭天道免し給ハんや摩耶の靈魂此の家の棟に留りをらバ今一度亡骸お返りて此身に詞を替して給へと小袖の褸を結び留靈呼してろ泣に鳧を優陀夷見兼て種々に諫むれ共尙ほ

正体なく此儘此處に身を亡ひ冥土の摩耶ゐ追付て造りし罪を懺悔して天の御罰と脱れんと悶へ焦れて搔口説を優陀夷い君の仰せに事寄せ轜曇彌を片邊に隔て其御名殘いお道理なれとも歎ひて甲斐なき繰事より後世の菩提が何よりの功徳イザ〳〵御支度有りて妹君の供養を勤めらるべしと宥め賺せバ附屬の女中も夫こそ何よりの御善根と詞を揃へ倶々ゑ勸ゑられて轜曇彌い其理に服し泣々月景殿へぞ還させける是は瑞縁眞如の功徳ゑて悟れば善惡の二つは無く煩惱も菩提の種深き罪障も一時の懺悔ゑ消滅して下化衆生結縁致するとやら斯て淨飯王い摩耶夫人の菩提を營まんと白綸子の御服ゑ替召られ一室の内ゐ閉籠り御經讀誦仕給鳧稍有て命婦を召て潜かゐ優陀夷へ索る事あり此へ招くべしと仰せの旨を直ちに傳ふれば優陀夷は御前へ進とければ帝御聲曇らせられて「如何に優陀夷摩耶が身の上今更悔むも甲斐なき事是皆生ある者の儚ひといへども未だうち若き菩の身にしあれば惜む心も一入まさりて甲斐なき後を吊らふうち不圖思ひ出せしい摩耶が此の世に有うち何かな渠が身の上に願ひの筋も有りつゝん其等の事あらば聞まほし殊に過し頃久々ゐる彼の臈妊を不審思ひ麿が尋ね遣いせし事の有りし時其方が種々の仔細ありと答へしが其趣きい如何なる

事ゑ包まず語り聞せよと優陀夷は仰せを蒙りて「さん候過し頃摩耶君へ綸言在りし節詳細事い今以て奏聞致さず候得共其節摩耶君の仰せにいやとよ妾が胎内は物の化の魅入し病氣に非ず偏に愛度王子あり假令千劫萬劫經る共一度誕生いせします事疑ひ無けれと兎ゑ角人の口歯の憂てさに臈胎と思ふ三歳が間の種々を自ら書認めて此處ゑ有り迚某し夫婦へ忍ひやかに見せ給ひしを拜見して最も尊く覺へしか偖ころ此度不測にも夢の御告に小しも違はず太子は御誕生ゑしませしが摩耶の方い悼い敷も已に果敢あくなり給ひぬ其時片邊に置給ひし御手箱を改め見しに以前の御遺書は更なり數多の女中達へ夫々に御紀念分の事迄も認め置れし御心入れ未だうら若き御身にして斯迄物に行届し御誠心の忝けなさを思へバいと〳〵悲さに奏聞を扣へ候へしが過ぎし事の御不審を御尋問ゑ任せ唯今こう某しが妻ゑ申附かの御書物を取寄て尊覽に入れ奉らんと云つゝ襖の外へ打向ひを呼んと爲る程に折能妻いも御佛に供養の花を携へて徃を呼留云々と申附れば女房は頓て摩耶君の手箱を携へて眼も泣脹して凋然と御前へ出て手箱の内より御遺書の文の中より三歳の間惱み給ひし其由縁を書綴り給ひしを取出して帝へ捧げ進すれバ淨飯王取上給ひ熟々叡覽ましますゐ始ゑよりして

細密と御身の果敢無き事とのみ書綴り給ひしかば帝を始め優陀夷夫婦も感涙袖に包み兼須臾詞も絶へけるが稍有て帝優陀夷に向はせ給ひ「是見よ此返し書にも若しも此儘相果ば臈胎なるか病なるか二つ一つの証しを身と割てなり共見ハして人の疑ひ晴してたべ是耳摩耶が上も無き願ひに侍りと書てありと仰せて尚遺書されし事共を殘る方なく讀終り給ひて龍顔の泪を拂ハせ給ひ「如何よ優陀夷摩耶が亡骸ハ尚は存生の体よ待遇て八曜の車に乗て宮中を送り出すべし偖弔ひ埋る所は青龍殿の東ある夕陽山の景色をバ摩耶が平日娯そて愛悦びし處なれば此山の頂きに十六丈の寶塔を築がし正面にハ無憂樹を植左右に藍毘尼苑の寶樹を植付青龍殿を傍らに引移して常に香華を絶す事無く吊ふべしとの綸言あり優陀夷夫婦ハ頭を低去迎ハ厚き御恵み嘸や草葉の蔭に於て此事聞食ならバ摩耶夫人ハ此御詞を名僧智識の經文よりも御嬉戯御得度致さるべし卒綸言の趣きを夫々へ申達せんと即座に御前を退きて夫々へ右の趣きを傳へ急ぎ准備を整へつゝ御亡骸の野邊送りハ君の仰せに任せ御存生の装ひにて八曜の車に移し帝を初奉附属まで殘る方なく香華の手向やゝ畢りて御供には優陀夷を初奉高明大臣右將軍を先として百官諸士の輩數百人衣服を更め之を警護す偖

又女中の輩ハ憂陀夷の女房命婦を初め御側お扈從お次れ茶の間お仲居お末お賤女まで皆夫々に役を設け御車に隨ひつゝ宮廊を徐々と運び出るよ列を亂さず其道すがら辻々にハ老若貴賤の隔て無く袖を絞て立集摩耶夫人の車を拝しつゝ額着歎まろ殊勝ありける斯て程なく夕陽山の麓近くへ來りければ簫笳太鼓の音を揃へて音樂を催しつゝ尚も車を進る程に階隨ふ面々も皆感涙を堰敢ず牛うち男も斯計り尊き御葬式に結縁する事の有難さと感歎すれバ思ハずも鞭をからりと打捨て短き袂を延しつゝ泪を拭ふ夕理りなる去程に夕陽山の御墓所へ漸くに着にければ高きも低きも隔て無き世の倣ひ迎無常の風に靡く也幡天蓋の憐れにも御葬禮の式事終り御車より御棺を土中へ埋りゝ守護の役を附置て御忌日の御吊ひ香華の手向怠り無く彼の青龍殿をも此處へ引移されて新築あるまそ冥加あれ然ば月景殿の輪曇彌ハ其後心も改りて摩耶の菩提に心を盡し假初ともなまめきたる化粧無けれバ命婦ハ悦びて何卒帝の御伽に近附奉らんと彼方此方を取繕ひて媒妁しつゝ帝の御通ハせを周旋けれバ夜のれ殿も浮々と酒の筵の繁々よ去者ハ日々疎しとの世の諺よ違ひ無く摩耶の忌日も程立て何時か絶る香華の烟りハ轎曇彌の方に阿焦れ帝も竟よ月景殿へ通はせ給ひて比翼連

理の御契りと成ける故附屬の女中達も悦びの餘りに寄り擧て一人寐の身を恨む私語は宮仕に憂を知らざる女子の常とぞ知られける儲淨飯王ハ或時命婦と月景殿へ召寄給ひ轝曇彌と語ひ給ふは青龍城ゟ殘り居る摩耶の召仕を初め月景殿の女共へも摩耶の紀念分を遣すべしとの仰せを受て命婦しとやかに申ゟ樣「御意の趣き畏こ候へ共摩耶夫人の御遺書の次第も有ば此儀ハ如何と伺へば「如何ゟも其遺書へ記せし者へハ夫々の紀念を遣はし洩たる者へハ其方達よきゟ計へかしと殘る方なき御惠その程を青龍城を初兜月景殿の女中へ憂陀夷の女房を以て夫々に御紀念を下され扈青龍城の女中ハ殘らず御暇を給ハりし故名殘涙の乾がぬ内嬉し泪の嫁入沙汰或ハ婿取夫々に兄弟分の問ひ音信狂言見物月花の友も互ひに世帶染て夫婦口爭の出來心重ぬる妻の數顯れて竟にハ苦界に身を落すもあり憂も辛苦も假の世の假の宿にも因と果と車ハ廻り來る者を知らぬが佛の徒ら事愼むべし〳〵「去程ゟ月日は水の流るゝよりも最疾く摩耶夫人の百ケ日も何時か過けるにぞ太子は益々壯健に淨成人し給ひ殊に忠貫に在せば淨飯王優陀夷を召て今日ハ幸ひの吉辰なれバ太子に初ての對面せん疾々諸卿へも參內の趣き相觸よとの仰せを受夫々へ達せしゟ月卿雲客其ハ如何にも目

出度御事と俄ゟ參內をぞしける儲王坐近くへ優陀夷の女房太子を抱き奉りて進ぜけれバ帝御膝ゟ抱取給ひ如何にも優き面ざし哉摩耶に其儘生摸しと言掛給ひしがイヤ左ゟは非ず此若宮の母と云ふハ即ち此なる轝曇彌なり忘れても摩耶の子と云ふ事決して語るまに宮中ハ更ゟり國中民間賤しき者の末迄へも此事を堅く示すべしと仰せありし故太子ハ轝曇彌の御腹なりと持囃し奉りて千代萬代の末迄もと祝ひ壽き進せける然バ轝曇彌ハ世の聞へ旁々以て嬉敷事此上ハ侍らじとて帝の御側近くへよりて太子を抱取左も愛々しく實子の如くに待遇やゝ有て乳母を引連月景殿へ返らせけれバ附屬の者の中にも初めて玉顏を拜せし者ハアラ美しの御形狀かゝや百の媚比翠の黑髮艶々しく瑠璃の御眉上り御眦りかけて御仁愛の御相現れて如何ゟも優しき皇子樣と手を打囃し囃けバ太子ハ御機嫌うるはしく俱ゟ浮れて愛〳〵しく頭てん〳〵手拍手まで日に增智慧づき給ふを母君ハ余念なく取囃し守立らるゝゟ早三才と成給へバ初元結の御祝ひとて月景殿ゟて種々と御祝の物調ひ已ゟ其吉日となれば御父淨飯王へ獻上の其品々ハ寮の御駒綾羅の金劒銀劒玉の旗龍幢龍旗の寶物等金銀珠玉を取揃へて飾りを添へ官人仕丁打圍ひ前後と護りて參內ある其景容ぞ花やかなる儲

太子へハ優陀夷夫婦乳母侍き頓て玉座の前へ進ミ出禮儀正しく見へ給へバ帝叡覽まし〳〵て御詞ねんごろに斯成長せしこと偏に國の榮へ千代萬代までも限りなふ愛度例しなり即ち諱を悉達太子と授ると仰せに隨ひ傍らに扣へし優陀夷に兼て認め有し壽讃の折紙を白木造りの臺の儘に差向けゝれば差添の優陀夷の女房押戴かせ進すれば若君倶に平伏有て御禮を述給ふ其時帝再度宣ふやふ如何に優陀夷承はれ今日太子初元結諱初め祝に三年の摩耶が忌も晴たれば轎曇彌侶倶太子と夕陽山へ誘ふべしと宣旨あり優陀夷其趣きを云々と轎曇彌へ告知らせしに這ハ身に餘る嬉しき仰せかな願ぬても一度ハ太子を誘ひて摩耶の墓場へ趣きて忘れ紀念の成人を托付に我不良事の懺悔を爲ば左のミしうねく恨ミも有じと過し日よりも此事の心に思ひ絶へね共帝への聞へ如何あらんと案事て扣へしに去りとハ嬉敷仰せかな其御詞の替らぬ内疾々太子を誘ひ申さん夫々の者へ供の准備と急がし給とある俄然の御物詣でに附屬の女中も周章さゞめきて御供の身拵へ何かに往通して長局の混雜云ふ計りなし斯て程なく御供方も打揃ひ御乘駕を御廣敷内なる長廊下まで舁上しに頓て轎曇彌の方禮なる裝ひにて太子を抱き御駕籠へぞ移り給ひければ六尺の女共肩を揃へて徐々と舁

上御玄關まで舁出れば男の六尺請取て尙徐々に舁出す御供にハ優陀夷夫婦を初めお側お次おはしだ迄列りける偖夕陽山の境内は藍毘尼苑の花今を盛と咲揃ひ人待がほの梢々もたゞ山谷の音信のミにて花になる身は何なゞん其中にも强面色を含て咲乱れしハ寶塔の正面なる無憂樹の花房ハ山吹にはあらねど物云ぬ事の適ハぬハ摩耶夫人が果敢なき亡魂の若しや留り給ぬかと宮衛人も袖を濡せし折柄に麓より對の挾箱凛々しき打物先立つゝ悉達太子轎曇彌の方御參詣と頓て寶塔の傍らへ御乘駕を舁下しお履物進らせしに悉達太子は常よりも御機嫌さへ〳〵と勇み給ふと附屬御手を引けれバ如何なる事か振り放なち給ひて無憂樹の邊りへ直ちに到り給ひけゝ花の元に取付て戯れて居給ふ内轎曇彌ハ摩耶の寶塔の前へ跪き科なき妹とを恨ミしが竟に果敢なく成し事今となりては我身ながら我身を恨み侍るかしと後を悔ミし繰事も他眼憚る口の内にて無憂樹に打向ひて夫れ花ハ心なしと雖ども折を待得てかく其色を現はせバ我罪科を如何に忍ぶべきかアラ懷しや妹とよアラ恐ろしき我心やと懺悔の涙せき敢ず袖に餘れる折ころなれ俄然に山風烈く吹起り雨ハ篠を亂して突が如く花と散しければ轎曇彌を初め皆々取敢ず傍らなる青龍殿へ入りにける附添の乳人等も周章

太子を抱き擧法殿ゟ雨を凌んとすれ共太子は一個むづがりて中々木の根を離れ給ハで尙も惡あがき爲給ふを優陀夷ハ是れを見兼けゝ雨を厭ハず走り出這ハ何故にむづかり給ふぞ此雨風の烈しきに濡てわやくを宣ふな今ゟも雨はれ風やミなバ又此處へ誘ひ進せんイザ〳〵此方へと抱き入れんと爲つれ共中々に聞入れ給ハず尙むづかりあがき給ぬゆゑ優陀夷詞を正しくして偖も心强き若君かな去御心なる効しにや三歲が間母君の胎內に腰妊て竟に母上を亡ひ給ひしも已に此花の下なりきあら恨めしの此花や疾々渡らせ給へとて無体に抱き抱へけゝ法殿の內なる轎曇彌の御膝へ移し進せてイザ此なる母君の元にて遊び給へと諫め申せば「イヤ〳〵是なるは麼が母ゟは在まさずと細き腕に押除て我母慕し何國にや在します何科あつて此麼を疾く御見棄給ひしぞや我こそ麼が母なれと疾く名乘て見へて給と轎曇彌の裾に縋り彼方此方の女中に嬰り物狂はしく潛然と打嘆き給ふ形狀は如何にも不測と有り合ふ人々さま〴〵に賺して御心を外へ紛らせども聞き給ハで尙ほむづかり乍ら此處ハ开何と云ふ所にて主の名ハ何と云ぬぞ聞ま欲しやと宣ぬに轎曇彌ハいよ〳〵悲しく答へ兼て絕へ入る計りに泣沈みしを太子は袖に取嬰如何ゟ〳〵と尋ね給ふに轎曇彌ハ漸くゟ泪をおさ

めて其御意は御心に叶ハぬことのあればこそ去御尋ねも有ならん其ハ恨み共强面共今更に嘆ちハ致さぬとも御心根のお悼ハしさに速やかにハ申兼たりしが此處ハ昔し摩耶と云ふ者の住し宮ゟて侍るかしアレ〳〵彼處に美しき翠の花の候を御覽ゆつて鬱を晴してさ耳むづかり給ふと轎曇彌は更なり其余の者もとり〳〵に賺し紛せ共「イヤ花より其摩耶を此處へ召て給ハれとあど無き仰せを聞くよりも又も皆々興覺て何と答ゆる者も無ければ轎曇彌ハしとやかに「其摩耶と申す者はあれなる寶塔の苔の下に住人なれば中々に召るゝ事ハ適ひ侍らず忌事のみ仰せず共まづ祝ひの酒きあしめせと些少の供御を勸むれば太子は不審の面色にて頭をやをら傾け給ひ心の內に思すやう今日の花見に眞の母の在す所と聞えたる事の嬉しさよ時節を待ちて竟にハ深く尋ねんと漸くに思ひ止り給ひて「さらバ彼處なる花一枝誰か折て與へよと仰せに優陀夷畏り最易き御事なり迚一枝折て差上れば太子ハ嬉し氣に取揚て是より御手と放ち給ハず之なん深き御思慮の初めなり是を三歲の出家と雖も三歲胎內に在せし故五歲の出家共申ぬ偖御還りの道すがらハ御乘輿を退けて附屬殘らす隨ひ進らせて御步行にて月景殿へぞ還せ給ひける去程に轎曇彌ハ不圖も太子の心ゟ眞の母で無き事と

悟られしより何となく快からず思ふより隔つる心の起りけゝ侍くさへも疎ましけれど帝の手前如何ぞと包えと洩る强面さの泪の袖に抱擧へて夜る晝慰め進らさるに如何なる故にか太子ハ又稍もなれバ佛間へ入り夕陽山より土産にせられし彼の花房を佛の前なる經机に供へては愛い氣なる手を合せ何事か祈念して伏拜ませ給ふを乳人ハ見るも疎ましく御側に寄ては他ごとに云ひ紛らし諫むるやう「是ハしたり若君樣またお年齢も參らぬに忌事ハかり遊バさる其樣な事ハ未たお早し恐れ乍ら御相應のこれ此處に有鳩車ハ太子の御年已にお五つに成給ひし故公家大臣より進せし若樣のお手遊びありいざ之をお引遊バして母上樣のお心をお慰め遊ばせと申すを太子は他になし「ノウ乳母何云るぞ世の景勢ハ電光石火昨日生れて今日の夕べの烟りと消るも爭ハれず三才ゐても五才にても身の老先ハ賴れ難し麿の此所を離れる事は思ひも依らずとて又手を合せて返答無き處へ轎曇彌ハ忍び來て若しや摩耶の俤の現れもして若君に見る事の有んかと果敢なき事を推量りて種々心を惱しつゝ伺ひ居給へば乳母ハ稍側へ立よりて今太子の宣ひし事云々と告申すを轎曇彌ハ聞敢ずいよ〳〵泪も忍ひ兼袖に餘れる計りなり斯る處へ高明大臣帝の宣旨を蒙りて入り來れバ轎曇彌

ハ遽敷泣顏隱して出迎ひつゝ大臣何事の侍るやと御尋ねに高明手を拱へ「今日の宣旨ハ太子五才に成給ひし故則ち三ッ目の御祝ひ冠り定めのお儀式を仰せ出されて候と述れバ轎曇彌ハ打點頭給ひて「夫れハ女の簪初めとも云又下つ方にてハ袴着の祝ひともいひて両親ある者ハ連りて祝ひ囃く事なるに我太子の强面は年齢も往ぬにアレ見給へあの佛室に終日在して唯御佛を拜し給ひ余の事ハ申上ても如何な〳〵聞入れ給はず如何にすべきと打嘆ち給へハ大臣も訝り乍ら御側へ進ミ寄けるに太子ハ其色を悟りてや清しく御詞を掛給ふ其時大臣謹んで申上るやう「若君五才の御祝ひ冠り定めの御儀式を仰せ出されて候と恭敷述ければ「夫こそ麿か望む處轎曇彌の御方も嘸悅ひ給ぬべし急ぎ准備を致せよと案ゐ相違の御仰せは固より御心と詞とハ裏表とは知らずして千代萬代御繁昌の瑞しとて皆々悅び合に鳧頓て吉日と成ければ帝を初め轎曇彌奥書院へ御襴を設けられ月卿雲客袖を連ね踵をけいで並居る景勢實ゐ勇ましき次第なり去程に悉達太子は御冠り凛々敷御衣紋付も自ら嚴肅く見へて出給ふ御裝ひの逞しき面ざしは五才と雖も七才の智惠在しませバ席上の起坐擧動殊更に父君を敬ひ隨ふ語の端正ハ實に凡人とは見へ給はす皆々恐れ敬ひける其時帝太子を

近く進ませられて「偖も〳〵美敷裝ひかな朕が仁德に十倍增て國を治め民を憐む事今よりして妄れ給ふな初冠りの祝ひ初め目出度〳〵と壽き給へバ轎曇彌も木に竹を接相性の性質惡き心から祝ひの詞を掛られけれど何となく移りよからず他所の見る目も疎ましゝ斯て御祝ひも濟ければ帝太子を誘ひて月景殿の御庭へ下り給ひ池水に浮べし小舟に乘帝自ら竿をさし給ひて漕戯れ給ひければ太子は殊の外悅ひさゞめき給ふ折しも蓮の華盛にて其色香の清らか成を只管愛らるゝ故帝思ひず泪を催して御心の内に思すやう开も太子ハ末頼母しからぬ志しの程社見れぬ斯ならんかと此池に咲し蓮を見せ鳧に果して外の花よりも取別け好むハ是佛心の萌しに疑ひ無何卒此志しを留め度と只管に思ふ心を押隱して水上の遊びハ之迄なり尙は勇敷戯れんと太子を初め女子共早來れよと舟より上りて宮中へぞ入り給ふ偖も轎曇彌ハ過し頃より太子の此世に亡母の摩耶を慕ひ給るより何となく不快を忘れ兼須臾心を慰むた先侍女共を敵手として爪琴をしらべ謠ひ給ふ處へ太子侶倶帝入らせられて這ハ面白し今日の祝の愛度さゝ今より酒を始め吹組抔謠ひて侍女共も一曲を調べて我心を慰めよとの仰せよ女中達はよろこひて種々の思ひ付なる事共して御慰みに供へければ帝一入興ゝ入り其夜ハ月景殿へ御止宿ありて太子の心を勇ませ給ふは彼の佛心を押へ給ふ御下心とぞ知られける

釋迦八相倭文庫三編終

釋迦八相倭文庫四編

茲に又淨飯王第四の弟なる白西道にて三ヶ國を領せらるゝ斛飯王ハ過し頃善覺大臣の姉妹の處女に深く思染て戀慕ひしか二個共心に隨ハず之に依りて自ら善覺が舘舍へ赴き何れなり共奪ひて立戻らんと狼藉を働きしに思ひ掛なく迦毘羅城なる兄君飯淨王より勅使として初大臣來りしかハ斛飯王ハ又も爲損じて空敷悄然と立返りけゝ二個の娘の樣子を聞にハや姉妹とも淨飯王の后と成たる風聞ありければ斛飯王ハ齡をなして二人の娘を憎ミ且兄上を嫉ミしか詮方なくて漸くに思ひ止りぬ偖此斛飯王と奥方の中ニ出來たる提婆達多と云ぬ三子あり是ハ幼稚無よりして心荒く仁義の道を學ばずして唯山へ往き野に赴て禽獸を多く狩取些少の遊び戯れにも殺生事を好ミけゝ今年漸く十五ヨして飽まで勝れし豪傑の其凄敷働きを見る者膽を冷さぬハ無し斯て或時庭へ立出て扈從を敵手ニ唐犬を責擲なミ居たりしニ侍女女中若樣〳〵唯今迦毘羅城の叔父君樣より御使者參りて父上お面會遊せば貴君樣にも御對面あるやうにと殿樣よりの仰せなりと申上れば提婆達多「ハテ何用あつて俄然の使者といひつゝ其處を打棄て椽側へぞ腰うち掛れば彼侍女の灌進する湯桶の湯にて手を洗ふ

處へ庭口より淨飯王の使者を側役の者同伴ひ來りて提婆の前へ平伏すれバ提婆不審の眉を顰めて「何事にやと問ひければ彼の使者詞を正くして今日の御使ハ別儀にも候ハず悉達太子はや七才にならせ給ひしゆへ駒競べ小弓の勝負の御催しあるニ付若君にも御敵手の思召如何に候や御樣子尋ねて參れとの事なり尤も其當日ハ即ち明日に定められ候と述ければ勇氣に誇る提婆達多眼ニ角立て言けるやう「夫ハ〳〵御念の入りたる御使者なり併し悉達殿は未だ赤子も同前殊に虚弱き性質なれば我を萬事の師匠共依頼むべき筈なるニ敵手抔とハ片腹痛しオヽよし〳〵何事も我方寸の内にあり會日は彌明日とあれば我未明より赴きて荒馬の責方手綱の捌き樣思ふ存分目に物見せん併し悉達殿ハ未だ年齡がもかぬとて駒競べ小弓の勝負ニ掛りてまんざら用捨も成ねば赤耻搔て父淨飯王まで相伴の顔穢しも我から望むに非ず使者を向たる程なれバ固より覺悟の上ならん面白〳〵委細ハ明日參りし上萬事緩々語るべし大儀〳〵とさも權柄ニにべもしや〳〵りも無き拶挨を投だそ樣に云棄て一室の内へぞ入ニける故使者ハ手持無沙汰にて返りける偖其翌日迦毘羅城ニてハ彌今日駒競べ小弓の勝負の御催し迚大書院の御庭前なる御馬場へ新たに敷砂を散嚴然しく埒を結ひ塵掃

除の役をつけたき美麗なる御馬見所よい紫の幕をうたせ前には簾を掛け幕の内にい浄飯王を初め輪曇彌の方月卿雲客殿上人い夫々よ席を別て着座せり又其人々の北の方を皆悉く簾の内ゟ召れて小弓の勝負の見物をぞ命らるる斯て程なく悉達太子い提婆を先手として數多の公卿の公達を伴ひりゝ附屬の者を召供し御馬場の狩屋に着座給ひて敵味方の群を分んと即ち提婆を西の方の大將よ定ゑられて小太郎と名乘せて諸卿の公達を差添へ悉達太子は東の大將とおりて大太郎と名乘給ひ同じく諸卿の公達を引卒ひ東西よ陣を別かち第一にい霞の勝負と號て西の方の公達馳出之を射て落さんとすれ共其矢は横飛射得ず之よりして順次〳〵に互ひゟ出合て投掛〳〵射共〳〵仇矢のみゟて勝負更に決ざれい率此上い大將同士の勝負をせんとて太子と提婆い西東ゟ鎧を蹴立て最も勇々數出合給へい御馬見所にい浄飯王を初ゑ輪曇彌附屬迄今や太子の勝負ぞと手に汗を握り身を震いして何卒太子勝給へと心を凝して守りける又並居る諸卿の北の方も難唾を呑て見物す偖提婆の方より來りたる公達數多の女中達い何卒提婆の勝やうよと神佛よ念じ夫々に氣を揉わせるも道理なり固より強氣の提婆あれは太子を侮り心の内に奴今目

に物見せんと頓て西の方より馳出て玉を虛空へ投打ゞ悉達太子は心得たりと兼ての身構へ引拽しぼりひようと射る矢い過で玉を發矢と射落し給へゞ東方西方の見物は思ひず聲を振立て東の勝と呼いけり提婆い之に氣を焦ちて身構へ爲たる程も無く東の持場より太子の投うち給ふ其玉を提婆い必得たりと射けるに其矢い横飛て張詰し幕の外なる板塀と射貫其音にコハ射損せしと大音ゟ此處彼處にて囉しければ提婆い無念さ遣る方おく率今一矢仕ら免と駒を勇ませ進ゑけれゞ太子い又もや玉を投給しに之をも射外し彌殘念身に餘れい顏を反けて切齒を爲し口惜泪を落せしい之ゑ所謂鬼の眼に泪ともいふなるべし此形狀に提婆の方より召出されし見物い力を落して悄然たり又此方には浄飯王輪曇彌を初め附屬の女中い更ゟ月卿雲客其北の方も一同よ若君一個の御勝と口を揃へて囉し立られ提婆の恥辱此上や有まじと流石の浄飯王い差汲給ひて頓て優陀夷を召寄られ如何に優陀夷今の勝負い大空を飛玉なれば當らぬが道理ゟう然るに太子の射留たるい之過ちの功名なれゞ極ゑて勝共言難し今一度東西を分第二番目草薙の早勝負に取掛らすべしと仰せあれば優陀夷其旨を太子に傳へけれい太子味方の公達に宣ふやう如何に各位空ゑぶ玉さへ射留れば此草薙

悉達太子

提婆達多
悉達太子
提婆達多と
小弓の勝負
とあゝ争ふ

の早勝負ん大地を轉ぶ玉あれん射留んん心の儘なり左のみいやり給ふあ彼方に射留なは此方にも射留給へと心を付たる仰せを受て皆々心得出立つゝ勵みて勝負を爭ひけれ共何れも劣れ矢のこゝろありして又も勝負定らねん竟に東西の大將の手前となるもへ駒を蹴立て西の方より提婆は勇を出大力無双の日頃の手並に十倍増て力を込つゝ玉を太空へ貫く如く投うちけれん太子ん悠々と矢を番ひしまゝにて放たて在せしを提婆ん勿論親戚の見物ん悪達太子射損じたり提婆の勝と大音あ呼揚けれん轅曇彌其外附屬の女中達も皆冷汗を額より流し簾の内より延上りて伺ひ見るうちに太子ん頓て身構しつゝ雲の中より落下る處を丁と射留給へん提婆は、案ふ相違して呆れて膽をけし今射損しとでかしたりく初めに射損せしと見せ掛落くる處を射留しん一入の勳功なりと宣へん先に囉し立たる提婆方の者ん皆消入り度風情にて何と云ぬべき詞も無く顔赤らめて夕扣へ居る提婆ん尚も心を焦ち三番目の勝負に小的を射けるに太子は深く思案となし給ひて彼方に射留る時は此方も射留彼方に外さん此方も外し小的の勝負を分ざるは太子の心に思慮ある事と皆々感じ敬ひける偖提婆ん十五才太子ん僅か七才なるに此勝負に負たるより之ぞ遺恨の

初めなれ然は太子ん其色を覺り提婆に向ひて物柔和に詞を替し睦敷袖を取て先へ立先く此方へ御入りあれ祝ひの酒進せんと宮中へ伴ひけれん淨飯王轅曇彌ん座席に連りて愛度今日の儀式かあいさやか献をすゝし給へと囃さて厚く饗應共提婆ん中々興ふ浮れずして間もなく館へ返りける偖太子ん附屬の者に宣ふやう「實に今日の遊びん面白からず本意なき戯れ恨め數こゝかなと悔ませ給ふん奥深き御思慮在しまを事なるべし然ん疾くも星霜たちて太子九才にならせ給へバ帝優陀夷へ仰せ付らるゝよん「如何に優陀夷よ太子もいや九才よも成たれは學問爲せんと思ふが故數多の臣下を之へ呼いだせと仰せあるを夫く〳〵へ傳へけれん殿上人お招に應じて集合ふ其時帝の宣ん开も太子にん如何なる事を初よん學せん皆々宜く詮議すべし朕か思にん先出世の道を第一ふ學せんと存ずれども汝等が存じ依る處を も審かに聞せよと最と懇切に仰せ有ん數多の殿上人右と左りに座を構へ詮議區々成けるが頓て右の座より二人の公卿進ふ出て奏しけるん「夫れ尊きは利を求ざるとかやいふ仰せの如く御出世の道こそ目出度かるべけれと述れん又左りの方より公卿一人進ふ出「恐れ乍御尋ねに任せ申上奉る唯今右より奏問せしは實ふ尤もの事なれ共我々が存ずる處いまず

太子の初學にハ世間の道社然るべしと言上せしに帝暫時御頭を傾けさせ給ひしが稍あつて宣ふやう「成程唯今右の方の申條も然事なれど能々思慮を旋し見るに太子ハ摩耶の胎内にある節百人の相見の内一人の老翁か占ひし處今と成て太子の擧動を思ひ合すれハ未だ年齢も參らぬに心賢く人の心を破らぬ氣質正しき樣子の見へ侍れハ如何にも出世の道よりも先々世間の諺ざを學ハせんに如べからず箇樣に年浪よする朕が身の唯案じらるゝハ太子の心而已なれハ皆の者宜きに計ひ呉よかしと他事も無く仰すれハ座中一同平伏す其時優陀夷ハ諸人と殘らずと談じ合て言上するやう「君の仰せ座中殘る方なく御意適當と存じ奉る就てハ太子の初學に何れの者を師と定めんと皆々評議仕りしに夫こそ兼て聞及ぶ彼の鬱頭覽弗ハ世間の事に通達せし博學の法師なれは彼方へ太子を參らすべしと詮議を詰候が如何に候やと伺へハ帝點頭給ひけゝ「左あらハ其鬱頭覽を師として太子修行の其間ハ綾錦に纒ふ身を遜らせて粗服を着させ九夏三伏の暑さ寒風降雪厭ひ無く夙より起て勤學し夜るは螢雪の窓に夜を更し身を輕々と致さねハ天下萬民の司と成ても民の辛苦を辨へざれハ世を治る事難かるべし優陀夷より之等の事を能太子に云聞せ急て其院へ移すべし夫に付て

も猶代治めぬ内なれハ成丈恐びやかに伴なへかしと殘る方なき御指揮に隨ひ優陀夷ハ月景殿へ赴き轎曇彌の方へも帝の綸言云々と申上太子にも改めて此旨を御聞に入しかハ太子ハ殊の外に悅び給て是麿が願ふ處なり嬉敷父の仰せ哉人として道を知らざれハ禽獸にも如ずと聞く返す〳〵も學問ほど世に尊き者ハ有じ疾く其鬱頭覽弗の院へ赴くべし早く准備をせよかしと勇ませ給ふに引替轎曇彌ハ流石女性の淺慮に太子今宮中を離れ給ふと聞よりも唯何と無うら悲しく心も漫然に名殘を惜み在せしが稍ありて御支度の整ひて御供の准備も宜しけれと御暇乞なし給へハ轎曇彌のいとゞ別れを悲ミて泪ハら〳〵と落し給ふに太子は幼なき御身にて優しくも聊か慰め給ぬ處へ敷多の女中御暇乞として御前へ進ミ出御機嫌伺ひも濟折柄ハや暮初る鐘の響きに打合す時計の數にイサ出せ給へと優陀夷ハ侍き帝を初め夫々の者へも御別れの御意を賜ハり夫れより帝の仰せに背かず殊に手輕き御供連にて宮中を愛度立出給ひ急ぐとすれハ道柴の露の深ミを踐分て濕る裳ハ捗らず漸くに辿り着し其頃ハ鬱頭覽の院ハ門を閉て案内を請へども答へ無けれハ優陀夷がほと〳〵打叩く音響て漸々に取次の僧立出「此暗き夜ふけに挑灯をも携へずして院の案内不審や开も何者ぞ名乘〳〵と

端た無く咎められ優陀夷詞を正しく「如何樣不審い尤ものと身を忍びしい仔細あり某い迦毘羅城の重役優陀夷なり帝よりの勅用あり不審と晴して扉を明よと聞くよりも這い一方あらぬ帝の勅使遲滯していと取敢ず戸を開かんと爲を一人の僧ヤレ待れよ勅使と僞りて何者の誑かして入り込んも圖り難しと留る聲を聞付て院主鬱頭覽弗立出「何い兎もあれ勅使とあれい等閑にいなし難き自ら門を開くべし迎扉を明て敬しく迎へ入れて先に立客殿へ予請じける「去程に優陀夷い太子を勞りつゝ鬱頭覽に打向ひ勅使と申い餘の儀に非ず尊くも此に在ますい帝の御子悉達太子に在なりと聞くより鬱頭覽座を下りて敬ひ恐れて平伏そると優陀夷い近く進ませて太子は今回位を離れ給て御修行の爲則ち御坊を師と賴まん爲めに斯輕々しく御來臨あれい左計り禮儀正しきい若君の初學ひに付て譯あれい先世間の俚諺を知し召あそ宜しきとの事なれい御坊其意を得て能く敎へ導き給へかし今より永く此院に移し參らせ置からい賤山かつの子も同前に隔て無く御修行の道を學し呉よ忘れても十善天子の御子とばし心得て勞り侍き進す事必ず以て無用なり左あき時は御勵みも薄く自ら心たもそて其道に發達仕給いねい其趣きを弟子達の御僧達へも盡く言聞せ置るべし然ば某しい立歸りて帝へ是等の事共を早く言上致すべしと立上るを押留めて鬱頭覽弗袖掻合せて誠よ愚僧の身にとりて有難き綸言哉去ながら未だ御年も九ツ十の愛氣ざかりにお守り乳母よ侍かれ在ませし御身を如何にぞや御着替の衣服の御用意も無其儘に住荒たる此院に置進せて若しや又御病ひの事も有ば却て愚僧が不忠の名を取心根の苦しさを優陀夷殿推量あれかしと眉を顰めて申ければ太子い御聲清淨やかに「イヤノウ師の坊此暫が望この道を覺ゆる迄は此姿は愚か縱へ又吹雪寒けき冬なり共氷り銳き瀧にもうたれ修行せんとの決心なり今より土民の某しと思ひて聊用捨なく呵りも懲しも爲給ひて學問の道を明かに敎へて給と温和く手を拱へ給ふ面ざしを鬱頭覽熟々と拜しつゝ最も賢き御志し然ば兎も角も此院よ留り給ひて御修行あれ恐れながら懇切に敎へ導き奉らんアラ尊き若君かあそ優〳〵數詞よ優陀夷は安堵しつゝ直よ太子の御機嫌を伺ひ鬱頭覽に暇を乞數多の僧へも挨拶して迦毘羅城へぞ返りける實に艮禽は木を擇んで住忠臣い主を擇んで仕ふとかや然ば太子い導學俊れし鬱頭覽を師と仕へて此院に止りまし〳〵てより僅の間よも世を去し母摩耶夫人の御事を忘れ給いず御心に忍び給ひて何卒御恩を報じ度

と朝な夕なに思食を今い浮世に在ささねば詮方泪に阿焦給ひける偖鬱頭覽い太子の御志一方ならぬ御望そあると悟りて御心を圖り見ん爲先經机に二品の經文を並べ置て太子を近く招きつゝ「如何ゑ太子賢くも我々を師と賴み給ひて學問爲んとの御望そに任せて只今より能く敎へ傳へまいらせ申そべし彼なる机にある二品の書物のうち御望みの方を此處へ携へ來り給へと聞へけれは御心を例し見るとは夢知らず太子い机の前ゑ赴き給ひて其外題を見給ふに一書は神變妙奇集と記して二百部あり一書は發心報謝論と記して百部あり太子頭を傾け給ひつゝ夫れ外題と云ふ者い其冊の趣きを案じ付る者あり此ある二百部の方い神變奇特の品々を書著せ處あらん固より麿は世間のことい轉輪王の威勢をも更に望む處に非す心ゑ忍び阿焦るゝい母摩耶夫人の御恩を偏へに報じ度思へそも此世ゑ在さねは報ずべき便もおく今日迄空しく過つるが此百部の表に有つる外題の發心報謝論を聞まく欲し夫よ〳〵と打點頭百部の方を携へて師の前に來り給ひつゝ「麿が志すい是れなりける疾敎へ給へ疾聽聞せんとく〳〵と衣の袖に縋り給へい鬱頭覽必に思ふやう左有んと思ひし故御心を圖り見しか淺間しや案に違いず發心報謝の思召之有ころ隱れなし先に二書のうち何なりとも

御意に叶ひし方を敎へんと云へい今更發心報謝論い止して神變奇特集ゑなし給へと云にいれぬ師の一言兎やせん角やせんと思案に困じる衣の袖を尙も引立ヤヨ御坊疾敎へよと促し給へは鬱頭覽餘儀なく早速の答へに「如何ゑも御望の其冊の意を譯敎へ申べきが大切の初學ゑましませい我私ゑい敎へがたけれい此旨を御父帝へも言上せし上にて心置なく說傳へ御望みを適へ奉らんまづ夫迄彼處にて慰を戲れ給へと一室を出しまいらせて鬱頭覽い頭傾けァラ淺間しき若君かな迚も十善の御位と望み給ふ御志しい中々に思ひも依らずたゝ賢仙の道發心報謝三摩形の御望みあれい幼稚なきの此身とて心い弛されぬ若し左ある時い帝を初め宮中の歎き上下の悲歎譬へん方も有べからず思へい果敢なき思召さりとい雖ぬ此由を包ず隱さず審かに帝へ言上する時い彌萬民の歎きの基ひ唯何卒して御志しを取直させ申さんと心と苦し先案じける偖又太子い心の內に旨として望む書を說傳へぬい如何なる故ぞと御不審はれぬも是又執念も問給いず折を見合せ尋ねんと獨り御心に藏けるも深く尋ね給ゆへ心不良法師共太子ゑ向ひて申すやう「如何に太子君い十善の位ゑ生れ

給へど斯く修行の道と學ぶ時ハ我々ハ阿兄ゐて一膳に連なる友なり此儀如何ゐ思召やとたづねけれハ太子ハ打點頭「扨まろ〳〵未だ九才計りの麿か身を皆の者が深切に勞り呉る忝けなさ麿が十善の位ゐ即ハ吃度憂美を取する故此の間も頼みし如く木像金佛ハ假りの世の造り物にて頼母しからねハ何卒發心報謝の道正眞の佛を拜すべき事を偏へに敎へ傳へてたべ新參ながらも厭ひ無縱へ如何ある行なり共務むべしと泪を浮めて頼ませ給ふ御心の内こそ優しけれ其時一人の僧打點頭徒然に慰を吳んと進を寄り「チヽ其優しき心を愛て後共言ず今此處で其處らの秘密を傳へ申さん必ず他所へな洩し給ひそ开も正眞の御佛を拜まんとならハ此の院より北に隔ちて淫肆と云へる傾城町ハあり之ハ則ち西方の安養淨土を評してあれハ歌舞の菩薩も來降まし〳〵て無明の長夜ハ懸燈籠よ火を點じて明けく皆人の信仰して通ふ所ゐ候と聞けれハ太子ハ行儀を正し給ひて「夫れハ眞か忝けなや何迚彼程よ輙き處ゐあるを鬱頭覽師は敎へぬぞアラ恨めしき師の心ぞやと嘆つ詞を打消て「イヤ〳〵今云ふ彼の處ハ即ち悟りの捷徑にて之佛法の奥儀なれハ迂濶とは師も免さぬを我等は親敵友と思ひ秘密に傳へ申すなり必ず此の事を師の耳へ入れ給ふな彼の町へ夜に入忍びて行て見給へとあ

られぬ虛を叩きければ賢き御身といひ未だ九才の頑是なく是を眞實と歡び給ひて「然ば今宵其處へ往たけれ共路をしらねバ何卒頼む御僧達案内してと御手を曳き給へバ「イヤ我々ハ心立惡敷ゆへ其佛達よ嫌れて拜む事ハ中々適ハず御身一個赴き給へ其路筋ハ斯々と事細かよ敎へけれバ太子ハ彌悅びて日の暮るを待兼て尙ほしぜけなき姿にて立出給ふを引留め「其狀にては人や咎めん此手拭にて面を包ミ僥倖此なる笠を冠り成丈忍びて人目に掛らぬ樣ゐ爲給へ並々ならぬ御身といひ殊よ夜道の事なれバと口にハ情心にハ惡を含みて冷笑ひ門口迄送り出て明日は夜の明ぬさきゐ歸り來ませ夫れ迄ハ師匠の手前は我々宜きに計ひ置ば安心せませと内と外別れてこそハ往く雲の北よ其の名も隱れなき淫肆の里と聞へたる傾城町ハ軒と並べさゝめき渡る其中に婆須密多女と云ふ傾城ハ水際の立美婦にて夜毎に通ふ客人の暇とてハなかりしとかや然ば太子ハ一心に正眞の佛を拜まんと敎へられたる路を急ぎて傾城町へ着給ひ心嬉敷其處此處と詠め給へども中々に之ぞ佛と見受る者一人だにあらざれハ扨ハ罪障深くして麿にハ拜まれ給はぬかアラ情なの光景やと袖を掩てぞ泣体を婆須密多女ハ遠目に見兼て「ノフ夫れに渡らせ給ふ幼きゐ出家何故よ悲み給ふぞ若しや

俄然の病氣に惱そての事共ならい此方へ入りて休ひ給へ能藥を進らせんと情の詞に內へ入り給ひ「アラ厚けなや悦いしや如何なる人か知らぬ共また親みもせぬ者に情深けき志しその其嬉しさに絆されて尋ね問ん事のあり必ず適へてたも麿か願ひを明すべし汗も其方衆い傾城とやらよて在すかやと聞れて婆須密多女い「如何にも妾い傾城にて侍るありと云に太子い雀躍し給ひて「アラ有難や尊としや然い偏に正眞の佛菩薩と拜まれて麿が歎きを留めて給と涙拂ひて賴を給へい數多並居る傾城共皆うち笑口々にイヤ此幼稚お出家い否事云ふて興あらず何處の者で名い何と且して此處へは如何して來せしかと皆異口同音に誹るとい婆須密多は押留「是ノヲ何者よか欺れて其樣な事を言給ふ淺間敷我等の懷ろにい假令夜刀鬼神い住共佛の宿りい思も依ず疾く家地へお返りあれ若し此處彼處と呻吟給へ丶酷き目見んも圖られずと押出さんとすれい太子は氣色を變給て「否何とある何樣ゐつても正眞の佛い拜れぬとかや去いころ五百生の骨々を燒香に焚ても正眞の佛い拜れぬものと師の御坊いいれたり然い奧迄とい云ふまじ竟門口からあらりと拜ましてたも傾城ぞのと幼稚心の一心に蹉跎しつ丶賴を給へい傾城達は譯を知らねい恐怖立て「アラ氣味惡やと散々に立もく一人

の神拽留「これノヲ賴む〳〵と泣叫給ふを振放され此方の一人に又縋りて「偏へに願ひを適へて給と聲を放て泣付を又押やられ突除て皆〳〵逃て往く後に今い詮方泪に居給ふ所へ此家の主走り出「這い忌數小出家めが何を其處に泣くさる傾城が買度ば早く黃金を持て來よと怒りがま數答めければ「チ、金さへ以て來れい佛が拜まれまするかや「如何にも〳〵金さへ澤山持て來れい佛い幾等も拜まれるぞ「夫い嬉しや黃金さへ持て來い正眞の佛が拜まれて母上の菩提が吊はるゝとならい翌日の夜い急度持て來る程に必ず拜して呉よアノ佛を拜むにい他の物と盜んでも大事いないあ「ヲ、大事はないとも偸盜戒を破つても正眞の佛は拜み度とあるれ經を未だ讀ずか呉々も翌日の夜い金を澤山持て來て傾城に抱れて寐て見よ夫れこそ中々安養の淨土なりといひそやしても幼な心よ合點かゆかずイヤ「傾城買ては帶解て抱れて寐ねは成ぬ者か「成ぬ共〳〵傾城の懷ろい安養淨土と云ふ事を未ざ知らぬも無理あらず乳の香失ざるれ坊もへ何い兎もあれ極樂入りは翌日の夜さ〳〵と手の裏返す欲張根性口任せある僞りい裏表ある渡世の心の程ぞ淺間けれ斯て太子は翌日の夜と賴みに廓を出長の路おも一筋に佛を拜せん志よ闇夜をも厭いて唯一個鬱頭覽の院へ立戻りつ

潜かゝ門を忍び入りて例の居間へ這入しが一人熟々思ひ給ぬは扨僧共の教へし如く正眞の佛を拜すべき手蔓ゝ求め得たれ共貯へたる金あけれゝ詮方もなき事なりし何卒黄金を手に入て一度佛を拜そて後母の功徳に備へんと心を凝し居給ひしがナヽ夫れよ今朝見れゝ師の居間に積累ねし布施は皆金なり之を密に盗み取望を遂んと思ひ詰夜の目も合せず待明し其翌日の黄昏ゝ時分はよしと人々の眼ゝ忍び給ひて諸方より寄進の布施物賽錢を掻集めて慾あき心の慾にだまされたまひて彼の里さして出給ぬ扨優陀夷の女房ゝ太子の學問如何あるやと帝の仰ゝ轎曇彌の御見舞を兼ての御使者侍女下僕を引連て鬱頭覧の院へ立越先一禮濟けれゝ鬱頭覧ゝ詞ゝ正して「扨優陀夷殿の御内室宜折の御入かな左おくゝ今日此方より參内せんと存せしあり其儀ゝ外にも候ゝず帝へゝ恐入ぐも已事を得ぬ仔細あつて太子と師弟の契約を唯今御断りを申上奉れゝ帝の御前宜敷樣賴申すと有けれゝ優陀夷の女房眉を顰め「幷ゝ何故か知らず侍れど思ひも依ぬお師匠の御詞哉悪あかきゝ幼子の傚ひ又學問に器用無器用ゝ其者の性質と云ふもの是等の事ゝ有ならゝ假令天子の御子たり共師弟となれゝ心置なく戒め教へ給ふ社師の道と申そべきよ一旦にして素氣なくも師弟の契約を斷ると

は近頃合點のまへらぬれ言葉ありモシ思ひ違ひの事ならずやと男に優る悧發の辨舌鬱頭覽ゐ頭を打振て「其方の仰らるゝ所は尤も至極なれ共中々左樣の儀にゐ非ず學問迚も人幷優れ回鸞麟馬虎頭の筆勢悉曇懸河驪龍の點速かに通せし故並々ならぬ御方故心の底を試し見ん迚一つの机に二百部の世益論と百部の誠諦論を並べ置て太子の志給ふ方を携へ給へと申ければ太子ゐ机の下に暫時小頭を傾られて其二ッの外題を考へ在せしが頓て百部の誠諦論を携へ來り給ひて麿が望とは是なり疾く教てたべ率說傳へよと衣の袖よ縋り付れし其時ゐ此鬱頭覽も思ゐず泪諸共にアラ淺間しや此若君は十善の位を望せ給ふ御方ゝ非で偏よ發心の御志しと推せしものから審かに此趣を言上せは帝を初め輪曇彌の方諸卿賢き者の末迄も嘸や悲と給ゐんと思へゞ愚僧も太子の御前を種々に綾ゝして未だ彼の百部の書ゐ敎へ參らせず好折を見定て二百部の世益論を傳へ參せて帝の御心を慰奉り御子孫繁榮の御政事を做さしめ奉らんと思ひ折々御機嫌を伺ひ諫免賺し進するうち人ゐ幼稚とて油斷のならぬものかあまだ九ツか其處らの御身ゝて過る夜より淫肆と云る傾城町へお通あされ晝ゐ三度の食物も碌にゐ召上らず何となく恍惚としてれ在す故御意見を申上んとゐ思しがいや

〳〵理を言詰て若しや又幼な心の一念に果敢なき御覺悟もましまさば却て愚僧が不忠の至り夫れよりも恙なく宮中へ戻し奉らんまつ夫れ迄ゐ何事の在します共見ぬ顏してはしたなく暇抔致そなと弟子共へも堅く申聞せ御心の儘に任せ置し故已に昨日の夜より院を出させ給未だ御返りもなき次第と具よ語りけをゞ優陀夷の女房堪り兼思ゐず泪滂なして人目も恥ず泣伏ける鬱頭覽も心の內は泣より外ならき苦しさを隱して態とよろ〳〵敷「如何に御方左計りに歎き居る處よ非ず少も早ふ宮中へ戻りて御身の眞人優陀夷殿にも斯の順次を告知せ還御あさしめ進する御計ひこそ然るべしといひければ優陀夷の女房淚を拂ひて「イヤ夫迄もなし女あがらも優陀夷ゐ代つての御使者此儘聞棄にてゐ返られず太子の御還りを待受て一通ゐり御意見を申上若し汚聞入れあさる時ゐ此身を棄ての汚諫めも致さねば萬民への聞へ惡かりなんテモ恨めしき若君かあ過し頃より摩耶夫人の亡後を耳こひ焦れて兎に角發心の思召は孝心の道汚尤もとゐ思ひ乍らもよしなき事に紛らして思ひ止りましまそ樣に爲し何卒十善の汚位に即せ奉り代を知し召を願へゞこそ今ゐ夫れより尙は果敢なき汚心に成給ひしか妾夫婦が附添て是迄守り立進せし其甲斐もなき汚舉動人の誹りよ帝まで御名と

下す口惜さと恨みつ泣け誠心の餘りて喞つ言の葉もいや黄昏の鐘ならで思ひ數ぞふるかねの聲太子の返を待受んと鬱頭覽と諜し合せて一室を隔てゝ忍んとする其折しもいしたなき番僧進み出「コレ優陀夷殿の御内室之を見給へ此内に一杯有りし諸方の布施を太子樣が一つも殘さず淫肆へ御持參遊ばせしと箱を叩いて語き鳧が女房い胸も張裂計ゝ如何なる惡魔の魅入てか斯く淺間敷御身とは成給ひしと切齒をなせど其色を現いさず「ヲヽよし〳〵聞届ました今に埒明て進せませう先夫れ迄は潜に〳〵是御僧達此の一室ゝ妾か忍ひ居る事を太子の戻り給ぬ共必ず知せ給ふなよと言含めけゝ一室の内へ入らんとそるを押留ぬ「イヤ其座敷い即ち太子の御部屋なれバ唐紙一重彼方ゝ隱れて在せかし程なく返らせ給はんかと室中の樣子案内するに從がひて太子の返りを待居ること女ながらも雄々しけれ去程ゝ太子い一心ゝ母摩耶夫人の後世菩提を吊いんと思ひけぬられて淫肆の里へ通ひ馴身をも振をも顧ゑず傾城屋の長に親ゑ只管頼ゑ歎き付一度正眞の御佛を拜まし呉よと宣ひし故固より長は志しの拙き者ゆへ虚に陷入り欺し賺して金を望めば太子い最易き事と數多の布施を秘し持て長が望ゑに任せしも未だ御年の幼けなく殊に天子の御胤なれば金やら土塊なるや人

の物やら我物やゞ貰ふ事やら取事やら更ゝ別ちい渚吹く風に任する青柳の嬰り子同前に在ませば有ん限りに彼の金を貪られても御心い着給ず未だ金慾くば何程もあれば持來りて與ん程ゝ明日の夜さりい僞りなく是非正眞の佛をバ拜まし呉よと約束して廓をそで〳〵立戻り給ひて院の門前なる寶塔の傍らに腰うち掛給ひて吾と我身を熟々と御覽あつて思いずも偖此先い如何せまじと溜息ついて在しける院の内にい優陀夷の女房一室ゝ忍びて氣い張弓今やお還り在ますかと心を金鐵の如くにして守り居る内と外との悲しさ辛苦さは其の狀替れど元い此れ同じく盡す忠と孝何れも愚は無かりけり

釋迦八相倭文庫四編終

再說ょ太子は鬱頭覽の門前なる寶塔へ休息つゝ母摩耶夫人の御菩提ゟ吊いんと爲る御氣根も勞れ何時かに疲れし面ざしを吾と我身で心付誰に語ふ人もなく心細げょ伏沈ミ歎き給ひて在せしゟ遙彼方へ挑灯の火影の來るに打驚き泪を袖に拭ひ給ひつゝ稍立上りて潛り門の扉を最忍びやかに押ば開きし身の僥倖と歡び乍ら密と入りて扠歎石い若や音たてんと爪立足に芝を踐玄關のくり戸より內を覗き給へば常より物潛かに深々と鎭るい折よしと蹐足ょて御居間へ入給へゞ行燈は眠れる如く幽に灯りて物寂寞けれい御心細くも安座して咄と一息繼給ひて思召樣「我身是迄心を碎き母の菩提を吊んと淫肆の廓へ夜毎〳〵に通ひ徃しかど翌日の夜あろい正眞の佛を拜せんと長が約束したれ共今や金い悉皆呉て仕舞へば此先い如何せんチゝろれ〳〵過し頃僧共の語るを聞に此院の本尊の左りに安置せし御佛い南天竺の東に方る南小國の辰巳ある仙山の室ど蓮華臺とぞ云ふ其蓮華臺の座王如來の佛形を忉利天の帝釋が閻浮陀金を以て造りしものと有ゞ今より心ざすい此金佛なり折もよしとて佛殿さしてぞ往給へゞ優陀夷の女房い一室の內に堪へ〳〵て始終の樣子を窺ひ居るとは夢にも知

給い太子い程なく尊像を携へ戻りて幼あき心の唯一心に母上への孝心何い兎もあれ此佛体は金なるか土なるかと短刀もて丁々〳〵と切掛給へば不測や內より金色の光明輝き邊まばゆき折こそあれ優陀夷の女房侍女と一室へ殘し置衣襦脫捨氣色を變て走り出つゝ泪と共ょ太子の振上給ふ短刀の御手と無手と止れゞ太子い駭き振返りて「ヤァ其方い優陀夷の妻何樣して夜深に此院へ參りしぞ仔細や有んと尋問給へゞ女房は御膝元へ寄り添て「御不審い御尤も私しの此院へ參りたるい如何在すや若し御我儘なと遊ばして未熟にも在しあば鬱頭覽殿に遠慮なく嚴數呵り教へよと母君よりの仰せ越されしい表向寔い馴も傲ひしも給いぬ君の起臥此頃の不順の夜寒ょも一方あらず父君の御案事といひ轎曇彌の方迄も此院へ移ゝせ給へし其夜より馴ぬ御身の憂つゝさを御案事ゆて夜の目も合ず餘りの辛さに私しい轎曇彌の方へ願ひ上帝へも此由を申て御顏を拜せんと此院へ來りて見れゞ幷も如何ょ打て變し鬱頭覽のソラ恐敷物語ゟ譬へん方なき御擧動如何ある天魔の魅入てか世に淺間敷徒ら事傾城町と云ふ綽名文字を見るよさへ穢いしきとなるゟ殊に尊き御身にて夜な〳〵通ひ給ひしとい御手ょも似氣なし又賤ゟ傾城に肌觸れしもへか其御顏せの瘦

し事はと恨み泣く詞も涙に口曇るを太子い始終聞給ひ胸と貫く劍より思ひ苦しき中にも思
案を定めて先づ其心を宥め置其上にて深き思案も致さばやと思召せば愛〳〵しき御手ふて
泣入る女房の背を撫さすり給ひて「ノウ優陀夷の妻何事も麼が罪誤つて堪忍しや無憎からう
う免して給と宣へは女房は叭と計りに起直り太子を膝に抱き上「エ、何を御意遊バすぞ貴
君が御可愛けれバ社勿体なくも兎や角と云ふても甲斐なき振分髪未だ八つ九つの御年にて
此世を去給ひし摩耶夫人を眞實の母と迷ひ給ひて其亡跡を深くも吊ひ給ふをさへ悪き樣に
私語て何卒發心を止め進せて萬乘の位に即奉らんと之迄種々御諫めやせしよ情なや今い
しも其發心に百倍劣りし御身の擧動最早天下萬民の思はくも如何あらん是が天子の若君と
何面目に宮中へ今更御供あるべきぞ是と申すも此年頃弓立侍し妾が悪き故に罪なき太子の
御名を穢せし其分疏に自ら果しと世上の者に言せん爲に今此處にて妾は自害致すべし縦へ
五障三障の戒めある男よ劣る女子あり共此身い此處に朽るとも一念凝たる魂魄い太子の陰
身に附纏ひて天魔破神を拂ひ除是非共十善の御位に即まへらせ奉りて帝と初め輪曇彌の
方云も更なり其外賤しき末々迄も國土豊に御代長久と欣喜勇む其狀を草葉の陰より今見る

如くに嬉しけれ左れど此儘此處にて最期を遂るならば二世の睦びの我夫に再度逢ふ瀬も是
なき故恐れながら私の此遺言を太子より優陀夷へ何卒傳へて下さるべし中にも子息繁得
い如何なる因緣の性質にや愚痴にして我名さへも覺へぬ身ゆへ必ず心を付ケ〳〵も何卒人並
の者にして太子へ忠義の名を擧させ果敢なく果し母が名も世に美しう呼れなバ千部万部の
經陀羅尼より增なる功德なし之を土産に成佛せん最期の願ひ是のをあり偏に御告下され
かし妾いはや是迄なり卒や若君れさらいと有合太子の御刀以て死なんと肌をくつろげけれ
バ太子い駭き取縋り「ノウ女房何事ぞやまづ留れよ是ノウと周章留る形狀を鬱頭覽は物陰
より篤と窺ひ今や危急と走り出刀を無手と挟放てバ女房よりも太子い狼狽て「お師匠樣面
目なし麼ころ死なねば適いね身あり跡懇切お吊ひ給へと云ひ〳〵鬱頭覽が持る刀に絕り付吾
と我咽へ突立給いんと爲給ふを鬱頭覽漸く及を隱して「御心急いれ道理なれども身迄御身
の放蕩よも何がお樣子あるべきなり仔細を包まず語り給へと逃れい太子い早速の御挨拶よ
「麼が放蕩の其仔細を語り聞さんも易けれども最前よりも心亂れて胸苦きゆへ彼處ある一
室にて氣を休究竟て詳細語るべしと一室の内へぞ入り給ふ扨又優陀夷は此夜中妻の歸の遲

かるを心元なく思ひしかバ供人僅か召連つゝ鬱頭覽の玄關へ來たりて案内を請ひ云々と言入るれバ疾くも通じて女房ハ亂るゝ形態見せまじと容繕ひ甲斐〳〵敷侍女連て出向ひ「ナゝ、優陀夷殿宜處へまづ此方へと先に立以前の室内へ伴へば鬱頭覽も挨拶畢りて扨太子にハ箇樣〳〵の賤き御身持と語るつらさも聞つらさ優陀夷ハ一入呆れ果須臾詞も無かりしか稍有て若君ハ何處へと問へば女房一室へ指をさし「彼處なる内にと聞よりも優陀夷ハ急立取敢ず襖開さて入らんと爲るを「ヤレ暫時と鬱頭覽ハ押留つゝ必急ハ尤もなれども是にハ仔細の御座あるべしまづ此處よ暫時待給へ程なく此へ出給ふにぞ痛く呵り抔爲給ハで何事も穩便に此院を還御なさしめ給へ此鬱頭覽が譯ての賴み必ずお違へ下さるな御内儀へも談事置たりと念に念をぞ入れにける優陀夷ハ聞て打點頭御坊の仰せ至極せり萬事心得申たり去ながら若君ハ何事ぞ餘りの暇り心元なし是女房疾くと樣子窺ふて餘り夜更ぬ其先に御供して立歸らん疾くと樣子伺へと指揮の下よ女房ハ襖の際へ立越ゐゝ「若君夫れに在ますか若君〳〵と呼ど答への之無きハ不測と夫婦は倡俱に襖を開きて見てけれバ這ハ如何よ太子の陰だよ見へ給ハず彼處此方の隅々を見廻す片邊に開きし扉のありけれバ雪洞かざして篤見

れば最も優しき假名文字にて書記したる筆の跡優陀夷取上讀下せば人に欺され一筋に正眞の佛を拜せんと淫肆の里へ通ひ馴膚身ハ穢し申さねど尊き父の御名を汚し奉り最早宮中へ還るべき身ハ非ず殊に奉加賽錢を盜取たる其上に佛体と及に掛しハ是皆母への孝行とハ雖ど何の因果で淺量よ罪造りある回向して我故して母君ハ暗き闇路に迷ひ給ハん其分疏に潔く腹割切て冥土へ赴き母の手にて打叩かれ呵り受たる其上に奈落の底へ魁して母の呵責の御身代りゐ立んと思へども及物ハ挾取れ此處にて死なれぬ此の身なれば爭存生居ふる可き唯父上の御前を宜く執成呉よかし優陀夷夫婦よ優しくも書殘されし扇なり優陀夷ハ愕然と心も轉倒「イヤ女房狼狽な這りや斯しては居られぬ處彼處の障子明放して彼處よりして忍び出させ給ひしぞと心漫然に急立バ女房は又御紀念の扇つく〳〵と見てけるが涙の中に申やふ樣子も知らずに兎や角と御意見ゑたるが勿体なし免して給ハれ若君と打伏歎き居る處へ鬱頭覽も樣子を聞付て走り出て「御夫婦共ゐ歎き居るべき處に非ず此庭口の外ハ之則ち仇し野の一筋路疾く後より追付て太子の御最期を止め給へサア疾くと急立れハ實にも夫婦ハ身繕ひ優陀夷ハ股立取敢ず庭へ飛下女房急げと急立られて衣褶を把上も敢ず艮

人に續きて急しく外面へ出しよや鬱頭覽聲と懸「此暗夜に挑灯持ずば不便あらんと心付れば優陀夷答へて「イヤ挑灯有てゝ若君よ疾く我々と歸らる可し殊に世間へ内々なればとて言葉急く表の方に優陀夷の供せし足輕來りて「何事の候と言ば優陀夷詞忙敷「ヲヽ宜處へ來たりしぞ其方に申付るゝ此院よ居る年長たる番僧を取逃さぬ樣に嚴敷繩懸て縛め置べし詮議致す事數々あれば必ず扱るなまだ夜明ぬ内に迦毘羅城より太子御迎ひの乘物を密に取寄せて置よかし最等の事決して外へあ洩さぬ樣に心得よ急げ〳〵と立別れ夫婦連立て往くと雖も何れを當途よ後追ふべき折も折とて眞の闇一足先も見へ分ぬよ廣き野原を何方から尋ね初んと心もとり〳〵女房いはや泪ぐみつゝ西の方より廻らんと云ば優陀夷ゝ頭を振「イヤ〳〵東より往くべしと手を取草を蹴分て急ぐよ前途に女房ゝ駭きながらも拇指示して彼處よ光るは若しやまた太子の此世を去給ひし亡魂にてゝ在さぬか「イヤ彼ゝ狐火ゝて少しも恐怖者でゝあし斯る折から左計りの不吉三昧言ずとも早う〳〵と誘はれ女房ゝ流石に女氣の心後れて立留り持病の癪のさし込で胸先苦しく壜難さ最一足も歩行ぬ痛や〳〵と遥の邊の千種の上に伏轉べば優陀夷ゝ詞を荒らげて「コヤ甲斐なし此暇に太子の御身に万一の

事あるならば二個共よ何面目ありてか宮中へ歸らるべき何樣せ死べき命なり憤然とせよと呵りゝ心で勞る優陀夷より勞れるゝ女房の心の中ゝ如何ならん病ひよ勝れず唄々と返事の内よゥンと計り仰向よ反て絶息たり優陀夷は周章て大音に呼と答への有ばこそ辛くも片邊よ立越て流れの水を手に汲汙も此流の源ゝ雪山の實靈に續くと聞く然れば諸佛諸菩薩の力を添へ此水に奇特を現し妻の病苦を助け給へと一念凝して口より口に含れば佛の利益有難や信の一心通じけん女房は活と眼を見開て「噫有難や諸の諸菩薩が今出現て宣ふよゝ明覺無碍の太子なりと雖も數多の外道が附纏ひ修行を妨げ或ゝ又死神となりて禍ひそると諸佛守護すと雖も御身の上は尚危し急ぎ助進せよと教へられしと語りければ優陀夷ゝ大ひに力を得て「然ば太子の御身ゝは未だ恙ゝあらざるか歡ばしや少しも疾く索ね申さん此仇し野の内よりゝ余もや外に赴き給ふまじ卒や急がんと夫婦互ひに屬と合彼方此方と索ね往く心配りゝ切なりける去程に悉達太子は鬱頭覽の院を忍び出踐も儘ゝぬ荒野の中其處よ此處よと悼いしや最期所ゝ行吟ゝながら流石此世の名殘にゝ父君に忍引されて休息暇も泣泪優陀夷夫婦と幾度か袖すれ違へど情なや此世の緣の暗夜に夫とゝ知らで西へ往き優陀夷ゝ東

に人影と馳着見れゝ口惜や枯し茅花よ招がれしと又立戻る西の方太子ゝ怪き人影と東へ忍ぶ磨合に蹶く石も縁の端餘りと云ゞ腹立し五更の天の北斗さへ光りを失ふ雨曇の雨も降く
る計りなる空虚々光景に女房ゝ優陀夷の袖引留「コレ此様に幾度か同じ路を那方へ往き此
方へ往きて索ね廻るに今迄合ぬも奇異なり折々人影の磨違ふて慄と身にしむ氣持のするゝ
慥に狐か狸であるなゝん夫よ又空合は順次に悪くなり氣の濟ぬ事ぢも澤山ありぬ如何に佛
の御報知有ばとて此様に悪き辻占ゝ若しや太子の御身の上に過ちゝ有や爲ましきかと思へ
ゞ最う妾はゝ生て居る氣ゝ之なしと云ぬ聲さへも曇せて袖に泪を押拭へゞ優陀夷ゝ聲とい
ら立て愚痴計り言出して奚の彼のとて泣しずむは本意にあらず然ゞ今度は手配して其方と
我とが右左り廻つて索ぬる程ならば見遁し申ゝ餘も有まじ尚夫にても會ずんば是非よ及ば
ぬ豫ての覺悟二個の命を仇し野の仇となす共恨みゝあらじと西と東へ立別れ心に佛の御名
を唱へ路を別てゞ索ね往く夫婦か忠義の眞實心憐れ共切なり共云ふも中々愚なり却説も太
子にゝ尚ほも此處彼處と仇し野の露と成身を迷ひ給ひて途ある木蔭に冬枯たる薄茅花の其
中に誰亡後の印しよか數多の石碑荒々て並立を御覽じて此處ぞ宜き我最期處と已よ御覺悟

在ませ共死ぬべき仕方ゝ御存じなければ何様して死なふ斯しやうかとゝと思案に暮給ひ
しが稍あつて上を御覽じて「ナヽ死ぬるよ宜き物見付しぞ彼處なる柳の下枝へ腰の細紐結
び下夫へ懸りて相果んと紐を解々雨手に捧げ延上りつ飛付て懸んと爲せぢも身丈足らず紐
ゝ外れて懸らねゞ又々智慧を施し給ひ傍らに在手頃の石を手弱き腕以て二ゝ三ゝ漸くゝ積
重ねて夫く上り給へゞ柳の下枝思ふが儘に手の屆ば「アヽ嬉しやと早くも細紐を結び付一
息繼給ひて「今が此世の暇乞父樣上や轎曇彌の方先立不孝を免させ給へ又二ゝにゝ優陀夷
夫婦が心を竭して此年迄育てくれし其恩さへ報すにすべあらき今際の最期嘸や夫婦が今頃ゝ
無情くも麿が身を淺間しき者ぞと恨んで居あらめ迚も汚れたる身にし有ば宮中へゝ還られ
ず今此原で死に果て禽や獸の餌食となり身の罪障を滅すべし方々然ば南無阿彌陀佛と念じ
つゞ飛んと爲給へる其折柄右と左りに來る人音に見付られじと立たる儘息を殺して居給ふ
處へ優陀夷と女房と廻り會わやなき闇に透し見て「其方ゝ女房かヲヽ優陀夷殿と是程迄に
索ねまはるも見へ給ゝぬゝ太子は最早賴その綱も切果たれは既に覺悟を極めたりとて片邊
の石に腰打懸正体泪に濳なして眼も當られぬ悼ゝしさ優陀夷も俱に不覺の涙泪掻拂ひ聲

潤ませて「如何にも〳〵彼程よ心を竭しても廻り會ざる上からい豫ての覺悟を極むべし去乍ら宮中に只獨り殘し置たる子息槃特が事思ひ出せバ悼い數年齡も往ぬ幼兒を一個寢させて兩人共別れしまゝに果しなば後よて局の者共にも親の無き子と侮られ疎まれて辛苦身の立往く方も無き身とならバ嚊ぞ酷き兩親と嘆り泪い目の前に今見る如くよ憫れ也と太子を思ふ其中あも又子を思ふ親心女房い尙更婦氣のいとゝ泪だに掻き暮れて「ア、其樣に悲歎まと耳云給ふい妾い固より女子の身にしあれバ遠から胸に滿れぞも口よ走らい今茲で太子を尋ぬる大事の塲合悴れぞころの事でおしと呵られもやせんと思ひしかい獨り心を苦めた り實に浮世の俚諺よ持べき者い子ありと雖ぞも今の此身い中〳〵に一個の子息が有ゆへに黃泉の障りと成よ鳧と語る折柄鬱頭覽院の時鐘明六刻を告れば女房は氣を焦ち「毎迄悔む も甲斐無き事二個の最期を今此處でと覺悟の詞に優陀夷い押留「イヤ初めよりして偕老の契りは致せしが此處にて二個が相果おは世間の者の口の端に徒ら事の情死抔と言觸されるが口惜さ「イェ〳〵妾よとい二世の緣死おバ一所と心の內に堅くも誓ひし事なれバ人い何共言い云何樣でも來世は同じ蓮と死後を語ふ折しもあれ一番鳥の啼渡れバ優陀夷い天を見上つゝ最早夜明に程あるよじ日の出を告る鳥啼吉事に近き今の辻占何と女房アレ聞しかと云ぬ間を啼ゆく鳥の聲女房も氣を取直し左なりと云り〳〵天を見上るに石の臺座に立給ふ太子を見るもまだ暗きに夫とい知らずに優陀夷に向ひ「コレ此處よ辱けなくも石の地藏の立せ給ふぞ聞及ぶよ地藏菩薩い小兒を守る佛とある太子のお命恙なく未だ此世に在さば現在を守らせ給へかし若し此世を去給はゞ後世を偏に助給へ南無地藏大菩薩薩埵の誓ひを現し給へと心よ深く念じつゝ是優陀夷殿も拜ミ給へと勸められ容を正して夫婦諸共手を合せ泪と共に唱ふる樣南無衆生正念必德往生知るべし本生重けれバ正念する者咸生ると太子へ向ひて南無阿彌陀佛〳〵〳〵と太子の誓ひをぞ懸けるを太子は始終聞よりも優陀夷夫婦が懷しや我を助る誓願を我へ向ひて賴むとい知らぬとは云おがら餘りお果敢なき闇路に迷ふ其心根のいぢらしさ寧ろ名乘りて出たらば兩人の命も助からんヤレ懷かしや優陀夷夫婦是れあるい麼ありと言んと云給ひしかゝヤ〳〵斯淺間しき此身の罪障覺悟しながら今更よ名乘い愚の至り愛着心に引れてい後世い成佛ならぬと聞く此處ア大事の處ありと口の內にて今生の暇乞を宣ふ程に流石に深き恩愛を止る其苦しさい胸先へ刀の如くに突くる泪

を飲込て震ぬ身をも震いせもせず堪忍びて目を閉給へバ夫婦の姿い見へね共太子〳〵と打歎く其聲耳に入るものから聞に堪兼留めがたき御泪閉たる眶に堰留難く思いずはら〳〵と灌ちり優陀夷夫婦の顔へ懸れい女房は打驚き「噫疎しや雨が降來たれり 曹 のせぬ其先に最う一度念晴しよ廻つて見よかしと顔に懸りし泪の雨夫とは知らずよ袖以て拭ふ優陀夷も己が泪の雨乾かぬ顔へ太子の涙一滴とふり懸る一滴は千尋の海にもまた勝る太子の思ひ旁〳〵に顔に晴間い無かりけり斯りし程に夫婦の者は雨の大降せぬ内にと目の前なる太子を置すてゝ後の憐れも知らぬが佛打連急ぐ二人の後を太子い見送り〳〵て「噫我ながら愚の歎きイザ最期と兩手を合せ「願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國南無阿彌阿佛〳〵と句をつぎて以前の紐に懸り石を後へ蹴返し乍ら閃りと飛ば悼はしや僅九才を一期として此世の息は絶へふけり○曇りてい夜明も遲く未だ闇きに鉦を力に打鳴し墓所〳〵を回向する寒念佛のひと〳〵も口には稱名途絶へ無く此處へ來懸りしが不圖傍らを透し見て「ハテ朝な〳〵廻れ共竟しか見ざる彼の佛どれ〳〵回向致さん御側へ立寄り熟々見て「這りや佛じやなし幼子の首縊りぢや後世而已を助るが出家の役よあらず現在は尚しもの事ゲイデ助

て見んと石へ上りけ細紐解て抱下し身内を探れば未だ暖かなり這は幸と大音に「幼兒よのぬ〳〵と幾度か呼いけ〳〵抱き擧て口に吹込此世の風太子いフット蘇生御目を開き邊りを見給ひ噫情なや又も此世へ返りしかと宣ふ内に優陀夷夫婦は出家の幼兒〳〵と呼ぶ高聲を遙彼所に聞付て若しや夫かと遽しく夫婦侶倶馳來りて見れい出家の抱きたるい太子ふてありけるふぞ「ヤレ嬉しや辱けなや御身恙なく在ませしかと女房疾くも抱き取悲ミ泪忽ちに嬉し泪となり替る優陀夷は件んの修行者に有りし樣子を打聞て這い辱けなき御坊かな御名は何と宣ふぞと問ふに出家の答ぬるやう「イヤ我等い家を棄身を棄て唯雲水に任する修行者なり名乘よい及いず人を助るい出家の役親戚の者なら幸ぞ勞り給へと言棄て恩にも着せず其の儘に笠と取上鉦うち鳴して見返りもせず別れ往く後を優陀夷い見送りて如何にも尊き僧の形勢名をさへ言ぬ美しさノウ女房此處い先刻ほど腰掛たる地藏菩薩の前なれは今い地藏い在まさず偖い太子と見違しか如何よ暗夜なれい迎去りとい知で志良〳〵と後世を賴ミし愚さよ其折抔で御名をは名乘て夫婦が千辛万苦を休めては給いらざりしと勞り乍ら恨み唔てバ太子も今更思ひに堪へ兼「ノウ夫婦の者其恨みは然ながら忍び隱て死なうと

せしい深き願ひの有ゆへぞ最何にも云ふてお呉ろ麿が誤りと宣ふにぞ夫婦い叭と恐れ入這い勿体なや餘りの事に思いずもれ恨申せし愚かさよサア還御在ませと夫婦い之より慰労て御世繼にそるの下心女房い早速の口調子よ浮れて謡ふ子守謡優陀夷が囃す雨ふん〳〵も拍子抜たる可笑さに昨夜の難儀に引替て荒野の路も苦に成ず已よ其夜もすがら〳〵と明渡りた る山かづら天い迷ひの雲晴て日輪東に輝ば夫婦ば御壽命長久と欣喜の眉を開きつゝ太子に侍き鬱頭覽院へぞ急ぎける偖鬱頭覽院にい優陀夷が殘せし彼の足輕一個の番僧へ繩を懸堅く縛めて繫ぎ置ぬ且太子御迎ひの乘物の準備も整へたれど優陀夷の返り遲かるい如何にも心元なしと起つ居つして野面を詠めて待詫る折柄以前の庭口より太子の御還御あるを見て漸に心を落付て繩付の番僧を守り居ける稍あつて女房い姿を改め太子に侍き又其夫優陀夷い威儀を正して先に立つゝ玄關の障子さらりと押開きて大音よ「ヤア〳〵豫て申付置し純付の僧を是へ引と詞鋭く呼立れい「叭と答へて足輕ども彼の純付を太子出御の玄關前まと引据たり其時優陀夷い惡僧を確と睨付「ヤア汝ぢ番僧承まれい過つる頃悉達太子此院に移らせ給ひしより斛飯王の一子提婆達多が先日小弓の勝負に打負たるを深くも無念ゐ思

ひ其遺恨を報いん爲に汝を犬に入置て有るよもあられぬ惡事を勸奉り太子の御學問を妨け候のみならず大切なる御身を能も汚させしよな抑〳〵淨飯王斛飯王の兄君ゐまし〳〵て辱けなくも今萬乘の御位に備り終に其御子ある悉達太子と提婆とい則ち從弟ぞふしの續きなり是等の事を辨乍ら能も提婆の惡心よ荷擔せしこそ奇怪なり豫て我忍び目附を以て惡事い詳かに之れを知る最早秘するも隱されず明白よ白狀して及を受よ迚も免さぬ命なから此佛の庭面よて果るとい开も惡人ゐい似ぬ冥加な奴免と刀すらりと扳放ち其面前へ突付つゝサア此刀にて引導せん疾白狀せよと突付しに純付の僧は大膽ゐも冷笑てオ、聞及ぶ優陀夷とやら斯く露顯に及ぶ上い何をか包まん我こそい摩偈國の北山に住法性妙顯と云ふ者にて十六魔界百種の外道七道速疾鬼を手下としてあらゆる魔術を行ひて天變不思議を働く身あれい縱へ百筋千筋の縛縄に懸れい迚怯みいせねど事の露れぬ今迄い太子を首尾能往生させ此處を遁れ去り提婆か許へ立越て愈々太子い小氣味よし我と我身を果すやう工風をせんと凝して殺したりと言誇らんと思ひしゐアラ腹立しや遺憾や命冥加な惡達なり再ひ見るこそ口惜けれと彼方の太子を睨付れは優陀夷い堪へず刀を振上首打落さんと爲る處を太子い急

提婆達多
魔王と集め
て悉達太子を
妨けんとし

押留め給ひ「是優陀夷其憤りは尤もなから院の庭にて人を傷め佛塲を汚さん事麼か忍ぶ適ゝねゞ先々此塲は助てよと言つゝ側に立寄て自ら縄を解給ふ仁心の程ぞ有難けれ優陀夷ゝ駭き太子ぶ向ひ這ゝ有難き君の御慈悲かゞ去ながら是等の如き大悪人を殺せゝ逆聊か以て罪ならす却て多くの人を助くる大善根なり左無くゞ天下を惱して竟にゝ此世を己がまゝ魔界にする工あれゞ助置くべき奴に非す此所のき給へと言敢ず又振上る手を押へて太子ゝ悪僧に打向ひ此後急度慎みて悪事を思ひ止るべしと種々教へ説しゞゝ又優陀夷にも詞を竭して其心を宥め給ひ竟に縄解放ち給へゝ優陀夷も今は詮方無く雲時片邊に扣へたり其時悪僧忽ちぶ大地をも踏貫計りに踊り上りて優陀夷に向ひ「ヤァ小悧き及三味思ひ知らさん其見よかしと天へ向ひて印を結ひ口ぶ秘文を唱ゆれゝ俄に震動夥敷此處彼處ぶ黒雲渦巻て其中にあらゆる悪魔悪鬼神外道の眷属異形の者夥敷現はれ出て太子を初め優陀夷等を挫しがんと近寄るを優陀夷ゝ憶せす立向ふぶ皆〳〵恐怖て骸居中に流石に優陀夷の女房は褄掻上て甲斐〳〵敷太子を抱きて院の内にう入りにける去れば優陀夷か扳たる獅子王の名劔ゝ悪魔外道も恐怖を倣し法性妙顯も遂ぶゝ雲の内に逃入りて摩偸國北山さして矛逃

去たり劔の威徳ぞ尊けれ後に優陀夷ゝ切歯をなし「アラ口惜や悪魔共太子の深き恵ぶ絆されて取逃せしか遺憾なり思へば惜き提婆ぞの此上共に油斷の成ぬゝ太子の御身まづ兎も角も此院を還御なさしめ奉らんと夫々の者を呼集へぜ以前の騒ぎに氣臆れして皆〳〵隠れ居たりしが優陀夷に忙敷呼立られ詮方なくも恐る〳〵ぶ御供立をぞなしにける斯て優陀夷ゝ鬱頭覧に向ひ慇懃ぶ一禮を述太子を御乗物に移し還御あさしめ奉らんと申上しに何故ぶか太子は左右の御返答なく御顔を襟に差入れ給ひて歎き給へる御装ひ女房ゝ不審の眉を顰めて御膝元へ進み寄「是ゝ若君又おむづかりぶ遊ばすか少しも早ふ還御なし〳〵て父君への御對面殊にお嬉ゝ筈なるぶお悲歎とゝ聞へはべらずと和かに諫奉れゝ太子ゝ涙を拂ゝせ給ひて「イヤのふ女房何と云ふぞ父君へ御目に懸る儀ゝ最とも嬉しきことあるが此院へ移りてより學問は得遂ずして由無き人に欺されて有れも無き事仕出して不義放埒の名を求め奉加賽錢を偸出し或は佛像を刀に懸たると旁以て面目無し生甲斐もなき此身にて父君は云迩もなく數多の者共へも今更顔を合せん事の耻敷さ夫が哀しく覺ゆるとうち泣給ふを女房は實にお道理とゝ思ひ乍ら左ならぬ体よて夫等ゝ君の御心より固より出し事ならねば偽

りし人の罪とてろおれ聊か君の御身に懸りいせず縦へ神佛の尊像を汚し給ひし迚御孝心よりの事おれい神佛も免し給ふなり此處を能聞分給ひて御心易く恩召噫譯もなや若君樣疾々還御遊ばせと非を理よ云る方便も時よ取ては善の綱漸々賺し掠へて御乘物にぞ移し進せ夫々の者を附隨ひて列を亂さず御供して鬱頭覽院と還御あれは女房い鬱頭覽へ始終の挨拶迚畢り太子の後より身繕ひして侍女下僕を引連つゝ返る途中も兎や角と太子の事のみ心よ懸片時忘れぬ誠心より宮中の御首尾も是れ斯と我眞先へ立返りて帝の御前を執成んと下僕に近道と案内させ迦毘羅城へと急つる心のうちぞ切なりける

釋迦八相倭文庫五編終

釋迦八相倭文庫六編

去程よ悉達太子の御乘輿を迦毘羅城へ急がする其道の邊よ白髮の一個の修行者露の身の末の命も細き音の鉦打鳴し來懸るを御先を拂ふ徒武士ども眼に角立てゝはした無く「ヤア見苦しき非人坊這は辱けなくも帝の若君鬱頭覽弗より還御の御先側寄れ〳〵と罵り乍ら肩臂强く突除れば年浪寄し翁の足元蹌踉て轉倒ぶを夫打拂へと御後より下部一人走り來て長柄の元にて刎飛ゝを太子は乘輿より御覽じて御聲を懸給ひて駕籠卸させて遽敷立出給へば優陀夷を初め從士の面々是い如何にと止るを耳にも掛給ず走り集る下部を彼方へ呵り除伏轉びのゝ惱める翁の手を把援起して塵うち拂ひ勞りのゝ「ノウ翁免してたべ下部い畜類に異ならねば老たるを尊敬ふ事父母の如しとある敎へと知らず如何に優陀夷 承れ君十善の位と保つも國土豐穰に萬民の繁榮を護る爲ぞかし然るを强面今の擧動麼が心は如何程か苦しからん其方も翁を勞いらすやと實ゝ有難さ御詞よ優陀夷は忽伏して側へ寄りて勞いれば翁い惱る色を隱し襟掻繕ひて太子の御顏熟々と見て「這い不測あり貴君い正しく此曉仇し野にて我助たる幼兒よと云ふ詞に優陀夷い駭き翁に對ひ「偖い先に逢た修行者殿か盡

ぬ縁しに廻り會深き恩をば仇で報ひしも知らぬ事と下部の慮外偏よ免さをよかし何は兎もあれ此、處ゝ途中まづ迦毘羅城へ同伴ふべしいざ〳〵と勸むれば翁ゝ頭を打振て「イヤ夫やゝ及ばず餘りゝ優しき此稚の志しに愛て今此處に我身の上を明そべし夫南海國の都をば旃那羅城と申すなり此都の主屠摩迦王の一子屠紹太子と云ゟゝ則ち我あり其初允十五才の時道淨國の長ある縣仙と云ゟ山にて法會菩薩摩迦般若を說給へば其聽聞を望むより宮中を忍び出法座よ列なる程もなく其の菩薩ゝ惜き涅槃よ入り給へゝ半偈を聞きて半偈を聞ず此儘宮中へ還りて十善万乘の君と侍かれては漸くよして聞得たる般若の功德も空歟後生如何と思ひし故一つよゝ菩薩へ報恩二つには此身の修行と住馴し都を他處に見てあらゆる諸國〳〵を遍歷せしよ今將思ひ數ふれば七十年にも餘りて今日不測よも情ある若宮に廻り會しあろ嬉しけれアラ豊ある若君の裝ひ哉噫夫迚も賴まれず老少不定ゝ世の習ひ萬事ゝ夢の浮世あるぞ若宮さらバと立上るを今ゝ人目も憚からず往んとする袖に取縋り給ひて「アヲ尊き翁かな麿も兼々最深く志しぬる事あれば何國迄も連行て般若の道を一字たり共敎へ學ばせ給へかし左なくば此處ゝ放たじと漫然泣して縋り付他事もなく見ゆるを優陀夷は押留

這ゝ淺間しき御心にぞある發心の御望を思ひ止まり給ゝぬゝ父上ゝ豊打棄給ふべき率御乘輿に召給へと心に泪眼に角立て翁と隔て退くれゝ翁も智者優陀夷の心を夫と察して去氣あくかゝ〳〵と打笑袖振切て往んとするを太子は引留め給ひて「ノウ情なや是非とも連れて行道理なく見もるを荒氣なく態と振切て翁ゝ急ぎ別れ往く太子ゝ何と詮方泣々唯忙然と立せ給ふを優陀夷初め附屬は諫奉りて御乘輿に移し給り迦毘羅城へと還御なりしは如何にも辛き彼光景なり去程に太子ゝ宮中へ還御ましく〳〵て玉の床に着給ふと雖ども翁の事を聞給ひしより尙更發心の志し强く如何にもして彼の道に入らんと御心に撓みなく染ぬ浮世の塵に交らひ給へゝ之を世に傳へて如來九才の出家十一解脫とは申侍りぬ偖又優陀夷は轜曇彌の前へ密に進み出て太子鬱頭覽院にての御擧動殊ゟ提婆の謀叛幷に外道の怪き事より還御の途中にて彼の翁の形狀を細密に申上れゝ轜曇彌は深く駭き大ひに哀み給ひて「いやとよ優陀夷アノ太子は彌發心の志しゝ止り給ゝぬゟ極りたり然ゝ迚此儘に聞流し打棄置ゝ其方ゝ勿論自らの失策なれゝ幸に父君の今宵奥へ渡御らせ給ゝゝ夫等の形勢審かに御物語り申上ん先夫迄は附屬の者へも包ゝ隱すへしと仰ありて御暇給はりつゝ頓て夜の御

身じまひも何となく物濕やかある折しもあれ那方ゝ賑ゝしく他眼の關は越る共爭兎さん戀の關正月は味もなしと女中が謠へゝ男も謠ふ奥と表の堺ある御口の鈴の音高々と帝の御入を報知れゝ皆々襟裏取つゝ女中達の御出迎ひ申上け直樣夜のお床へ移し奉りて夫々よ御機嫌伺ひも相濟ゝ優陀夷の女房指揮して皆お暇を給はれゝ數多の女中ゝ例よりゝ早いお退と笑顔を作り頭と振て詰所〳〵へ部屋〳〵へ皆下り往きよけり斯て輪曇彌の御方ゝ帝の御機嫌の折を伺ひ御膝近く進み寄りて「唯今申上るゝ外ならず太子の御身の上箇樣〳〵と先に優陀夷が申上し如くに細密お告奉れは帝は太く御心を痛兌給ひて雲時御涙に暮給ひしか稍あつて宣ふやゆ「嗟有りし事今歎くも返りがたし兎も角も今回の仔細は麼か知らぬ振にもてなし其方と優陀夷が談合して急度諭すべし偖其後よ麼が思ふ計ひも有ゝとて物和かなる仰せを受輪曇彌は歎きの中に嬉しき君の御詞と心落付て其夜ゝ紅閨よ夢をゞ結れける翌日輪曇彌ゝ帝の仰を其儘に優陀夷を召て物語給へゝ優陀夷ゝ心得て只何となく太子を輪曇彌の御居室へ誘引奉り邊りの人々を遠避られしゆへ太子ゝ疾くも夫と悟り給へど何氣なく在するを輪曇彌ゝ微笑に「チヽ何時見ても麗しき御裝ひ父君初め自らの悦ひ此上や侍

るべき夫に付少尋ね度御事あり此程人の風聞に太子は發心報謝の道三摩耶行の御望深く在ますとあるご夫ゝいかにと尋給へゝ太子其色を隱し給はんと微笑給ひて「是は〳〵母上の愚ひも依らぬ御尋問哉然ゝ眞實を告申たてまつらん麼が鬱頭覽院へ移りてより一個寐の肌寒く身をも世をも顧ミず淫肆の廓へ通ひ馴ぬ事の數々お人の誹謗も放任よして竟よ鬱頭覽の布施奉加賽錢迄も運び盡し夫のみ成ず閻浮陀金の佛身にまで及を懸しゝ優陀夷の妻も知る處なり噫勿体なや恐ろしや此外に發心とやらは如何なる事か覺へなしと最恥し氣に宣へゝ輪曇彌ゝ顔打振て「イヤ其事は聞侍りしさあらぬ此程鬱頭覽より還御の途中見る影もなき修行者の僞り事を申せしを太子ゝ深くも信じ給ひて直に發心の師共願まん計りの御擧動是は如何なる御事ゾ若し左樣の事も有られ自らゝ如何にせん若君在ませばこそ帝の御惠も深く殊に御代繁榮と萬民の歡喜び之よ過ず其愛度さに引替ていよ〳〵發心の御望あらば是非もなし自らも假令如何ある野山の末虎狼狐狸の巢窟迄も太子に從ひ參らせんと思へゝ思ひ想いるゝ後の此身の辛さより今の心の哀しさを果敢なき花の露程も察し給へと搔口説袂と顔お押當て消入る計りに歎き給へゝ片邊聞する優陀夷も共に貰ひ泣して扣ゆれは太

子も流石やるせなく旁々の心を宥めんと思ひて「是ゝ由なき御歎息夫發心報謝とは道と智恵と慈悲心にて一つ欠ても適ひ難し抑〳〵道とゝ心の沙汰智恵とは思慮分別慈悲とゝ人に隨ひて心を破ぬを申すあり麼が鬱頭覽院より還る道の傍ゟ來懸りたる年涙よりし修行者を下官共のはした無く打惱すを見るに忍びず老を敬ふ事父母の如しと聞からに乘輿より立出て翁の心を宥めしに其翁のいふよゝ我も或國の太子にて多くの臣家に侍かれしかゝハヂとらハゲとやら云ふ惡き事を好こしゆへ竟に國を放逐されて斯る拙き身に零落此處等の國まで行吟味來たりといひし故自ら翁の袖引留其ハヂとやらハゲとやら云ふ御身の好し物を聞欲しと尋けれゝ此翁ゝ好の道を人に包むか得も言で唯打笑つゝ往き過たり是等の事も優陀夷ゝ能く知りぬ其ハヂとやらハゲとやら云ふ物は位も國も失ふ程の惡き者なれゝ悉達ゝさら〳〵以て望となしアラ恐怖のゝねゝげや崑崙の山ゝ崩るゝ共麼が心ゝ空しくせじ若しや惡事とあらゝ優陀夷ゝ急度麼を諫ゑよ必ず父君や母上に密に申ゑ事勿れと御心の底を隱蔽し給ひ唯片言に宣ふを夫とゝ知らず轜曇彌の方御泪を押拭ひ給ひて「ノウ免して給若君左程やさしき御心を恨み申せし恥しさよ智恵あき者ゟ智恵付て却て不覺と取しよな般若をゝねと思ひ給ひ半偈をゝげと思召最あやけ無き幼心ゟ何事の在すべき優陀夷心易く思れよ如何に誰かある來やれよと呼給へゝ出來る女中達頓て太子に侍きて優陀夷も共ゟ御暇をぞ賜ゝりける已に日も　や暮近き折柄雪の降出て遽ゟ積る白妙の御庭の那方にて十一二の女子の聲にて「少と御願ひ申ますと云ふ聲も降しきる吹雪ゟ揉れて最幽に聞るを御側に居合す命婦聞付て氣味惡けに耳を欹てゝ窺へゞ之正しく乙女の聲ゟ違はねゝ樣子を見んとて手傘に雪を凌ぎつゝ御庭の折戸を細目に開て見れゝ未た十才計りの幼き處女最と憐れある姿にて雪ゟ埋れて畏り命婦を見るより叭と手をつき私しゝ過し年善乘國の善覺大臣の御娘轜曇彌の方の御陪人にて此迦毘羅城の月景殿へ參りたる馬將軍の娘ゟ侍るあり遠き所を唯一人父を尋ねて參りましたれば何卒お取次くだされて父に逢してたび給へと後は泪に聲枯て憐れ共憫然共譬へん方無き形勢を見るより命婦ゝ胸塞がり勞り度ゝ思へ共假初ならぬ譯あれゝよう〳〵敷も其仔細を知らせんと浮む泪を飲込て「成程其馬將軍ゝ轜曇彌の御方の御附ゟて有たれゞ如何ある所存ありけるや過し頃此方を立去今でゝ大惡無道の提婆達多に仕ふると聞ゝ其方ゟ罪は無けれ共此方の敵となる者の娘にてゝ片時なり共置事成ねは疾

くいで々出て徃がしと柴折戸はたと立切は娘は堪兼打伏て声と計りよ泣入れい轎曇彌い端近く出給ひて命婦に仔細を聞給ひ偖も憫然や幼子なれは幵も如何程の事ゐらん尋たき事も有れい恐多きとながら密に此方へ呼入れよと聞て命婦い心嬉しく再度出て折戸を開娘を見れい斯は如何に雪に埋れて生体なく手足も冷て絶へ〳〵なる玉の緒の力草命婦い漸く抱起し肌に添へつゝ温をとりお梯間の元まで連來りて一方ならぬ介抱に娘い漸々顔をあけ邊り見廻し駭きつゝ泪ながらに轎曇彌を見あぐれい轎曇彌も又處女の顔を熟々と御覧あるに遠路の旅に疲れても如何にも氣高き爪外づれ同じ浮世に生れわひて太子や姫と崇められるゝもあり又此樣よ無殘しく居所にさへ迷ふ子も有い如何なる因果の事あるぞ親の心が眞實あらぬい老先長き幼子を斯の如く路途に迷いす馬將軍い鬼畜ぞと親を憎そて子を憐れを思いず袖をぞ濡し給へい命婦も倶よ貰ひ泣して暫時詞も無かりしか轎曇彌い思案を極めて敵の血統と知り乍らなまおかに憫然を加へて物聞きたてせい後の別れも辛うらんと言葉優しく乙女に對ひ「コヤ處女無強面しと恨べきが此處には置く事成かたし氣も落付い支度して親戚の方へ往くが宜此品は些少ながらも其方に遣る物にはあらねど此處へな棄る故拾ふて戻るべし

とて菓子菓物鼻紙まで何か取交て服紗に包そて下さるゝを這い有難し共言兼る幼心に唯平伏泪拭ふて身繕ひを見る目哀しさ彌増て命婦い轎曇彌よ手をつきて「何卒此子を一夜さい此お梯間の下へおりとも寐さして遣り度存じますと願へば轎曇彌い御聲くもらせて妾も女子のことなれば此の大雪に殊よ夜も深けゝれば強面歸すも憫然あり其處を堪へて素氣無くも歸さにや成ぬ譯あれば逐遣る此身の心の内如何で有ふと推量しやれと言りゝ御泪よ暮給ふを娘い聞分て「ノウ奥樣勿体ない大恩受し御主樣を棄し父樣のお悪しみよ引かへての此お恵を譬へ父樣い御敵にもなれ私しい此御恩を何迄も忘れませねば何卒父樣の罪科をれ免されてくださりませコレ此樣に手を合せて詫を申上ますと泪の霰いふ〳〵と平伏敏捷しさに轎曇彌命婦も今い堪り兼倶に泪の顔を掩ひ「又其樣に憐れな事と云ふて泣すかや親に似ぬ子の可愛さに後日如何なる事のあればあれ是を見棄て歸さるべき今宵一夜は塞くおさらばと留ても留らぬ立上れば雪をもやそし薄月に命婦い是非なく跡に添折戸口まで見送りて「ノウ娘子必ず雪に辷り給ふなよ又食物よも氣を付て病はぬ樣に去やれとねんひ聞し

けれは「哇々有難う存じゆうすと後振返り〳〵たどり徃くまろ憐れなれ」斯て其翌日となりけれゝ轎曇彌ゝ彼娘の行末と尙ほも案じ給ひて御心も更ゝ浮やらず命婦を召て仰せらるゝゝ「何と命婦昨日の娘ゝ雪踐分て今頃は何處に居やらん」「アレ貴女樣にゝ又梁を思ひ出だされて其樣ゝ事御意遊はし泪をお浮め遊はそか最う斷然と思ひ切遊ハせと申ものゝ嘸今頃はと跡は泪に口曇れゝ轎曇彌ゝ目を臚腱、給ひて「妾ゝ早や哀もあし思ゝ憎き敵の子と袖をかざし給へゝ互ひよ泪を爭ふ障子の外お庭掃除の好僕の聲よて「此に見馴ぬ藁裏ありと聞より命婦ゝ駭き立出てゝれを見るより是こそゝ昨日の娘が忘れし品と云兼けれゝ他所に紛らして受取つゝ轎曇彌よ斯と告果敢なき思案も女の儚ひ命婦ゝ藁裏携へてゝ庭口より若しや又其處に迷ふて居るかとうか〳〵徃く向ふより見馴ぬ足輕一走に御注進〳〵と駈來るよ命婦ゝ駭き立歸らんとするを呼留「優陀夷大臣へ直々に申上度一大事あり急いで御取次下されよと物遽しく云ふを聞き命婦ゝ何かゝ知らね共まづ此方へと先に立御庭口へ扣へさせおき急ぎ內に入りて斯と告れゝ優陀夷ゝ頓てお梯間よ立出て「御一大事の注進とあれゝ何者にてもくるしからず是へ〳〵と招くに隨ひ叭と答へて走り入り跪きて訟るやう「私しは

御家の足輕よて過し頃仰せを受て姿をやつし提婆の方へ忍びこみ太子へ仇する手段の程を見出さんと心懸たる折ころあれ昨夜邪智佞奸の馬將軍悉達太子の御首打取し迯提婆の館舍へ引提來りしときく其無念骨髓に徹し己れ馬將軍太子の敵遁さじと味方を集め其行先きを捜求めて捕へし故直樣首を打落して太子の鬱憤を晴すべしとゝ思ひしが待暫時並々ならぬ敵なれゞ迦毘羅城へ引立遽て御家臣上下を別たず一刀切〳〵斬さいなまんと引立て連來り候と迯るに優陀夷は不審晴やらずして小首傾け居る處へ白髮交りの馬將軍に縄を懸引立〳〵御庭先へ引据けれゞ優優夷は樣子を糺さんと「這は珍しや馬將軍淨飯王の御扶持を食あがら橫道者の提婆に組して能も敵になられしよとあるが其仔細つゝまず語れと責問へゞ老ぬ入れを馬將軍聊か後れし氣色もなく御梯問見上て優陀夷に對ひ「最早大望成就の上ゝ馬將軍が本心唯今是にて物語らん暫時此縛を免されよと云ゝに優陀夷ゝ打點頭て其縄解と指揮の下に捕吏の者四方を堅めつゝ其縛めを解放てゞ馬將軍御棧橋へ徐々上りてぞつかと座し如何に久しや優陀夷殿不慮の面會珍重〳〵扨某しが太恩受し此宮中を去りし一通りを物語らん能聞れよ汗も我よ一人の老母あり過し

頃此母を提婆方にて奪ひ取我に味方に属か属ぬか其返答早くせよ若味方ゐ附ぬとあれば母の身を切さいなむとのつびきさせぬ板挟みより先母を助んと愚案と定め表面計りの忠臣顔にて提婆に組しければ渠も曲者疾悉達の首を打取ば母を免して尚其上に褒美をあたへんとの無理難題昨日館舎を立出しが空しく戻れゞ母の命是を救ふゐ太子の御首右も左も恩の山一足行てゐ一足戻り心も茲に行止る道の片方に地藏堂の有けるゆへ抑此佛は稚子を守り給ふと聞くからに薩陲の利益と一心に念ずるところへ十一二の處女のすゝみ出て提婆樣のお館舎を教へてよといふ其顔の如何にもけだかく見へけれゞ是ぞ太子の御身替りよ天より授給ふかと憐然を思ゐず拔手も見せず首打落し其儘に館舎へ引返し提婆の前へ携へ行て淨飯王の一子悉達太子の首打たり篤と御見分下されよと差出しけれゞ吾忠孝の二筋繩にて提婆の五躰を搦めたれゞ奇異や夫を眞の太子の御首と見定めて「馬將軍出來したり褒美ゐ遣さんと先母を戻しけれゞ百餘才の老母を連出して即刻親戚の方へ養育を賴て送りやれゞ我から此方へ名のりて出是までの不義不忠の名を雪がんと思ひし甲斐も繩目にかゝり言譯おき其証に最見給へといふより早く隱持たる懷刀を左の腋へ突立しを優陀夷ゐ支へる暇もあらく「コハ仕なしたりといふ折柄物陰に立聞し給ふ轜曇彌命婦も倶に轉ひ出て右と左り取縋りて「ノウ早矢し馬將軍最前よりの物語りに御恨みはあきものを何故の切腹と泣口説かれて馬將軍苦澁面を振上て「這ゐ勿体あし姫君の思詞假令朝敵の分疏立とも過し頃御妹摩耶夫人の御腰胎を調伏せしも我計ひ二個の行者の現罰を見るにつけても懼しく唯此上の御慈悲にゐ我本國へ殘し置く妻と娘を召寄せられて御救恤下されかし是のみ黃泉の障りなりと妻子を思ふ泪の雨輪曇彌ゐ堪へ兼て「如何に將軍娘の面ゐ見覺へあるやと宣へゞ然ゞ某娘の腰胎の其うちよ此方へ參りしゆへ其面体ゐ知らぬ其名を鹿野女と附けさせて今年十一才になりはべる何卒之を我代りに往末永く召仕ゐれ給ゐれと割合の合たる昨日の娘偽りもあき眞心まで太子の御身替りに立しと思へゐ本便彌增て命婦ゐ泪よ暮乍ら「コレ其娘子は昨日此處へあ父親を尋ねて來りしと聞より馬將軍眼を見開き「ハテ我娘の此處へ何樣して「サア一人遙々尋ね來て父上あ會せてれくと賴みけるゆへお主が父は此頃は大惡人の提婆方へ荷擔して此方に居ねゐ其方ゐ即ち敵の子もへ女子といへども片時なりと此處に置く事あらぬと强面云ふて返せしがゐ扨ゐ昨夕途中にて首うたれしゐお前の娘と言ゞ

眶おし拭ぬ馬將軍ハ齒をくひしばりて「ヤア其樣なら昨夜首打たハ我娘にて有けるか世よも因果が斯く計り廻り會て子ハ親と尋ね來る途で親よ殺れ親は又其とハ知ずに最愛き子を思ふ故此處で死るも子の爲なるよ斯までよ齟齬ふは誓をかけし神佛の賴ミの綱も切果れハ少しも疾く世を去んと恨み嘆てハ轎曇彌優陀夷命婦も倶侶よ泣凋然ける其處へ忘れ置たる藁裏の緣に引れて昨日の娘恐怖折戸の内へ入り來れハ組子の者共見咎めつゝ逐出さんと爲る聲に命婦ハ走り出見れは紛ハぬ昨日の處女ゆへ不審ながらも招きけゝ轎曇彌の前へ連行は轎曇彌の方ハ篤と見給ひて「ヲヽ嬉しや〳〵昨夜首打れしハ此子でハなかりしぞソレ其方の父樣ハ那處にと聞より娘ハ取縋りて「ノウ父樣でありしかお懷しやと泣沈む血緣の聲に引されて今を限の馬將軍漸々よ面を上て篤くと見詰て打駭き「ヤア其方ハ昨夜辻堂にて首打た幼子なるろ「イエ〳〵私しは鹿野女でありつるなりお前が眞の父樣なら何卒言云ふて下されと泣々いへど不審晴ねハ「シテ其方ハ昨日の夜ハ何處よ居やつたぞ「アイ昨日此御殿を立出て父上に早ぬ逢度と提婆樣のお舘舍へたどり往く路次にて夜を更し道の傍らにある地藏堂の内よ寢さりしかと言つゝ父の顏を打守り「ヲヽ夫々お前のやうな伯父さんお首

打るゝ恐怖夢を見てより眠ずお夜を明して見は大事の藁裏を取落したれハ是が無れハ父樣に廻り逢ても名乘事の出來ぬゆゑ又此御殿へ夫を尋ねよ參りましたと事細密に物語るを馬將軍熟々聞て「ハテ首を打しハ堂の前處女の寐たるハ堂の内扨ハ正しく地藏菩薩我娘の身替りに立給ひしかアラ難有やと讃するを皆〳〵聞て地藏の利益を尊ミける抑〳〵此身替りの地藏菩薩ハ迦毘羅城と伊娑那國との道の邊よ今しもあるとかや偖馬將軍ハ娘を引寄つゝ鹿野女で有りしか懷しやお主獨りで來ハせまひ母ハ何處にと尋ぬけれハ處女ハ何と返答さへ泣目をやう〳〵に搔拂ひて「母樣ハ此内にと命婦が渡せし藁裏を差出せハ「ナニ母ハ此内よと痛手を延して藁裏より錦の袋取出して開き見れハ一基の位牌あり「偖ハ母は死去れしかと驚けハ「されハ母樣は豫て祖母樣か提婆の方へ捕れしを苦よ疾ての御遺言にハモシ母が死去らは守り囊よ納め置く其方の臍の緒諸共よ家の系圖を大切に肌身に添へて迦毘羅城の父上へ尋ねゆきて親子の名乘をせよかし必ず母の亡後で惡拮して父母の名を汚すなとの御教訓の末病れもりて終に果敢なくなり給へハ近所の人〳〵の手を賴て豫て仰ありつる院へ葬りまた其御忌日も終らぬうちに父を索ねて來て見れハ父上にも敢なき御最期此先は

何とせん何卒妾も倶ゝ冥土へ連て行給へと取縋れゝ馬將軍實ゝ尤の願ひなり迚も因果の切迫際一個計りゝ殘さぬと腹ゟ立たる及にて已に斯よと見へけるを輪曼彌ゝ走り寄りて鹿野女を疾くも抱き取て「血迷ゝれしか馬將軍佛の助し尊き娘今より妾が貰ひ受迫て太子の后に侍け馬將軍の家名を萬代迄も絶すまじと聞て馬將軍最期の悦び「ハヤ難有や辱けなし此上ゝ此世の中に思ひ殘す事も更に無し其淨詞は名僧智識の讀經より實に有難き御引導方々然ゝ南無阿彌陀佛と右へ引たる彌陀の利劍に此世の苦痛ゝ遁れける鹿野女ゝ取付聲を上歎けと返らぬ無情の風優陀夷も供に咽びつゝ忠心義心幸心と感ずる泪果しあし斯て輪曼彌ゝ優陀夷に命じて其亡骸を厚く取葬むらせ忌日〳〵も懇切に吊はせられ鹿野女をも愛しと養育給ふを太子ゝ聞召れて彌々もつて御母摩耶夫人を始め其他渠等が菩提も棄られず又幼なき身迚命計りゝ草葉ゟ宿る露の如にて無情の風の透引ない後共更に言難しあら無狀なき浮世かなと流るゝ水に臨まれてゝ其行末を思ひ遣り天行く雲と御覽じてゝ其往く先と恨み給ひ今宵の內にも宮中を忍び出んと思召せ共往く先更ゟ辨へねゝ迷ひ迷はん覺束なき我嬰心の師は何所ゟあるや吾を早く透引給へとくよ〳〵惱と泣給ふも他眼憚る忍音ゟ漸次〳〵

にお姿も痩れ給ひて竟に朝夕の供御も進ませ給ゝぬと侍きの者輪曼彌へ斯と知らせ申せゝ打驚き直ちに太子の御室へ赴き給ひて「此程ゝ御惱を強く朝夕の供御も進ませ給はね由自からが心細ゟ何に譬へん樣もあし若し過りる頃自らが強面恨み申せし其事の晴やらぬ御惱みには在さぬかと詞優しく宣へは太子ゝ深き御思案を隱して「是ゝ又母君の思ひも依らね仰せかな如何ある事のあれは迚母上の御詞と何しに惱を申さんやと答へ給へゝ輪曼彌の方嬉しげに「然ゝ人ゝ人を友として語り慰む者と聞ゝ數多の公達を召寄せられ舞の御會を催ふされ御心を晴させ給へと聞ゆれゝ太子ゝ打笑給ひて「夫こそ麿が望む處なり「然は數多の公達へ其沙汰を致させん誰かある優陀夷と此へ疾く呼と御意の趣され次の女中急ぎ優陀夷へ告にける○去程に諸卿の公達ゝ太子の今回舞の御會を催ふし給ぬに叶き地謠ひ笛皷太鼓と夫々に役を設けて我劣じと襃かゟ裨襷を飾りて威儀を繕ひ參內あるころ勇しけれ已に其刻限も至れゝ舞臺の正面にゝ淨飯王太子を初め月卿雲客ゝ左右に連り舞の曲鳴物の妙音と見物せらる此光景の賑ひは詞にも竭されず然共太子ゝ兎に角と思ふ仔細の在ませは此舞樂に御意移らず其畢るを待給ふうちはや番組の數も終りけれは太子ゝ父君へ御暇乞しつゝ御

居室へぞ還らせ給ひ今日參內の公達と殘らず此へ徵招すべしとの仰せ彼れは高明大臣其趣きを通達せしかば咸々太子の御居間へ並出けれい太子い今日の舞樂と殊の外御賞美ありて宣ふやう「扨各々能聞れよ八十八よれは十里の物語り十種を知ると申ふ依り幸ひに今日公達の參會の折なれは思ひ〳〵の物語りを心の儘に打明て一座の興を催さい麽か悦ひ此上なしと宣へい公達い太子の御心に忍いる丶深き仔細を知らねい面々進み出て浮世の噂とり〳〵よ物語りけれども太子の御心に差當る詞もあき儘太子い唯如何にもして我志す道の邊を尋ね求めんと御召すより「如何に皆々聞給へ凡ろ四海の內よ住て生とし生る者毎に心々に友を求めて馴親みて遊ぶ者やらん此儀如何と宣へは上座よ扣へし殿上人進み出て「さん候夫に付品々變る事の有りぬ先其大概を一通り申上奉らん夫れ龍い諸虫にして諸虫と鱗毛を並べず獅子麒麟い畜類にして諸畜と脚蹤を交へずと申なり然れ共渠等い皆心なき者あれい友を以て己れが心を現せ者にあらずして又片時も友を放る丶事能いず又人間い格別にて上品上生成が故に我心を以て友となし候へい心の如き友を心から親ミ候故己れが心と知らんと思はいまづ親む友と見べしと申す事の候と速かよ言上しければ遙末座に扣へし青年の

殿上人上座の人と日頃睦じからねい其者の次に進ミ出て「唯今何某が言上致せし心の沙汰然る可からず畜類いさも有なん人間の事は左樣にい候いず假令心よ適ふ友を友と仕度思ふ共心ふ適ふ友ある可からず然ば友あき迎心を友として唯一個慰さむ者やい世界に候べきぞなき友を眞實しやかよ能くも沙汰し給ふ人かあと上座を白眼で苦々數言ば上座の人堪へ兼て又いふやふ「アラ出過たる青嘴哉貴殿の如く心なき者ゐ於てい力及いず某ー唯今言上せしい道ある人の譬へあり入ざる過言嗜ミを召れを詞と正しく言返され尙はも怯ず威猛高に「イヤ〳〵夫れいよしあき事假令へ理よ當ると云ふとも証なき事い數ならず又証ある事ぞ云ふ共躰あき事い明かならずサア何咸如何なる處に心を友として唯一個住候者之あるやと疊を叩きて詰寄るを上座の人も又臆せずに「夫れ人間たる者い皆聞事を語る者あり某しも亦聞たる事を物語り申すべし夫れ世間に有りとある道なる者は數盡申さず文道筆道音聲道機關管絃藥醫の道琴棋書畫武藝智謀何れか秘事のなかる可き然共是等の品々い善も惡も夫迄あり扨茲に道と云るい心を友とする事なり夫れ賢道妙道政道を三つの道と號く賢道とい仙法の秘事にて發心報謝の道と聞く扨妙道とい妙師驗者の秘事と聞く又政道と申そは人

問撫育の道にして十善の君への諫め政事國土安全の秘事と云ふ此三つの道を學ひつゝ心を友とする人を大道人と世に名けて尊き人といふ申そなりと詞すゞしく逝ければ太子い感涙御胸に答へ給ひて平日心に忍ぶい則ち是なりと面へ其色を見し給いず莞爾として宣まふやう「アラ尊き物語りかあ何れも方の詞に愚いなく皆面白し〳〵と殘る方なく愛給へゞ彼の青年なる殿上人い前後も辨へず人の話の腰折て手持無沙汰に見へにける扨太子い上座の彼一個巳を留め置れて其餘の公達は殘らずれ暇を給いりける頓て其一個を御膝近くへ進ませられて「如何に唯今い心なき若輩者の分としてはした無き詞と吐殊に尊き物語りの妨害をなしつるが必ず心よ懸らるゝな麼が心よ含れい何卒今の物語りの後詳かよ聞まはしと改りし仰せに彼の人打驚きて「是い又若君の思ひも依らぬ御詞哉唯今の物語りい仰せに任せ取敢ず當座の興お申せしに尚は御尋問よ預りてい恐れ入ると逃けれバ「イヤ〳〵並々あらぬ今の語談詳細聞ん爲にこそ數多の者を先へ歸せり是非共聞んいざ〳〵と引よ引れぬ詞の續き容を改め咳きしつゝ「然らい御免を蒙りて其先を申上ん偖又天門の方一千三百五十里をへだちて檀特山の峯嶺より雪山醫王摩黎山青龍、說多羅、摩迦陀仙、迦毘羅、阿私屈陀、般若山、象婆羅、育陀金剛胎是等にい貴き聖仙能行ひ住給ふとかや申せゞ是は傳聞の儘あれば理も証も躰も有る事なし唯御笑ひぐさと思召て詞遣ひの賤きを御免し有ていや御暇給いれと申上れゞ太子い是れ天より人を以て言し免給ふ教へなれば尚奥深くさあし免されんとて「アラ尊き物語りなり夫天文とい巽の事鬼門とは艮の事シテ一千三百餘里を行歩する路の末にも尚ほ人の住家い有けるか「さん候五百里は陸野道と申て民の竈も是あるよし扨其先五百里い人の通ひい有ながら寂寞として溪深く又其先三百里は山陽道と申て山の峯を踰るとかや承いりて候と迄述けれゞ太子の御心の内い飛立計りに歡び給ひ如何よも天に口なくして人の謠を法となし人に心おくして天の說を心と爲るとい今こそ想ひ當りたれと是を御心よのみ忍ばれて其殿上人を勞ひ給ひ先今日は是迄なりと御暇をゞ給いりける

釋迦八相倭文庫六編終

去程に星霜荏苒りて悉達太子の御年もいや十五歳になゞせ給ひしかば淨飯王より春宮の御儀式を仰せ出され此趣きを太子へ優陀夷を以て申上諸國の王達へは御使者を馳て今回太子春宮に立せ給ふに付當二月八日ハ吉日なれば御元服の御儀式之あるに依り時日を違へず朝參ある可しと觸られける程なく其當日と成ければ御親族の甘露飯王白飯王斛飯王を初めとして諸國の王達月卿雲客無位無官ゟ至る迄其家々の禮服に身を飾り袖を列ねて參内あるこゝ勇しけれ扨迦毘羅城の大殿にハ淨飯王を初め奉り其役々の座を設け威儀を乱さず扣ゆる折柄悉達太子悠々と出御ありて座に着給へば一個の官人白玉の盤へ四海水を湛て此と先甘露飯王へ奉り夫れより順次〳〵ゟ諸王達へ傳へ畢りて帝自ら盤水を捧げて天地と拜し頓て太子の頂に灌ぎ御聲最も高らかに今日悉達太子を以て春宮に立麿が世嗣とす此旨上天皇帝を初め卒土の濱諸國の王乃至月卿雲客に告知らしむと宣ふより殿上殿下の人々皆一同に御代萬歳と稱へつゝ夫々の捧物思ひ〳〵ゟ獻上すれば帝の歡喜斜ならず夫々に官爵を加へられ頓て大宴を開き給ひて諸王諸臣を饗應あるまそ愛度けれ然ハ月景殿の奥殿も太

子の御元服の御祝ひと互ひに華麗なる衣服を着飾り往行局の混雜にお仲居お末お賤共三人寄れば姦しき譬への如く寄り擧りて「是のふ鶴竹どん今日の多忙にハ頓と最うあぐゝ果たでハないかへの「イヤ最う忙敷事ハ云ふ迄もない其中ゟもお前ハ先刻から見へなんだが大方又お庭口へ出て男せゝりも宜加減ゟせゞれよとどれ淨供のお炊をと立上るをお婢女の若梅引留めて「ほんに其供御で思ひ出せしがアノ天子樣を十善の御位と申せは毎日三度の供御を十膳づゝ召上るのかへ「チヽ夫ハ知れた事天子は十膳神々ハ九膳つゝ召上るのサ「夫なら殿方ハ何膳づゝ上るか「されハ殿樣方は十膳の半分ゆへ五膳樣と云ふではないか「フン夫では此方連は二膳位のものならん「マア其樣な者さ夫もへ御二男御三男ハ御位がない故へお冷飯樣と云ふではないか「チヽ夫〳〵非人乞食ハ何膳たべますか是ゟハ供御の位も有ますまい「イエ〳〵有共〳〵お前も隨分お見で有ろう夫れ途中に袖乞非人か憐れな聲で手を合せ何卒や適ひません此者ゟ一膳戴かしてと云ふでハないか「實に左右じや唯一膳の位とハ寔ゟ果敢ない身の上なり又天子と成て十膳づゝ食るのも氣がもたれて成まいと私しハ疾く勤め上てお禮奉公も仕てしまひ夫から彼の人と夫婦になり氣兼なしの取膳が寧う最う

待遠と口も輕く氣も輕く互ひの臀股捻り合春中を叩く氣散じい漢土も日本も天竺も替らぬ奥の傲ひぞと想ひやられて最笑可折挏表使ひの知らせにて唯今太子樣月景殿へ入らせられしと聞よりも俄然に襷掛なくも御献立の順達へしと心急數繰出し御元服の御祝ひに奥の曇々物音はさしも勇々數聞ゆる中にお伸居お末陪婢まで遙の隙より我勝に今日の太子の御裝ひを忍ひて拜し奉るに御顔せの麗いしさい以前お增りて艶々數开も此君に嫁し給ふは何れの姫よ在まそかと鳥渡してさへ娜きたる噂も女の常ぞかし斯て程おく御祝ひも濟せられ輪曇彌の方の御悦びも日に增て一方あらねを唯御案事ましますい發心の御志し何卒留め進らせんと或は舞樂何呉と御心を慰め奉れとも太子い只管書籍おのを御心を傾け給ひて終日餘事を顧と給いねい之よ依りて百官の者優陀夷を以て帝へ言上する樣此折節太子を藍毘尼苑へ御幸あさしやられて御心を慰め奉らんい如何に候と伺ひけるお帝夫れこそ然るべし急ぎ支度を爲しめよとの御免を受て取敢ず優陀夷い此由を太子に申げ奉れは「夫ころ麿か望む遊山なれ然い民農夫の業に妨け無きやう忍びの供にて赴く可しと物に賢き仰に任せ供僅かに召連給ひて浮庭口より藍毘尼苑へ入らせ給ひぬ扨藍毘尼苑の境内は折しも彌生の

頃にして今を盛の花の香に天さへ醉る計りおて邊りまばゆく見へけれい右將軍御腰掛を此處ぞと思ふ花の下へ据太子を待遇しけるよ何事の在してか附々の者を遙よ遠避られて唯御一個にて吹風に散花を御覽にてい無情を感じて頻りに歎息し給ひけり青苔むしたる平石へ御腰を掛られて御首をうお垂雲時屈して居給ひしが奇異や夢幻しの如く瘦衰へし修行者髣髴と現れたり太子い不審の眉を顰め給ひ「夫れなるは何者ぞ名乘聞せよと仰せあれい行者い打咳き某しい中々に名乘程の者ならねど太子へ對して唯一言示す事のあれいまそ來りたり夫れ富るも貧きも假りの浮世よ住者い箇樣に花の散が如く翌日をも待ぬ有爲轉變斯る大難を懷き乍ら此遊樂い何事ぞや過つる頃も他ながら修行者の姿に打扮て旃那羅城の主人屠摩伽王の屠紹太子と名乘つゝ太子を助け進らせて菩提心を勸めたり我ころい天上の淨居佛あり夢々疑ふ事勿れと聞召より太子い駭き「アラ有難や平日心に念じ奉る淨佛よなと立寄んとして見給へい疾も姿い消失て又はるゝと花瓣の散來る巳ぞ物寂寞折から優陀夷は先に太子の仰せよて遠避りつゝ居たれ共時刻移れい立出て御機嫌を伺へ共何の返答も在まさずに只茫然として在せしが稍有て御心惡き迚はや還幸を急がせ給へい優陀夷い心ならず

も夫々へ浮供立を予急かせけり〳〵宮中へ還御ましく〳〵ける此時の形勢何となく常ならず覺へしかゝ優陀夷ゝ浮供よて還るや否や頓て淨飯王へ太子の氣色箇樣〳〵と奏しけれは父帝ゝは機嫌損じ給へて是尚は佛心ある故あり抑々何の宿緣よて斯まで執拗出家の道よ志しの止ざるや此回元服の祝より暦が心も休て何卒早く世を讓り國土豊よ泰平を稱へさせんと思ひしに今更書籍にのみ心を入れて氣と痛矣る病ひと有ゝ行末の事思はれて何と賴みに暮すべき優陀夷ゝ何と思ふぞや力の綱も切果しと嘆ち給へゝ優陀夷ゝ平伏の儘返答もなき處へ輪曇彌の方ゟ聞入ありて太子の御病を語り給へは帝も夫のみ御心に懸る由をヲ仰せあり重ねて宣ふやふ今も今迎優陀夷へ云聞宜きよ計ひ方の有まじきかと其詮議をそる處ありて思ひ廻せば過し頃彼の老翁が奏したる占方ころ奇異なれと憂に集る三つ鼎へ物濕やかなる簾の内輪曇彌の方の宣ふやう「如何に帝聞し召太子最早十五才にも成給へゝ容貌嬋娟美女を撰そて宮妃に附進らせ是等に伽を致させて鬱々の御心を散せしむる御計ひゝ如何侍らんと宣ゟを帝聞し召て點頭給ひ「如何よも草も木も春を向へて花咲ゝ天性なり太子も今年ゝ十五歳あれゝ闇の伽も有よ欲し優陀夷ゝ何と心得るろと仰せを受て漸くよ頭を上てヤ上るやう「さん候仰せの如く容貌麗ゝしき宮妃を供へまいふせて御心の御結ぼれをくりろぎなゝ極めて其后の內へ太子の御胤を宿し奉り安々御誕生ましまさゝ如何計りか愛度き御事にて竟には佛意を放れ給ひ上下萬歳を唱へて安堵の御時至り候ゝんアラ歡ゝ歡思召かなと色を直して奏しけれゝ帝も俱に歡び給ひ「然は太子へ此趣きを告諸國の王の愛女の內を詮議致そべし扨是よ付城南に新內裏を造新せよ云ふ迄にゝ無けれをも此新宮の結構ゝ先東の間ゝ春をかた取て花を彩色に鏤め南ゝ夏を摸擬て野邊の茅草民の所業西の殿ゝ秋を表して洞底の月曇りなく千種の花の莚を詠先るやうに造り北の方ゝ冬に擬へて雪の景色其外諸向磨立て太子を祝ひ進らすべしと殘る方あさ御指揮に優陀夷ゝ厚き思召を逐一に伺ひ畢りて直ちに番匠工その長よ繪圖を認めさせ念に念をヲ入れゝ夜を日に繼て新造營營を急がせける扨又太子ゝ過し頃藍毘尼苑より還らせ給ひて御枕重く思召ゝ我斯くの如く十善の若宮と侍かれ浮世の塵に交る事の余りと言は歎かゝし玉の臺に錦の褥はと〳〵穢ゝしや忌ゝしや今宵なり共宮中を遁れ出立去りたしアラ淺間しき我身かなと忍音に鳴鈴虫の雨夜よ焦るゝ如くなる折柄優陀夷ゝ御機嫌を拜せん迎徐々と御褥近くへ進み出「若君如何ましますやと

伺へハ太子ハ咥ニ御首を上給ひて「チヽ、優陀夷か懷嫵や麿が病に父君ハ嘸本意なく思すらん去ながら是迚も生ある者の傚ひぞかし若し此上ニ如何なる事あり共父上母君の御前をハ優陀夷能々諫めよかしアラ果敢なき麿が病勞やと言給ひけヽ御枕に着給へは優陀夷ハ尙ほも進ミ寄りて「是ハ若君の仰せ共覺へず父君母上初め百官百士の輩の碎く心を何故に哀愍納受在まさで斯く他所しく待遇給ふ思召の程こそ疑ハしけれ御望の儀も有ならば箇樣に親み進らする我々なれハ明白に語らせ給へ聞ま欲と嘆てハ太子ハ起直り聊か容を改め給ひて「如何に優陀夷麿が身に秘し忍ぶ事の露程も無けれど若しもや人の讒言ふて他の見る目に疑ひあらハ夫れまろ麿ハ聞まほし卒聞せてよ物語れ何故に今日迄も告ざりしと却て優陀夷に恨のれ詞優陀夷ハ少も臆せずに此所ぞ御爲と存分に申上んと胸を据「アラ空々敷御詞如何程御心に秘さるゝ共御肺肝を鏡ニ懸て疾く見極め奉りぬ幵も君の御心ハ飽迄も發心の道ニ凝せ給ふべし然からニ過ける舞の御會の時一個の公達並々ならぬ悟りの道の事を說けれはそれに御心を留させ給ふ事迄も疾くに知りけるゆへ其公達ハ最早御目通りを止めたり如何にも淺間敷御擧動哉先年相者の觀し如く十善の御位に若しや即せ給ハぬ其時は父君の御血統も絕へ慈悲大賢王より連綿と三十八代の釋種の天下も覺束なく大小の朝臣等の悲歎ハ如何計りぞや是ニ依つて願くは御先祖を敬ひ臣下を憐れみて發心の御志しを偏に止まらせ給はれと睥重たく述けれハ太子も今ハ道理ニ服し御泪ニ暮給ひしが稍ありて宣ふやふ「如何ニも汝ぢが詞は聞屆たり之迄ハ麿が心に天魔の魅入て不幸たりしか今より心を改めて必ず十善の位を繼んノウ優陀夷重ねて案じる事勿れと御一念を晴させ給ひし御詞を聞より優陀夷は蘇生たる心地して「アラ有難や夫でこそ御代繁榮の基ひなれ然ハ此度帝より太子の徒然御伽の爲めに容貌麗しき后を侍けよとの宣旨あり是に依て諸國の王達へ既に此趣きを觸流せり夫れに付新宮造營をも取急がせ候へは只今の御詞を重ねて替らせ給ふなど堅く誓ひて歡び勇ミ其日ハ其儘退きにけり「去程に太子は優陀夷の諫言ニて十善の御位を尊ミ給ひて是迄御心に忍ハれし發心報謝の道をもさらりと打棄給ひしかハ忽ち御氣色も癒常ニ無き御機嫌の麗さに帝を初め轎曇彌の方ハ附人の男女共唯火中より玉を拾ひし心地して打悅ぶ其中にも生若き女中達は太子の御裝ひ此程殊に麗しけるを愛何彼ニ付て御側に附纏ひて戯れける故轎曇彌の方ハ太子の年齡と云ひ殊ニ又人並優れし裝ひに若しや猥りなる

事も有ん帝の思召且ん又國中への聞へ悪しからんと心の内に御工風ありて何卒疾く新宮を造新させんと諸役に仰せて萬事を急がせける程よはや新宮は成就して近々に吉日を撰び御引移り有べしと仰せ出されければ轜曇彌の方ん御悦の余りに豫てより御所存ありて養ひ置れし馬將軍の娘鹿野女の年もいや十六夜月を二ツ三ツ越ゑ心ん未通女にて並々あらぬ爪外れなれん此度は后に立と命婦にも仰あれん命婦ん其旨を鹿野女よ通じ改て御側へぞ連出けれん轜曇彌の方ん潜よ膝元近くに召れり丶「今改めて最處へ呼び申聞すん外ならす其方の父若存生あらい一國の主にも封するものなるが敢無き最期に及びし故帝も自も心を悼め何卒家名を立させんと思へ共男子なけれん詮方あし是よ依りて今回其方と太子の后に上れん心に心を善く用ひて假初にも嫉妬の心なく太子へ侍き給へ悋氣ん女の慎ミの第一なるものと必ず忘れなせぞと吾子の如くに云聞し給へん鹿野女ん只差俯きて流石赤らむ面を掩ひ最恥し氣に嬉敷も口なし花の物言ぬも中々に未通女に見へて愛ら敷を命婦ん見兼て側へ寄りこれ是のふ鹿野女殿嘸嬉しく有難かるべし早うれ禮を申れよと押遣られて手を拱へ「這ん冥加かあ賤き身を左程迄に重く御取立給はらん國元への聞へ且は冥土の父母も嘸草葉の陰にて

御情の程を如何計りか有難く侍るべし此上ながら幾重にもお惠渥く御教訓の程願ひ上奉ると逃畢れバ命婦ん附添御前をぞ退さて夫々へ此事を達せられけれバ内外の皆〳〵扨ん鹿野女ん今日よりして太子の后よ供ん入りたると俄然に敬ひ待遇ける偖鹿野女ん召遣の女を多く附られて華美なる奥の局を常の居室にと下されて結構の身とぞ成しも偏に是皆轜曇彌の方の御恤と深く悦びて數多の女中へ身を謙遜て高ぶらねん咸々も彼程に優しき心立なれんこそ鹿野女樣にん思ひも依らぬ玉の輿幸福者よと寄も觸るも目引袖引羨し氣に私語ける扨又轜曇彌の方ん太子へも鹿野女の事を云々と仰せありて一方ならぬ后ゆへ御不便を加へられて親み給ん丶自らが心を添て養育し甲斐も現れ又父馬將軍の菩提の爲にも惡かるまじと諫めやせん太子も亦最恥し氣よ差俯き纔よ點頭給ひたる折柄優陀夷の女房立出て「疾夕供御の御支度調ひしと申上れん太子ん恭敬しく母君へ御暇乞ありて御居室に歸らせ給ふに折しも夏の夕暮頃數多の女中ん涼かある肌薄衣の染模樣中形小紋白飛縞皆當世の色綾を思ひ〳〵よ着飾りて吾劣らじと並居る中に紅ひん奥殿の園生に植て隱れなき鹿野女の方の御裝ひ髮の毛筋も翠りなす蟬の羽重ね艶やかに花の簪取揃へ白く妙なる額の富士よ懸る霞

提婆達多

提婆達多
山賊とかたらい太子を討たんとは
右梵王太郎

や纖の振袖かざを取態は水際立て襃なり太子ハ此褥に着給ひて頓て御納涼の御宴初り數多の者へも御杯を下されて歌舞の曲さへ催ふされ殊更興に入り給ひぬ其夜よりして御寐所に鹿野女の御伽を愛られて娚くさまに聞へたり然ば新宮も殘る方なく造營成就せしかば已に御引移の吉日と成て新規ゐ召上られたる太子の御附ハ殘り無く新宮へぞ引移り其日の御祝ひをとり〳〵に持囃ける多の美女の其中ゑ釋種の親族執杖の娘ゑて瞿陀彌女とやハ二八の眉麗しければ太子の御眼ゑ留りて是をも后に供ハりける此外殘る者にハ夫々に御附の役ゑ賜ハりて宮仕へしける故夜るの殿ハ華美なり偖此光景を月景殿ゑて帝ハ優陀夷より聞し召給て然らバ愈々太子にハ發心の志しの根も切侍れば頓て兩人の后の內へ若君の誕生も有んと歡び給ふ所へ右梵士太郎御次の間より進み出てやをやう「拙者太子の御后を詮議のため普く諸國を索ね廻りハ處迦夷衛國の王の媛に耶輸陀羅女とやハ美人あり其容貌ハ此新宮に美女多しと雖も夫に優る女子ハ一人もおかるべし誠ゑ太子の御心ゑ適ひ進らせ可きと愚へば此段優陀夷殿より帝へ宜敷御披露致されよと述れば優陀夷は聞敢ず即ち御前へ手を拱へ只今右梵士が云々と奏せしかバ帝聞し

召て然らバ夫を入內させん然ながら先も國王の事なれバ假初の事にも成まし此使者ころ優陀夷ならでハ外に勤る者ハなし急き迦夷衛國へ聘物を携へ行耶輸陀羅女と婚儀の事を取結び來るべしと仰せ有を右梵士太郎傍聞して進ゑ出て「恐れ乍ら大王へ直々ゐ申上ん拙者事迦夷衛國王とハ親き中に候故即ち太子の御光景をかね〳〵包ゑ隱さずに述けれバ疾先方にてハ御臺まで太子の御仁德を詳細知りて何卒小國迄見落し給ハずして悉達君と我媛と婚儀を取結び下さらバ近國への聞へ家の譽れ偏に賴むと先方の詞を幸ひに然ハ近々に兎も角も悉達太子と遊山に事寄せて是へ御入りを願ひ見んと申談じて立戻り候と述ければ帝御機嫌麗しく「然りとハ能ころ圖りしゑ日柄を撰びて太子を何と無く迦夷衛國へ赴かせ互ひに樣子を見せ示して緣に任せて呼迎ん優陀夷宜きに計へよとの仰せに古梵士を再度迦夷衛國へ赴かしめられて近日太子の御入りを知せければ彼の國にてハ君臣共殊に喜びて大國の太子の御入り迎俄然ゐ城の內外の修繕を營そして間毎〳〵も華麗に庭の景色ゑでも飾り立させ太子の來駕と待たりける其悅ゑ引替て伊婆那國の提婆達多ハ過し頃太子の鬱頭覽院へ入學せしと聞よりして小弓の勝負に打負たる遺恨を晴さんと摩竭國の北冥山ゑ住む魔術の長法

性妙顯と語ひ悪鬼外道を咏方に付て悉達太子を滅亡さんと腹黒くも謀りしよ諸神諸菩薩の守護よ依りて太子い危き命を免れ給ひ恙無くも迦毘羅城へ還らせられ其後炙馬將軍の謀計にて地藏の首を太子と見せし是等の無念骨髄に徹して何かお仇を報いんと手ぐすね引て居折柄頃日頻りに諸國の中を淨飯王より詮議して容貌麗しき娘を擇抱ゆるとの噂及び近國迦夷衛國の美人耶輸陀羅女を太子の皇后に娶るとの取沙汰をも聞傳へて提婆は阿修羅王の如くに憤り何ぞ爭之を聞棄ん急ぎ計をめぐらして耶輸羅女を奪取り鼻毛を抜て恥面掻せんと己れよ等き悪黨を呼集へて妨けすべき謀計をぞ旋しける斯とい知らず迦毘羅城と迦夷衛國と此度因を取結び優陀夷の計ひにて某の吉日に御供ぬ僅にて太子の乘物よて忍びやかに迦夷衛國へ入り給へば豫ての申合せにて諸々禮儀を略き目立ぬ様に御案内して直ちに奥庭の方へ誘引申せバ耶輸陀羅女は今日を晴と手を盡し取飾りたる裝ひい宛然天女の來降も斯や有んかと疑ふ計りに打扮て侍女乳母引隨へ徐々と出迎ひて太子の御姿を唯一目見るよりも叭とばかりに羞入りて心の内に思樣常々噂に聞たる如く實に三十二相備いり給ひし御風情哉アラ麗しさよと唯俯きて詞もなくして在そ程に物に馴たる乳母等い太子に御會釋し

て姫倡倶よ庭を見晴す御室内へ誘引ひ奉り美を盡したる酒菓を取並べ御二方の御心と打解させ奉んと頻りに待遇進らすれば太子い媛の裝ひよ深くも心を寄せ給へば媛も亦此君おらでい我添寐そる殿い余もわらし迚人知れず心に結ぶの神をぞ念じける處へ右梵士太郎一個の惡黨を高手小手に縛めて勢ひ猛く太子の御前へ引來りて述るやう「最前より那の藪陰にて怪き鳥の鳴聲に心元なく立越て伺ひ見れバ此ある盜賊鐵炮の火蓋と切て太子を狙ひ居たるを運よくも取押へて斯の如く縛めたり唯今此所にて死罪に行ふべし太子を初め優陀夷殿も御見物なさるべしと刀の柄よ手を掛ければ優陀夷い暫時と押留めて「ヤア夫なる曲者何故よか仁德厚き太子へ仇するぞ其科死刑よ當れぞも此い他國といひ今日は別格の祝日あれば其事柄幷に同類をも白狀に及ば一命を助て取すべしサア何とあると責問ひければ「然らば工の程を云ゐかさん今日此御館舍へ伽毘羅城の太子の赴くと聞ば汝其首を討て戻らば莫大の褒美を授んと提婆殿に賴まれしが斯繩目の身となつてい褒美より命が大切也へ工の程を言ゐかすなり「ナヽ能も言たりシテ提婆いふて伊婆那國の山路及び川筋を堅めて太子の還幸を待受て擊取んとの事なりと聞より皆々

面見合せ愕然と駭く其中に有梵士太郎聲高く「アラ有難や此曲者こそ天の賜物ありサア其後を語れ〳〵とせめつくれば「されば横道小道迄も人數を廻して取込めば迚も手薄き御供にてわよも迦毘羅城への還幸わ適ふまじと聞も身の毛のいよ立計りに迦夷衛國王わ思案に呉しが稍有て優陀夷を木陰よ差招きて「那れある賊の白狀にてわ假初あらぬ一大椿事故是を遁れんにわ此海上五十里を横切て旃那羅國を廻りて還幸あらば道わ誠に遠しと雖も提婆の計略を免れ給ふに心ろ易し然れば館舎の下川より快船を申付ん此船わ軍用の貯へありて一日の順風にわ三千里を駛る奇代の用船ありと傳ふれば優陀夷わ聞てうれこそ九死ゞ免るゝ寶船なり密ゝ御仕立を願ふとあれば其船忽ちに庭續の川へ廻れば此中へ太子と姫と侍女已を乘せをきて優陀夷は密に右梵士よ打向ひて「云々の事にて還幸なさしむれば貴殿わ此處に止り居て下人と申合せ太子尚此舘舎に在ます躰に見せかくるため御乘物長柄其外迄城門の外へ飾り置く可し是提婆方へ油斷をさそる計略あれば是を能心得て殿ゞせられよ我わ大子を護るありイザ然らばと云すてゝ彼の舟よ急ぎ乘ば國王夫婦家臣の者も見立つゝ萬事わ後ありて申上ん先今日わ互の吉辰目出度還御ましませと國王夫婦の謙遜ある挨拶ゟ優陀夷も

厚く暇乞して頓て順風よ帆を上ければ矢を射る如くに旃那羅國へぞ着給ふ此處わ甘露飯王の住國なれゞ優陀夷わ其仔細を告て兵士を二百人借請て程あく迦毘羅城へと還幸ましけるゟ扨迦夷衛國ゟてわ右梵士太郎の計ひにて彼の曲者の命を助て太子の御乘物の内に忍ばせ置き敬しく附隨ひて伊婆那國の横道と迦毘羅城へと急ぐ折柄鏑の征箭一筋飛來りて乘物を射貫わ中で玉ざる一聲きゝて右梵士わ勿体なくも迦毘羅城の太子迦夷衛國へ野遊山の還幸を待受奉りて射留たる者わ何者ぞ名乘て出よ右梵士太郎爰にあり主に放れて今打死する死物狂ひの手並と見せん早く出合來れよと罵り叫ば山傳へよ山賊共八九人走り來りて乘物目掛て立かゝるを太郎わやらじと支へる隙に乘物打棄六尺共わ一散よ足曳の山踐分て逃のく後わ右梵士太郎唯一人山賊共は多勢を頼みに打て掛るを身を變して拂ひ除固より力士の十人前目覺數ぞ見へけるとまろへ弓矢携へて提婆達多わ猛々數出來りて「ヤア吾臣家共わ其下郎めを打捨置て悉達の乘物を早く我城内へ舁入よ久し振にて悉達の死顔に對面する今日わ何なる吉日かゟ雇の者わ跡に殘りてアノ右梵士ゟの仕舞を附て首携下て來た上わ褒美わ勿論酒樽の蓋を開きて待て居ると興奪

取立戻りけるされば雇の山賊共は右梵士一人を討取らんと立かゝれば右梵士手もなく一賊と引捕へて眞甲へ差上つゝ又來る賊を人礫或ハ踏へ蹴飛して御供の面々の立去まで暇を費せしが最早時分ハ好き頃と尻褰つゝ迦毘羅城へと皈りける

釋迦八相倭文庫七編終

釋迦八相倭文庫八編

去程に悉達太子ハ迦夷衛國にて提婆達多の爲ニ危き圍を逃れ給ひて耶輸陀羅女と同船ニて海上を渡りて叔父甘露飯王の住國旃那羅城へ着給へ此處にて兵士を借うけ恙なく迦毘羅城の新宮へ還幸まし〳〵て御安堵ありける御跡より右梵士太郎御供人と引まとめて連歸り彼地の次第を優陀夷まで申上れハ太子の御耳へも入りていとゞ愛給ひて右梵士を再度迦夷衛國へ赴けゞれ耶輸陀羅女と婚姻の儀式をぞ打合せ給ふ頓て吉日を撰びて迦夷衛國より種々の贈物に數多の役人を附け添へて美々敷贈られけるを飽迄謀れし提婆達多耶輸陀羅女の婚姻の日を待合て道にて奪ひ取面恥かゝせんと巧ミしに姫ハはや迦毘羅城へ過し頃往き給ひしと聞切齒をなして敦圉ならく口惜がり愈謀叛を企てける偖又迦毘羅城にてハ今日吉日の御祝ひ迎奥殿にて耶輸陀羅女と九献の御杯取替されて龜鶴の婚姻を催ふされければ淨飯王を初め轎曇彌の方も末頼母し氣に歡給ふ夫ニ引替物憂ハ鹿野女と瞿陀彌女の二方なり同じ伽の役ながら耶輸陀羅女は太子の殊更寵愛し給ふが故人の用ひも一方なゝねば二女共心の内ニ耶輸陀羅女を妬み嘆ち給へば其附屬の女中共まで相互ひに我勤る主人をのミ大

切と思ふものから何卒此方の姫君の方へのみ御通ひあれかしと種々に心を砕きよける又耶輸陀羅女の附人い此方へ已太子の御通ひ有を鼻よ掛是見よがしと誇ける故三女の方の附人い局仲居ゐ至る迄往き通ひよも肩で風きり互ひよ詞も交さゞる事ゐるよし輪曇彌の御耳へ入り這い易からぬ事なりける若しや太子の御身の上よかゝる危ふき事も有んかと優陀夷の女房を召れて三女を御居室へ招くべしと有ければ直ちよ此趣きを三個の姫君に申上れば這い何事と思ひ乍ら互ひに衣服を着飾りて我劣じと月景殿へ赴れければ輪曇彌の方三人の姫を厚く待遇給ひつゝ稍有て仰せ聞らるゝやう「如何に姫達能聞給へ夫れ女い我人共に尊きも賤きもなれしなべて三つの油斷あり此三つの障りい如何程心に嗜とても忍兼ぬる者なればたしか確乎に諭し進らすべし三人共心に心を付て能く守り給へ扨其三つの油斷と申すい第一ゐ睡眠未練とて心打解はしたなく眠るをいふ二つよは自慢未練迚徒らに我身を誇りて人を蔑ろに蔑視すといふ又三つにい嫉妬未練とて是い別て宜しからず互よ威勢を爭ひて竟よい己れの命を棄てゐ人を呪咀恐ろ敷巧みを企つるものなれば譬へゐも嫉妬なき女い百拙を掩ふと有て嫉妬の一念さへあければ百の悪き事をも隱すとかや彼程に警戒たる事なれども女い淺

間敷者にて今姫達を諭す自らさへ一度い其嫉妬にて罪なき者を妬み誹りし事ありしを今い我身で我身を恨めしく思ひて其邪念を晴せり然ば其方達い心詞も優しく夫等の淺間敷志し持れまじきか同じく太子へ御伽を勤め給ふ御身あれば若しやと案事で諭しまひらすゆへ何卒三人の心を一つにして睦敷太子を護り給ひなば發心の御望ある太子にも終よ御心を此宮に留め給ふ時い上は更なり下萬民の悦ひなり若し左もなくして方〳〵ゐ嫉妬深き事有ばれ伽する君に愛想をつかされて忽ちよお側を退げられ給ふ時い御胤を孕ゐ事もなし茲と能くこそ心つけられよ縦へ面優しく共妬嫉の心ある時い黒髪も蝮蛇となり又提の水も湯に沸とかやされい嗜そても尚ほ嗜を度い此道と思召て召仕ふ女共へも我主人の威に誇りて那方彼方の姫達を蔑視にする事なく三世の縁を結ひたる朋輩と思ひて中睦敷交際へと方〳〵能く諭し給へとの仰よ三女い差俯きしまゝ忽ち涙ゐくれ給ふ一間隔ちて扣へたる三人の姫の附人い平常の心の荒々敷を恥入折から三人の姫達い御暇給りて立出けるゆへ夫〳〵の部屋へぞ返られける然ば其年も過ぎ太子の御年も早十六よ成せ給ひ御裝ひ殊に麗しく御伽よ侍く姫達い何卒我一先よ御胤を懐胎して持囃されんと願ふより毘陀彌女の方い太子の御慰と

に事寄せて數多の小鳥を集めつゝ是と階下へ並べ置太子の御入を待受て殘らず籠の内より放てば小鳥ゝ嬉し氣に羽ぶるひしつゝ那方此方へ飛廻りて友よび替す睦じさの何とおく娜けば皆々心を空にして不圖與よぞ入しは是矍陀彌女夫となく心の願ひを達せんと神へ誓ひの放生會なり又鹿野女の方ゝ過し頃より如何にしてか太子の御通ひ絶へけると歎き給ひて此程ゝ病の床に着給ひて唯うと〳〵と身を悔て玉の腰さへ無狀なく思ひ煩ひ給ふより年長たる局朝夕附添まひらせて諫やう「コレ姫君御聞あれ此程太子のしばし御通の遠ざかる共此方にさへ御替りなく誠心を以て御慕ひ遊ばさゞ其の眞實よりして終に又御通ひもありし時ゝ其御惱みてゝ如何遊ばすぞされば御心を取直し給ひて浮々と遊ばせば御疾病も御平癒あるなり夫に付世に貴き聖の言し詞に抑々彌陀の五佛とて彌陀觀音勢至地藏龍樹の中を信仰そる者ゝ病氣平癒疑ひなしと豫てより聞侍れば此五佛を御信心ありてお藥を召上り給へと申ければ鹿野女ゝやをらに枕を擡て宣ふやう「此程から其方を初め皆の者が氣を悼め心を竭しての看病嘸分らぬ女子と輕蔑も有んなれど自ら迎見る影もあき身の斯まで有難き出世を顧みて假初にも太子へ悋氣がましき事なきやうにと責る心の困じて思はず此病ひとあ

りしが今其方の語りたる其御佛を信心して平癒を願ひたしと宣ふを局は嬉しく倘も進みよりて「ろはよき事かお其五佛の内にも觀音ゝ三十三躰の分身ましますゆに千手に變じ給ふ時ゝ地獄道の三障と破り正觀音と變じ給ふ時ゝ餓鬼道を救ひ馬頭と變じ給ひては畜生道を助けられ十一面と變じ給ひてゝ修羅道と救ひ給ひ準眠と變じ給ひては人道を助け如意輪と變じ給ひては天道の三障を破り給ふとなり是を即ち六觀音と申と事細やかに述ければ鹿野女は聞て點頭給ひ「成程〳〵觀音の誓ひ寔よ有難く五佛の内何も尊けれど地藏菩薩ゝ自らの身替りに立給ひし事も在せば先此報恩を營ん父母の菩提をも吊ひ度と心に忘れやらねと何を云ふよも宮仕への身ゝ唯心に思ふ計りよて仇に光陰を過しぬると嘆給へは「偖ゝ左程に思召ゝ早く地藏を御信心遊ゝせ此御佛ゝ殊更に女子を護り給ふと聞く抑〳〵地藏にゝ十種の福と申て第一に女人產泰二つよゝ自根足具三つにゝ衆病悉除四つにゝ壽命長延五にゝ聰明慧智六ゝゝ財寶榮愛七にゝ愛敬八ゝは米穀成就九には神明加護十には大菩提を證すと申せゝ此御佛の名號を千遍唱認て紙千枚へ認むれば百万遍の名號となる之を海川へ流す時ゝ一切衆生の果敢なき亡者も此名號の功力よて普く成佛する太善根とう承れゝ之

れを念願爲し給いゞ其利益によりて貴方樣の御疾病も癒竟にい太子の御胤を宿し給いゞ御壽命長久の基ひなり殊に承いれい太子樣九才の御時の事かとよ鬱頭覽院へ移らせ給ひし時仇し野まて已に御最期共なるへきを優陀夷夫婦か地藏菩薩と一筋に信仰せし薩陲の誓ひに御命にも恙なく十善天子の若君と愛度御繁昌遊いさるれば自今其御營を思ひ立給へと勸め進らすれば鹿野女い自ら氣を勵し漸くまして起上り其身と硯りを清めりゝやをら机に打向ひ給ひて地藏菩薩の名號を千度唱へてい一枚認め日を重ねりゝ已に千枚認め畢りて自ら手箱へ詰給ひ之れを川へ流せよとてお側を勤むる女中へ其使を仰せ付られける然ばお使の女中達い外珍敷悅ひつゝ供人召連迦毘羅城を立出て邊りなる川の橋へ赴きて携へたる彼の名號を手まく取て一握りつゝ亡者の爲に投施こせバ風に靡きて飛散る形勢い宛然時ならぬ雪かと受取囃す人もあり又た慈悲ある人は此の善根を深くも愛て俱に佛心をそ發すも有ける間話休題月景殿にい轎曇彌の徒然を慰る侍女共か戯れ笑ふ折柄に御庭の扉を叩く音あり皆々い耳立聞ければ男の音聲に違ひなし這い何者と女中達四五人パッと立出て見れい一個の雜式にて白丁烏帽子とかけまくも賢き雲井の御庭口殊ま奥向男禁制の掟を破

りし曲者なれば取逃そなと各自が疾くも長刀押取て馳往く中まも年重なる女中詰寄つてヤア其處な曲者逃る共逃さじ御前間近く入來りしは若し表御門を守る新參の雜卒まて不案内に踏迷ひ此處とも知らず來りしか但し又樣子あつてか返答せよ次第ま依らば生ては返さぬ掟なりイザ有やうに白狀せよと最も嚴重責問へバ流石の男もおづ〳〵と砂に座を組取圍ミし女中に向ひ手を上て答ぬるやうイヤ我等は雜卒とやらがつしきとやら云ふやうな者でいなし遙以前の事なるが淨飯王位につき給ひて千五百人の宮女を抱へられたる其内にて好容夫人と呼るゝは現在我妹なれバ越方より度々會に來たれ共會ふべき便りを得されいころ更に便宜も分らぬ故南門の番人に酒飲せ烏帽子白丁を假初の衛士に擬して來た上は淨飯王ま會ぬ内い歸らぬ故疾く取次でたもれと投出すやうに言ければ各自互ひに眼配して逐除んとする後の方ヤレ須臾女共と轎曇彌の方い階前に出給ひて宣ふやう如何に其者此方へ近ぬと呼せ給ふに女中達うち駭きつ目引袖引手持無沙汰に見へける内轎曇彌い件んの男を急度見て开も汝ぢい何者ぞと索ねらるゝ詞の下に是ぞ豫て聞及びし轎曇彌なる可しと男い膝を着直し我等い淨飯王の由緣の者此處まで來りしい外ならずチト賴み度事ある故と粗忽の詞と

聞兼て女中達口々に此處な下郎の分際にて辱けなくも十善天子の由緣の者とは粗忽千萬憂目を見せんと立掛るを轎曇彌の方支へ給ひて如何にも女共の申す通り由緣の者とい聞棄難し夫なる下司よまづ包ミ隱さで仔細を語れと宣へばハテ最前も云ふが如く好容夫人の兄なれバ遠慮せずに此處迄と言せも果ず轎曇彌い成程思へい過つる年千五百人の宮女をい召抱へられたる其内に好容と申すは妹摩耶の侍女にて有けるが摩耶か逝去の其後は青龍殿の女子共い上下の差別なく咸々御暇を下されたるに好容のミ宮中に殘り居るべき謂なし前後合ぬ事を申さば憂目を見せんと呵り給へは彼の男い冷笑ハヽア此方い未だ何にも知らぬのか「知らぬといろりや何をサア知らぬか佛に語り聞すも罪なれど言ねば此方の依賴を聞まい必ず〳〵我口から聞しとい云ぬべからず今言れし如く摩耶夫人の侍女を勤めたる我妹は何の間にやら淨飯王の情を受雨風立ぬ戀の海に夜な〳〵忍びて引綱のいとし可愛の積りてより摩耶夫人の逝去の後い女中殘らず暇の出しも好容のみい唯一個この月景殿の南の臺破利舍那殿へ移し置割なく通ひ給ひし故頃日は安々と太子を產落し名をも難陀と申つゝ優陀夷の子息槃特を是に付置るゝ事までも我委曲に知りたる故妹の緣に結ぼれて淨飯王の由緣

の者と言たるが誤りか是を告たる上かゝい莫大の褒美の黃金を取ねばならぬサア金をと手を差延て何の遠慮も荒男の詞を篤と聞給ひて初めて悟る轎曇彌偖はと計りに打點頭忽ち詞を改めて如何に夫なる男下郎と見侮りしい此方の粗想願ひの趣き逐一に聞屆たり然ながら其体にてい縱へ帝に由緣あるとも披露は成難ければまづ今日は立歸り此後衣服を改めて夫々の供を召俱して表向參內あれ其時い自らが帝へ執成進らせて金いおろか一廉の國王にも取立ん此儀得心あるならば少しも疾く歸られよと理の當然に込られて再度返す詞もなくさらバと返答て件んの男い元の路へと立歸る後見送らせて轎曇彌は一室の內へ入り給ひ本意なきさまにて宣ふやう今日と云ふけふい思ひも掛ぬよしなき事を聞侍り心に懸る一苦勞よもやとい思へ共過し頃より帝の素振御通ひの絕へたるい實にもと思ひ謀らるゝ若し去事の有ならば帝は隱し給ぬ共優陀夷夫婦や命婦等が密に告て呉べきに情なしと嘆ち泪に暮給へバ居合す局聞兼て其れ恨ミはお道理なるも手前抔い夢にも聞侍らず思へば聞へぬ帝のお心憎きい好容夫人よと心を汲ての執成を聞より轎曇彌は局に向ひ給ひ其方い何をか云ぞ帝い扨惜き好容をも自らが何で恨ふぞ世になき事にい有まじきと聊か苦しからね共斯る事の在

すゐら疾くより明し給いれば太子誕生の當日より其時々の御祝ひにも我一先ゞ計らひて宜が上よも宜やうに育申すに左いなくて深くも包ませ給ふを見れバ其後迚も嘸や又妾に愛想が盡給ひ後先だき事れもし給ふべし兎も角實否を聞度と宣へバ局は尚ほも進み寄り夫ころ最安き事ぞかし過し年摩耶夫人の供御の役を勤めし女あるか御逝去の後お暇となり今では靱師の夜叉軍士とか云る者の女房とありて名を吉祥と呼れ女の業に小間物類を商ひて此御殿い勿論破利舍那殿へも赴く由此者より密に虚實を承給いらんと云バ驕曇彌眉を顰めて如何にも其女い妹がまだ存生の折一二度會たる事もあり若し近き内に來たりなば此方へ潜かに呼寄よとの仰せを聞て局い承て彼の吉祥が來る日を予指おり數へて待つ程ゞ何心なく吉祥い戀の重荷ゞ引替て世帶の煙り細ければ女ながらに重荷を脊負其處此處と駈歩行心に染ぬ世辭阿諛も世渡る業と部屋〳〵の口を覗ひて殘りなく暑さ寒さの棄詞に待焦れたる彼の局は夫と見るより呼入れ〳〵頓て御前の首尾を偵ひ驕曇彌の御居室へ密に案内せし程に驕曇彌い吉祥を近く召れて破利舍那殿の光景を詳細索ぬ問ひ又御心の有丈を頼み聞へ給ひて此日い身の暇ゞ予賜はりける夫よりして局役に召仕れし伴んの女中を俄然に老女格に引上

られ是迄深く睦び給ひし優陀夷夫婦命婦まで何となく御機嫌ゞ合ず餘疎〳〵敷御擧動と成けるゆへ件んの人々い夫とは知らずゞ如何なる事の在するかと心に案事暮すも道理なりけり「然ば又破利舍那殿の好容夫人と申けるい初めい青龍殿ある摩耶夫人の侍女を勤め在せしが髪容爪いづれ不圖淨飯王の御意に適ひ折々〳〵の御戯れより漸次に御不便彌增て竟に此處へ移され給ひて此ほゞ太子を擧けり〳〵御名を難陀太子と呼れ給ひ御年已に三才にて殊に智慧賢くまし〳〵帝も一層愛給へゞ如何なる事の在まそにや驕曇彌の方ゟ親族へも ゟ誕生の ゟ廣なく唯ゟとぎにい優陀夷の子息槃特一人を附られて好容夫人の召仕迚も僅かゞ附置給ふゆへ乳母の心は心ならず同じ帝の御胤にても摩耶夫人の産給ひし悉達太子の ゟ威勢い人の敬ひ大方あらず現在の弟君い日蔭の花の如くにして何となく乳母迄が肩身狹きい疎ゞしと嘆つ中にも浮れ居る槃特は性質愚なれ共温和難陀太子ゞ侍きて ゟ意に背かず隨へば太子も又槃特ならでい常ゞ友と爲給いず隔てぬ中の戯れに太子い槃特を御膝元へ召給ひ是其方が名は何と云ふゞ聞まほしやと ゟ意あれば又しても太子樣がむづかしい事お尋遊ばせ私しの名いァノ「サァ何と責問給へば面赤らめて頭を掻差詰りしを見給ふより又忘れたるか

其方が名ハ槃特と云ふ今度は必ず忘れないシテ父の名ハ覺へて居るか唄々覺へて居りま
す共ホウ何と云ふ父さんと申すとわやなき答へに太子を初め乳母まで笑ひと催す高聲
に好容夫人も立出給ひノウ槃特幾度も敎へ置たるに最う忘れてか其方が父の名ハ優陀夷と
聞よりも槃特打點頭て懷中より書留冊を取出して繰披き那方此方を讀て見て成程父が名は
優陀夷私しの名ハ槃特太子樣ハ難陀樣と皆書記して置ましたと白痴ながらもわやけあき折
拂西に入りかゝる夕日の階上に差込ばうち開きたる座敷の內に居合す人の影法師脊丈も長
く疊襖へうつるを見るより槃特ハ叭と駭き立騷ぎて這は化生の物の來りしと逃れバ附添
已が影那方此方へ走れ共尙ほも附纏ふにぞかあいとと手と上れバ彼方も等く上る手の影ホ
彌々恐れを抱き居合したる乳母に取附て泣出せば乳母ハ可笑さ堪へ兼思ハず聲立笑ひしが
又槃特が心の恐怖ハ左も有なんと取敢ず障子を礒と締切ば槃特は歎息つきてアラ嬉しや曲
者ハ何處へか失たと座につく折拂彼の吉祥ハ例の如くよ小間物を携へりゝ部屋〳〵を廻り
て此處へも來にければ好容夫人の免しを受頓て涉居室へ進み入り何吳となく涉覽する內僥
倖四邊に人もなき宜折を見て轎曇彌ハ也久を密と差出せバ好容夫人ハ打駭き夫ハ寔り有難

や斯御久まで給ハりて睦び給ふ辱けなさ疾く拜見と封じ目を切て篤と見る程に初めよりし
て細密と打解給ふ文体よて太子を此方へ伴ひて疾く見せ給へ抔細やかに書認免て有けるを
讀畢り吉祥に打向ひて如何にも此御文章のやう自らが心にハ飛立程に嬉しく思へども帝を
さしおき奉り月景殿へ太子と倶ハは參り難し今よも帝の入らせ給ハゝ此御久を御覽に入れ
御免を受てこう直樣太子倶に御自見に赴くべければ夫迄の處は惡からず取繕ひて吳よか
し迚頻りよ歡ばしき体なる故吉祥も倶よ嬉しさを袖に包て退きつゝ其儘月景殿へと赴き
て好容夫人の御歡ひ云々なる由申上れば轎曇彌ハ夫ハ何よりのとぞかし然バ今より誰にも
沙汰おく破利舍那殿へ趣かんと仰せ給れバ己よはや日も暮たれバと中老の女中が留免進ら
するにも聞給ハで自らが思ふ仔細のあればとて俄然に夜の御步びよたゝ中老一人召連て破
利舍那殿へ趣き給へハ好夫人は難陀太子に添乳してはや寐給ひし部屋の扉を叩くハ誰ゾ
と侍女が開るを遲しと立入り給ひて轎曇彌は其侍女に打向ひ自らハ轎曇彌なりと仰せらる
ゝに打駭き思ハず平伏を押留めイヤ駭く事ハなし自らが此處へ來る事の前以て知らせない
兎に角と手重くて皆の者が心遣ひのありなんと忍びてよろ來りしあり然は此由好容にも傳

へて寐間着の儘よて苦しからねい鳥渡會呉よと言聞てと詞やさしく宣ふより侍女い好容夫人の枕邊へ走り往き云々と告申せは好容夫人は打駭き給ひ夜の物掻やり棄てゝ着替の小袖はや持と言ひゝ姿解なき姿にて太子を抱上起んとする程よ早輪曇彌い入り來り給ひて打解たる氣色にて「是何事も夜のと衣服を改るに及ひず太子も寐たらい其儘でと言つゝ徐々夫人の枕元まで進を寄り如何に久しや好容夫人不測に來りて嘸や嘸不審にも思いれんが更々訝る事勿れ今日ゟ以て申せし如く遠にも逢べき筈なれい如何ある事の譯ありてか帝を初め優陀夷夫婦命婦等迄も其方の身の上太子の御誕生さへ妾に包みしものなる故嘸れ事にも心うく思いるべきかと推せし故自ら問ひに來りしのと心易く思いれよと情も深きお詞を聞て好容夫人は我から耻て赤らむ面をえも上ず消も入り度其素振よ輪曇彌の方い尚はも打解て夫人の抱きし太子をい熟々と見給ひて夫なる和子い兼て聞く難陀太子よ在ますかテモ麗しき御裝ひ此方へ鳥渡抱かせてよと手を差延て抱取給ひ太子の顏に顏を附て愛し玉へい眼を覺し莞爾笑給ふより輪曇彌もいと〳〵愛給ひて余念もなき光景よ好容夫人は有難泪に暮沈て唯詞もおく差俯きて居る程に輪曇彌い太子を抱き暫時時を移しけるが如何にも別れ惜げにて今宵い我よ貸給へと宣へば夫人い叭と返答つゝ乳母を添へ暫時貴女樣に御養ひ下さらば尚ほ有難き仕合せとれつ〳〵申せは輪曇彌の方さらい此儘連返らん其方も何憚らず折々此方へ來られよ今宵の失敬お免しと暇乞して歹出給へい好容夫人只平伏て御粗末樣と言つゝも送り出んと爲てけるを輪曇彌いみたく押留太子の乳母引連て月景殿へ還らせらる然ば其明の日ゟ疾くも此事の帝へ聞へ殊に又優陀夷夫婦命婦等は彼の母子の事を是迄包こし面目なさ輪曇彌の御前へ出る事さへ最辛く互びに面と見合せて本意なき由を語る內優陀夷夫婦命婦まて輪曇彌の方の御召と聞より偖はと皆〳〵胸に釘先一先に優陀夷が罷出若し兎や角と有ならば包み隱さず有の儘に申上る外なしと少しも臆せずお前へ出れバ輪曇彌い難陀太子を是見よがしに抱き給ひて這い久しやのふ優陀夷此の太子を見知しかと差出し給へいや、優陀夷は何の返答もなく差俯ひて居たりしが稍ありて頭を上御前へ是迄包みしい重々我々が無念なりと云解んとする先を輪曇彌い押留めイヤ其分疏を聞ために此へ呼出せし義にあらず假初ならぬ若君の御誕生在ませしを妾へい勿論の事汝親族方を初先とし國中殘らず沙汰すべきに未だ其事の之れなきゆへに夫と急けと申さん爲め唯今これへ呼出せしなりと心

の恨みと詞に濁して夫となく警め仰せあれば優陀夷ハ謹みかしこみ是よりして難陀太子の御誕生を夫々へ御披露とぞ成にける御親族方ハ勿論殿上殿下の人々より種々の捧物大殿ゟ山をなして御祝ひを催せらる然バ優陀夷の女房命婦共ハ轎曇彌の御前へおづ〳〵に進ミ出好容夫人の御腹に太子御誕生の由を包ミし事の申譯恐れ入てぞ詫ければ轎曇彌の方も一通りハ呵り給へどさのミ執拗ハ恨み給はず御祝ひの日よりして好容夫人を表向に月景殿へ召出され何ゟ彼ゟと睦敷語り給ふに附屬も心易くハ思へ共御祝ひの其日よりして帝は更に月景殿へ通ハせらるゝ事もなく又好容の方へも入せられぬば是唯事にハ侍るまじと優陀夷は帝の御前に罷出て御意と問ひ進らせしに案の如く轎曇彌は破利舍那殿へ沙汰もなく音信しのミ成ず難陀太子を誘ひて月景殿に在ものから流石に麿とて面目なし返す〳〵も本意なき事なり誰が計ひて然る事を轎曇彌の耳ゟ入れしぞ其者の名を聞まほしと嘆ち給ふゟ優陀夷ハ平伏如何にも其御仰せ涉尤もにはいへ共秘す事ハ必ずしも露顯ると云ふ譬への如く誰云ふとなく風か便りに成ものなれば左のミ御心ゟ懸りてハ僥倖御中睦敷好容夫人の事なれば相も替らず御通ひ有て太子の御身の上何呉と語ひ給ハゞ轎曇彌の方もさのミ恨ミも宣ぬま

じ是非共御入りあれかしと那方を思ひ此方を厭ひ漸くに帝を勸め奉りて月景殿へ誘引參らせしに轎曇彌ハ帝を敬ひ頓て四邊の人を遠避帝に向ひて宣ふやふ如何に我君聞し召自らが過し年妹が腰胎の頃心に如何なる天魔破順が魅入てか罪もなき摩耶を深くも妬ミつゝ有れもなき事を仕出せしが不圖其惡念を飜して夫より後は深く嗜み愼ミて假初にも妬ミ心を棄たるが昔し一度不肖なる僻事ありし者なれば此程好容の身の上をお包ミ有ハ無理ならねど左のミ執念く自らを嫌ひ給ひて在してハ此方にて兎や角と心を竭す甲斐もなし最早れ伽も是迄なり免し給へと泪ながらに用意の短刀逆手に取直し疾くより覺悟ハ極め侍りぬ女の髮の目出度も誰を賴ミふ結ぶべき君の心に適はずハ少しも疾く狀を替尼法師にも成果て煩惱の絆を斷ち侍らんと云も畢らず手づからに髻を解んと爲給ふと帝ハ駭き押留めヤヨ霎時待給へ麿が心に何事も隔てんやうは無れ共好容の身の上を其方ゟ明さぬ上からは恨まらるゝハ然る事ながら唯今其方の懺悔の如く女子と云バ誰々も妬ミ心の有なれば若しも夫等の淺間敷事もや有んと疑ひて隱せし事は免してよ然ば是より太子をバ其方の者と養育し好容と睦敷親み給ハゞ如何計りか麿か心の歡びぞ疾く心を取直して酒宴ゟても催し給へと最懇

切に諭し給ふ詞をしほゝ轎曇彌は嘆ち泪も今更ゝ辱け泪を拭拂ひ噫勿体なし冥加哉果敢なき心に浮ミし事幾重にも御免あされて下されかし仰せの如く難陀太子を此方へ移して自らゝ養育せさせ給いふば自らか下々への聞へも惡からず侍るかし彼程までゝ厚き御恵の御心に在しませば餘も此方をバ恨ミ給はで是迄の事共は打棄て此後い必ず〳〵隔て給いで御目懸られて給いれかしと掌ろを返すより疾くも心打解給へバ帝もいとゞ御氣色能俄然に御酒宴と開かれて其夜は娜く語ひて割あき枕を並べつゝ如何なる夢をや見給ひけん○烏羽玉の羽色に成て可愛ひと啼て渡れバ可愛くて成ぬ烏の月の夜もならばなくして戀の闇夜明ぬ國の何迄と男持身に明の鐘聞もけらしなくざかけの野暮な口から衣々い眞ゝやるせがないわいな一人寐る身の夢でさへ本にやるせがないわいなと侍女共が口々ゝ氣も氣散じに浮れてふ謠ふて通ふ長局い女子の島かと疑いる折柄遽敷侍女一人奥の詰所へ走り來て優陀夷の女房に打向ひ唯今お玄關先へ案内して未だ見知なきお客様が數多の供達にて御入りと報知を聞て優陀夷の女房开い誰君の御入りかまづ是へ御招待粗忽なきやう計いれよと言附遣はす程もなく一人の武士長上下を踐さいめかし大小閂ぬきに差こなして案内に連て打通り上

座ゝなほれバ優陀夷の女房禮儀正しき挨拶に件んの武士咳きしつゝ某しい好容夫人の兄夜叉軍士と云ふ者なり先以て今回難陀太子御誕生の御披露人傳にて承いり何より以て珍重の儀に候依つて其御悦び旁々轎曇彌の方へ面談の上淨飯大王を初め悉達太子難陀太子へも近附申度是迄推參致せりと左も尊大に述ければ女房は頭を傾け須臾返答もなくして心の内に思ふやふ是迄竟ひゝ名も聞ぬ武士なれど如何ゝせん好容夫人の兄となれば此儘にも歸されず迚時暫お扣へ召れよと云つゝ退きて一室へ走り往き轎曇彌の御前へ出て云々の由を申上れば轎曇彌にい點頭たまひ成程其者を其方い知らぬ筈自らい一度對面せし事もあり定めて今日來りしい願ひ望の有つるならん唯今ゝも帝御目覺給いんには渠が身の上逐一ゝ自らが申上ん暫時それにて待遇との仰せゝ女房叭とい言ども不審解ねバ好容夫人の居室へ赴き云々の由索たるに夫人い打駭き成程妾ゝ其名を呼ぶ一個の兄の有けるが幼稚より心曲不良事のミ働きて多くの人を惱す事の度重りて兩親の意見も更ゝ用ひねば彼の身年廿歳の頃永く勘當致してより久しく噂も無かりしが過にし頃人傳ゝ聞バ衣服さへも肌薄き襤褸を纏ひて行吟ど未だ心をば取直さず人を損ねる身の放埒其不良沙汰を聞度に双親いあられぬ泪は

瀧あす雨產れ損ねし子を以て世間を狹く身を詰て老ての苦勞も那奴故と恨をてい泣悔てい
悲を世間に非業ゐ死せし人の有と聞時ハ若や又那奴か業でハあきかと案ずる親心頃日妾
も心附提婆の家臣ゑ若しや又成もやせぬかと案せしゑ唯今のお詞に大小たばさみ衣服正し
く供人召連來りしと聞て少しい心もおち付侍りぬ一個の兄上譏るい惡き事あがら不良者ゑ
候へバ程よき樣に云做して帝を初め奉り轎曇彌の方へも御紹介い御無用なり若しも後日に
如何樣の事の出來たる其時は自らいいふまでもなく連ある親も面目無し此儀宜數賴入ると
事を分たる悧發の言ばに女房も左ありと點頭て然バ宜に計ひ申さん必ず案じ給ふなと言ハ
ヽ頓て轎曇彌の御前へ出けれバ已にはや彼の者に御面會の色めき有を先と押留好容夫人の
物語り云々の由を詳かゑ告知らせ進らすれゑ轎曇彌い聞給ハす現在好容の兄と聞上い縱
へ好容は夫よもせよ自らが打棄てすげなく返して遣さらば人も譏りて我名を下さん夫い扨
置き太子逆舉けし者の兄とあらば相應の恩賞を與へ得さす共さのみ帝の御呵り有べく共思
はれずと宣ふを女房は兎も角も私しに御任せ下されよと無理に押留て退きつヽ軍士の前へ
再度いで是ハ〳〵其方樣よい嘸お待遠樣折惡數今日い淨飯王轎曇彌の方も聊かすぐれ給い

ねば御寢室へ引籠りて在する故御對顏成難き儘私しより御參內の御挨拶宜數ゥせとの仰せ
なりと述るを待ず夜叉軍士頭と左右へ打振てハテ姦しひ女の口喧言ば今回誕生の若の爲に
いこれい伯父なり其者を餘りと云ば輕卒なり旁々以て心得ず尤も過し頃不圖轎曇彌に面會
の節後日參內せし時は莫大の恩賞あるべく一廉の國王にも封ずべきとの確實な詞今更反古
よも致されまじ先面會い兎も角も此返答を聞度と眉毛動す高聲に女房い太く待餘し夫れ等
の事も此方より評議の上にて沙汰せんと賺せゑ更に聞入ずイヤ面倒な轎曇彌ゐ直談せんと
携へし菓子折引提刀押取て立上るを無理に留る襖をバ無理に穿開入らんとする途端ゐ入り
來る優陀夷大臣即ち帝の御名代右梵士太郎に包を持せイヤ待れよ夜叉軍士即ち帝の御名代
優陀夷是にて面談せんと詞嚴肅遮られて自體い弱き下司の本性おづ〳〵元の座に居なをれ
ば優陀夷重て詞を正し今回若君御誕生の御悅びとして自身の參內帝にも御滿足某しより其
挨拶宜しく申せとの御事にて即ち此一臺は淨飯王より其元へ贈らるヽ時服一重些少あがら
受納して歸宅せられよと言ふがら差向られて不足面イヤ是優陀夷殿假初ならぬ今回の御祝
ひに是しきの禮物を貰ひに參內致せしにあらず妹が因緣にて親族となれば帝を初め太子迄

に杯の取替せも有たる上にて引出物には一塵の國の王ゐも取立らるゝ筈の處高が時服の二つや三つ欲くば此方より贈るべし慾に眼を眩參内いせぬ眞實を以て來た上よは贈り物い請取ぬ帝へ面會適いずば太子なり共會すべし若し然る事も成ぬと有ば妹好容を引連て歸るべしイザ二つ一つの返答い如何である優陀夷殿と最荒々敷言けるを優陀夷い聞て冷笑ハテ囃噪めかしひ其顏巧みの尻を搔れぬ中に先暇申て早歸れ長居を爲ば物種の命の程い覺束あしと言詰られて心の內小氣味惡くは思へ共今更引ていい歸られず何卒巧みを整へんと詞態せず又云ふやうイヤ聽惡き其挨拶巧その尻のはげぬ中とは云も如何なる言分ぞ「然ば其元の目論見と詳かに言聞さん靱師の夜叉軍士退り居れと星を指れて流石ゐ吃驚然ゑ面い素知られ顏「靱師の夜叉軍士とい开りや誰事ぞ己れ未たも僞るか好容夫人の兄なれゑ親にも永く勘當せられ今い靱師になり下りて下司の營み野山へ出て猿熊を打取て其皮剝て活計とする襤褸の容に假初の借着の衣服大小に供人大勢連たるは不審解ねば是に居る右梵士太郎に見せしめしに其供人い過し頃悉達太子迦夷衛國よりの還幸を待伏して右梵士太郎と戰ひし達婆が手下の者なれば早腹中の巧みの底を見極められたるとい知らざるや茲ゐ人非

人めと睨付られて夜叉軍士い忽ちに齒をなしつゝ側に有合白木の臺の時服をば礑と蹴飛せば包ゝ解て中よりい時服と思ひ掛も無く軍士が常に着馴たる襤褸の小袖見るれば適がの軍士も堪り兼能くも謀りしと思ひしに何時か是方が謀られしか早是迄と切掛たる刀を優陀夷い引外し身を替すまの二の太刀既に右梵士が眞甲へ切付んずと振上るを優陀夷い後より腕を掗と取留たる其隙に右梵士は差添扱を見るよりも優陀夷須臾と押留め此奴い助る者ならねゑ假初ならぬ好容夫人の兄とあれゞ是非ょ及ばず唯戒めて逐拂ふべし夫れと言れて右梵士い直と立て軍士に打向ひヤイ己れい好容の兄ありと雖ゑも豫てより勘當を受たる身なれゞてう親い勿論兄弟の緣い切離れて今い山賊同前の世渡りする其淋しき心よりして達婆太子よ組し此宮中へ姿を替入て膽太くも事を爲んとする面魂ひ然ゑ我帝い聖賢ょして仁心深く在ませゞ命を助け給いすると云つゝ大小上下剝取て件んの襤褸を着せ替て开が儘ゐ追出さんとする所へ女房の吉祥馳來り優陀夷に向ひて手を拱へ是は私しの良人もへ何卒手前へ御預下されかしと種々に詫けれゞ僥倖の者來りたり迎階下へゞ放ち遣り優陀夷い右梵士引連て御前へ赴く此方には吉祥が軍士の胸元確と押へて泪と共に恨を言コレョ人でなし鬼よ

蛇よ路にて様子は殘らず聞たり大悪無道の達婆に組せしと云露知らず日頃外をば内にして戻らぬ故よ今回も十日廿日も寄付ぬを氣にも懸ずに居る内に此形勢ゝ何事ぞ辱けなくも此宮ゝ妾が宮仕して深く御恩を受しのみあらず現在の妹が結構にも召仕はるゝを何が不足で此働き心を素直に持ならば妹の陰にて格別の取立にも預らて私しも今の下司の業さらりと止て髪方立派に夫婦が暮そものを幷も連添し初めより不良心と知りあがら何様した結ぶの神達の結び合した縁なるか竟したとの酒宴よ不圖相初て夫よりゝ夫婦となれば其日から更に内には落付ず朝夕貧しき營みに小間物類を商ひて少しの代よ煙りを立操を立て居る者を必强やと泣口説を軍士ゝ蹴倒し冷笑ひヤア姦しひ哭面哉親の意見も聞ぬ身が女房は愚何奴が何と云ふ迚も淨飯王へ面談せぬ中ゝ何かな歸らぬとりや對面をと側に据たる菓子の一箱携へつゝ襤褸の姿の其儘にて奥を目懸て徃んとすると女房ゝ遣らじと支ゆれ共爭男の力に及ばん然共女の一念力やらじ徃んとせりあふ内軍士が持たる菓子の箱水引切て中よりばら〳〵と落ちる菓子を吉祥は屹度打見やり是れが此世の名殘ぞと三つ四つ口に入れ尚ほも怯まず挑み合やうやう放せの幷が内に吉祥忽ち手をもがき吶かと据れば口よりゝ五臓六腑惱亂の血汐を吐きて噫と計りに苦しげなる聲諸共に倒るれば大膽不敵の夜叉軍士も這ゝ適ゝしと階下なる椽の下へぞ忍びけるとゝ知らずして優陀夷大臣後に續ひて右梵士太郎は好容夫人を誘引て立出て見れば吉祥ゝ手負よ成て居ける故這ゝ何故と勞れば吉祥最期の聲幽に噫勿体あや此淨殿を穢し奉る偏よ淨免し給れかしシテ又私しが懺悔する身の越度の一通りを轜曇彌の淨方初め好容夫人の御方にも一通り御聞届下さるべし過し頃良人軍士が大悪無道の提婆方よ組せしとゝ露知ず此宮の何彼の御樣子を寐物語に聞るゝ度迂濶〳〵と月景殿の御光景破利舍那殿の御樣子好容夫人難陀太子を產給ひし事共まで夫と知らねば打明て語り聞せば其通り私良摩國へ赴て內通したる耳ならず先つ頃大膽ある月景殿へ忍び入り轜曇彌の方の御前ゟて好容夫人の光景を口に任せて逃れゝ是より帝を初め奉り附人迄も御不興讓せしも元を押ば私しの口よゝ出たる事ぞかし其分疏も何とせん女の口のさがあき故と悔みて返らぬ其中よゝも唯嬉しきゝ轜曇彌の方と好容夫人と睦敷御媒妁を致せし者から一度帝の激鱗ゝ是ゝり迚も竟に又御憓解て愛度御中我計ひの事なくゝ御悼ゝしくも難陀太子ゝ尚何まで日陰の御身是程迄よ私しが思ふに引替軍士が心一途に達婆に方人して

何故に付ても悉達太子の御身の上を害せんと耳謀りぬる良人の敵に女房が心を盡して味方に付良人の咏方の達婆をバ女房が敵と恨むある夫婦の心が彼程まで合ぬと云ふも宿世の因縁妻ハ良人よ隨ふ理を讃りて此宮を敵にせバ此れぞ不忠の第一あり夫れ已ならず此年頃身の渡世とハ云ながら多くの猪猿を打殺す其報ひハ何處へか往くべき頓て夫婦が身の上に廻り來りて此上にも如何ある憂目にや合んと手づから食し此菓子は夫と悟りしに違ひなく毒藥の品ありき妾が最期を御覽じて良人と異なる證しぞと御推量下されよと理り迫て憐れなる其詞を聞よりも輪曼彌ハ一室の內より走り出好容夫人と諸共に憫然の者と寄り添つゝ勞る中にも好容夫人ハ我現在の嫂と初めて聞て取縋り是迄は商人の女子と呼たるも知らぬ故とハ云なぐら一つハ兄の放埒よりのことあれば免し給へと自ら迎寔に强面男よと恨みあがらも血統の縁去るに切れぬ妹とか幾重よも詫まするのふ姉上と手を合せいとゝ泪よ暮れけば輪曼彌ハ詞を改め疑ひ晴し吉祥よ夫に異りて是迄に致せし忠義の其志しハ山に積其よも盡ませし心憾に持れよと聞が此世の暇乞其儘其處よ息絶へたり傍右梵士太郎は軍士の踪跡へを彼處此處と索ね廻れも陰ざに見へず剩へ召倶したる供人も何の程にか逃亡て一個も

殘る者なければ手を空しくして立戻り又吉祥が事どもを具に奏しければ帝は且憤り且歎き給ひて此吉祥こそ摩耶夫人存生の節ハ何暮となく懇切よせし者なればかた〴〵今回の忠死を賞する爲に亡骸を厚く埋めさせ禮をも重く葬るべし又軍士が惡業は甚だ以て憎き者あり假令好容が兄あり共踪跡を詮議し召捕へ嚴重糺して其罪に行べし必ず忽よする事勿れ總て善を勤る者ハ其志しを厚く褒美し又惡事をなす者ハ嚴敷警るを以て政事の正しき道とぞ云ふあれバ夫々の者へも付軍士ハ勿論其同類の曲者あらば洩さぬ樣に取押へ急度罪に行へかしと善惡正しき仰せを蒙りて優陀夷ハ御前を退きて直ちよ吉祥の亡骸を懇切よ取置せ之を御菩提所の片邊に葬らせ夜叉軍士の踪跡をバ夫々へ相觸て嚴敷索ねさせよける

釋迦八相倭文庫八編終

去程に破利舍那殿よ淨飯王の忍ばせ置れし好容夫人の形勢に思ひ依らさる夜叉軍士のさがなき心より輸曇彌の御耳へ入り一度ゝ恨み嘆ちしが禍ひ却て福ひとなり難陀太子の御身の上も已に陰所を出給ひて時節の御祝ひも輸曇彌の計ひにて悉達太子の先例に異ならねば淨飯王を初め奉り好容夫人の御悦び限り無く難陀太子も輸曇彌を妾腹母の如くに慕ゝせ給へば輸曇彌も亦深く愛して月景殿に留め置て更に破利舍那殿よ返し給はざれば好容夫人ゝ御機嫌伺ひとて言做して日毎〳〵に月景殿へ伺候り給へば輸曇彌も亦新宮の兄君悉達太子の御元へも難陀太子を伴ひつゝ折節音信し給へば悉達太子も無隔意て語ひ給ひ又好容夫人へも厚く詞を懸させられて數多の召仕を集められ種々の遊戯れよ光陰を消して御兄弟の淨中殊に睦敷く月景殿ゝ云ふよ及ばず破利舍那殿新宮の三所に往き來ふひ中共も互ひよ深く睦み合勇み〳〵て宮仕をする夫れにゝ引替へて物憂ゝ悉達太子の伽を勤むる鹿野女瞿陀彌の兩姫あり兩姫は如何程に我れと我身を顧みて嫉妬かましき心ろをば固確嗜みて色ゐは見せじと豫て意中に誓しも流石凡夫の淺慮さゝ君を戀慕の深きより又もや心の猿の狂ひ來て那方

ゝ此方〳〵ゝ那方を妬みつゝ夜の御泊りを爭ひて我一着鞭く御胤を胎さん者をとむらぎもの心に焔を燃す者から如何に善根功德を盡すと雖も此瞋恚の焔に燒棄られて其甲斐もなく妬の焔を秘さんと爲れど花の笑顔にゝ自ら其色の現るゝにや悉達太子ゝ只管よ耶輸陀羅女の方へのみ御枉與ひ遊せられて殘る兩姫君を召給ふ事も無りしかば優陀夷の女房取扱ひて二姫の姫をも折々ゝ御伽に召るゝやうよと種々に勸め進らすれば太子ゝ否ませ給ふ御容顏つきゐて兎も角もとのみ宣ひし故尙ほ兩侍女の御心を無狀く思へ侍ば輸曇彌の御前へ出て密に云々なる由を告ヤせしかば輸曇彌も亦密に宣ふ由のありければ其御詞を取次がんとてふたゝび太子の御前へ出て此程輸曇彌の方の仰せにゝ日外も示し置たるに如何なれば左まで片落にも耶輸陀羅女のみ御伽よ召給ふぞや若し二個の姫に不肖の事しも有ば包み給ゝで箇樣〳〵の事ある故に嫌ひ給ふと仰せ聞給へかし夫れ聞し上よて兎にも角にも計ひて御伽の役を廢んとの事此儀如何よ在しますやと詞かしこく申上れば太子ゝ御顏を暫時反けて在せしが稍有て宣ふやうイヤ女房麼よ於て何條片落に耶輸陀羅女のみを招ぐ事の有べきぞ然る故よ先に其方にも二個の者を兎も角もと言しゝ何れも隔なく語ふと云ふ麼が心なり此

儀を以て月景殿の御前宜敷沙汰せよと心と口の裏表夫れとは知れど女房ゐ其儘仰せを畏みて夫より後ゐ耶輸陀羅女鹿野女瞿陀彌女三人の妃を太子よお勸め申上て交るゝに召せけれ共固よりも鹿野女瞿陀彌ゐ深く心よ染給はねばお伽の夜半ゐ更よ又樂し氣なく在つゝ耶輸陀羅女の侍く夜さは酒の莚も一層酣に他の見る目も目立まて寵愛ませられけるゐ全く耶輸陀羅女の容貌の優たるよ恍惚給ひし故には非ず抑々耶輸陀羅女は天性容顏麗しき耳ならず親の教育の嚴重よや身を嗜そて悋氣の心なく人を侮らず情深く坐ます故召仕ふ局給仕婢女に至る迄も心を付て勞給ゞ他の局給仕迄如何にも優しき姫君と噂して取囃し彼程よ多き姫達の召れし中にも唯一人擇好るゝ身の冥加とゐ那の姫の事ゞかしと皆口々に羨そぬ儕耶輸陀羅女の年齡も氷の出花の色盛翠張紅閨割りあき御契りも度重る儘に此程ゐ御心地例あらされば御病氣にも在ますかと醫師を召て御容体を伺ゐせけるお御病ひゐ思ひも依らず如何にも愛度御腹胎に極つてけと言上するよ聞召より太子ゐ雀躍爲給ひて這ゐ幷も眞實か歡びしと勇み給ふに耶輸陀羅女も俱に我身を掻抱き太子の御胤腰姓しとゐ如何なる神の利益にやあら冥加なる我身かあと勇み立て優陀夷の女房命婦へも事の由を即座に知らせて歡び給へば宮中の嘯大方ならず是よりして太子ゐ益々耶輸陀羅女をお愛み遊れ片時も御側と放ち給ふ事あければ愈耶輸陀羅女の譽れの勢力ひ旭日の昇るが如くに待遇囉されて帝よりゐ渉歡びの使者に優陀夷を遣ゐされ輪曇彌よりゐ優陀夷の女房を以て贈物下されつゝ倘は仰せ遣ゐさるゝやう太子一度十善の位を見棄て發心報謝の道お只管入り給ふ所なるを此宮中に御心留りて萬乘の位を繼せられ政事を知し召ゐ全く夫人達の侍き宜が故なりき中にも其方は一疾く御胤を胎し進らせし事國への聞へ萬民の悦び此上や有べき尚は注意て身を大切に守り頓て安產の時をぞ待つべしと細々と御心の程を落もなく述けれゞ耶輸陀羅女の心の內の歡こびゐ何に譬へん方もなく嬉しき儘に御答をぞ述たりける然に其夜の事なるが悉達太子ゐ耶輸陀羅女の許へ御枉興ひありて打臥し給ひし御夢に不測や御枕邊へ過し九才の御時鬱頭覽弗の院お出て番僧お誑かされ給ひて淫肆の廓にて詞を交せし傾城の婆須密多女忽然として禍褰取現れし其容姿は以前に百倍して面貌ざし髮容の穠なるゐ侍く三人の妃も及び難く其裝ひゐ宛然盛の牡丹花の筒に一元水を吸匂ひ漏洩如くにて氷際立て懷中へ差入る顏の麗しさ邊りまばゆき折ころあれ頻りお名香のかほり薫じ來て心を動す其

樣ゐ上天の春も斯やと計り疑れつゝ夢心に太子ゐ問せ給ふやう如何ょ夫れなる遊君は昔麿が九才の時質なき者に詐かされ通ひし淫肆の廓にて詞を交せし者ならずやと宣ふ御聲に遊君ゐ面を上て點頭つゝ如何にも仰せある如く自らゐ淫肆の遊君婆須密多と予す者と聞も畢らず太子にゐ斉ゐ如何爲て其遊君が此奥殿へ誰が免して何者の案内にて來りしやと問せも敢へず然ば誰にも免されす何者の案内ゐ受ぬやも君に語ゐん其爲に妾が一念の眞心より遙けき道をも厭ゐずょ他眼の關をひめ御前の大膳わも戀なればこそ參つて拜顏れば廓通ひ爲給ひし御時とは反對かゐりし御姿御年齡も艶々と娚て御粧ひ此ほど傳へ聞侍りしにお伽の妃達も多く出來させ給ひし由斯る上ゐ卑下なき自ら如き賤の女が問ひ進らす共餘もやゝ〳〵假初よもお情をゞ懸給ゐじと心で心を取直せやも情あや一度お姿を拜してより忘れ兼たる斉が上わ夫れ其時の仰せにゐ何卒正眞の佛菩薩を拜せ呉よと歎き給ひ母君摩耶夫人の御菩提を吊ひ給ふ御素志しの如何にも痛悼しく思ゐれて御望を適へ奉んと心を盡せし甲斐も無く替り易き秋の空強面君と放念め兼てお恨述に是迄も參り侍ると眼に針持て嘆つまゞ太子ゐ現に答へ給ふやう如何にも夫等の事の有たるか此程心に絶へたる仔細ゐ一度母摩耶夫

人の御菩提を吊はんと浮身を變して發心報謝の道へ立入らんと種々お苦慮しが爲る事爲こと我母の妨碍げとこそなれ中々に菩提の爲は思ひも依らず斉も十善天子の若君と呼れる身にてありながら鬱頭覽の院へ納たる奉加賽錢を盜取穢はしき傾城町へ忍ひ出是ゐ未だしもの上鬱頭覽の本尊なる左りの方に安置せし座王如來ゐ閻浮陀金と聞からょ此尊体を勿体なくも土か金かと疑ひて刀に懸し身の淺間しさ夜叉鬼神にも劣りたる逆事の吊祭ひに嘸や冥途の母君ゐ麿故尙ほも苦み給ゐんと身を悔て其分疏に仇し野の露と消べき命さへ又助りて是迄に存在て死ぬにも死なれぬ身の罪障佛身へ及をあつるゐ是れ五逆罪と謂くからに最早心の張も切罪も報ひも後の世も忘れ果たる身の置所只鬼畜と心得て假りの浮世の假りの宿器を去し其水ゐ再度元の器へゐ戻る理り有まと無し我罪科も其如く悔ひて甲斐なき不孝の舉動濡ぬ先ころ露をも厭へ今の此身の形狀は又有べき榮華共覺へずアラ心安き浮世かるアラ恐ろしの在世やと歎息しつゝ宣ふを彼の遊君ゐ聞敢ず是は又若君の御詞共覺へ侍らず夫れ此世界ゐ穢土と申て万の穢れ最多く又娑婆火宅共いふて佛の殘め給ふ世界あれば數多の佛菩薩たちも人間餓鬼畜生修羅天上地獄此六道を通れ安養の淨土へ赴かしめんと種々說

法爲給ふをバ君ゐハ未だ知し召ずや开も若君ハ假初の人間にてハおはしまさず即はち諸佛結緣して衆生濟度の其爲に生れ給ひし御身をば忘れ給ひし不肖さ過し年より幾度か天上の淨居佛姿と變て君に見へ示し諭せし事共を疾くも忘れ給へるか夢の浮世に心を留て恥る色なく侶俱に臭き體を抱きあふ男女の淫樂穢らはしや唯今若君の宣ひし其以前鬱頭覽の院の奉加賽錢を盜取或ハ座王如來の像を刄に懸て淫肆の廓へ通ひ給ひし不肖に御名を下し給此上の不孝ハ無きことを歎かるゝハ實に道理なりとハ聞ゆれ共其罪科と思ひしも是皆母君摩耶夫人の菩提の爲ゝは此上無き大善根夫を如何ゝと原れば是より遙後に及びて辱け無くも摩耶夫人ハ忉利天上に產れ給ひて帝釋天の后妃と成りて喜見城に住み給ふ事あり其時の宮殿の門扉ハ盡く金色の光りを放つべし這ハ御身が九才の時鬱頭覽の奉加賽錢を盜ミ取りて淫肆へ通ひて正眞の佛菩薩を拜し奉ふんと唯一念に亡母を慕ひ給ひし功德に因つて再來の摩耶夫人が住せらるゝ宮殿の門扉ハ悉皆七寶となれり扨又れ身が刄ゝ懸し座王如來とやけるハお身が前生八千度國王と產れ又種々に產れ變りて人界ゝ出給たる內ゝ座王如來と現しを忉利天上の帝釋の自ら閻浮陀金を以て作らせられさるせ即ち太子前生の御形にて言ハ其身

を切裂ても母の亡後を吊ハんと思ふ志し有ゝ似たり又鬱頭覽の院へ諸方より寄進せし賽錢を番僧共が盜取其分疏と免れんと態と太子の取給ふやうに拵へ置て素知らぬ顏にて鬱頭覽に斯と吹聽せし者から鬱頭覽ハ唯呆れしが太子の淫肆へ持出せしハ此身に付べき金なるを淨身が遣ひ果せしゝ何の仔細の有べきや其罪科ハ惡僧共に有て太子ハ誠ゝ此上無き大善根となし給ふなり然ばあろなれ仇し野にて已に危ふき御最期を淨居佛の修行者となり給ひ御命を助け進らせ又其歸る途中にて出會しを僥倖に夢の浮世を諭し進らせたれは太子ゝハ深くも報謝を思ひ給へ共人界の塵に妨けられ十善の位を繼給へなバ諸佛の願も朽果ぬる社かなしけれ其後太子藍毘尼苑へ遊覽の時又もや淨居佛の現を出給花の散に事よせて老少不定ハ風前の燈火の如しと諭せし者を扨もまた果敢なく報謝を忘れ給ひ假初の愛着に惑ハされ火宅に心を留給ふかアラ疎ましや情なし妻子珍寶ハ身に隨ハず子ハ三界の首械ぞや疾く浮世を振棄て有七寶池八功德水安養の淨土へ赴くべし斯申す此遊君ハ衆生濟度の其爲ゝ淫肆の廓へ生れ變て夜な〳〵替る戀衣袂は多ゝ宿かして態と浮名をこぼせ共身は假りの世の假初に泪は鬻ど心まで浦の男浪の差手をば夜ハ引寄河竹の替る枕の色ならで柳ハ翠り花